公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告143

Ⅰ 太田遺跡（第15次調査）
Ⅱ 太田遺跡（第16次調査）
Ⅲ 太田川遺跡（第２次調査）
Ⅳ 恩智遺跡（第28次調査）
Ⅴ 恩智遺跡（第30次調査）
Ⅵ 恩智遺跡（第31次調査）
Ⅶ 木の本遺跡（第25次調査）
Ⅷ 久宝寺遺跡（第85次調査）
Ⅸ 久宝寺遺跡（第86次調査）
Ⅹ 郡川遺跡（第14次調査）
Ⅺ 成法寺遺跡（第25次調査）
Ⅻ 神宮寺遺跡（第２次調査）
ⅩⅢ 東弓削遺跡（第19次調査）
ⅩⅣ 水越遺跡（第12次調査）
ⅩⅤ 水越遺跡（第13次調査）
ⅩⅥ 水越遺跡（第14次調査）
ⅩⅦ 水越遺跡（第15次調査）

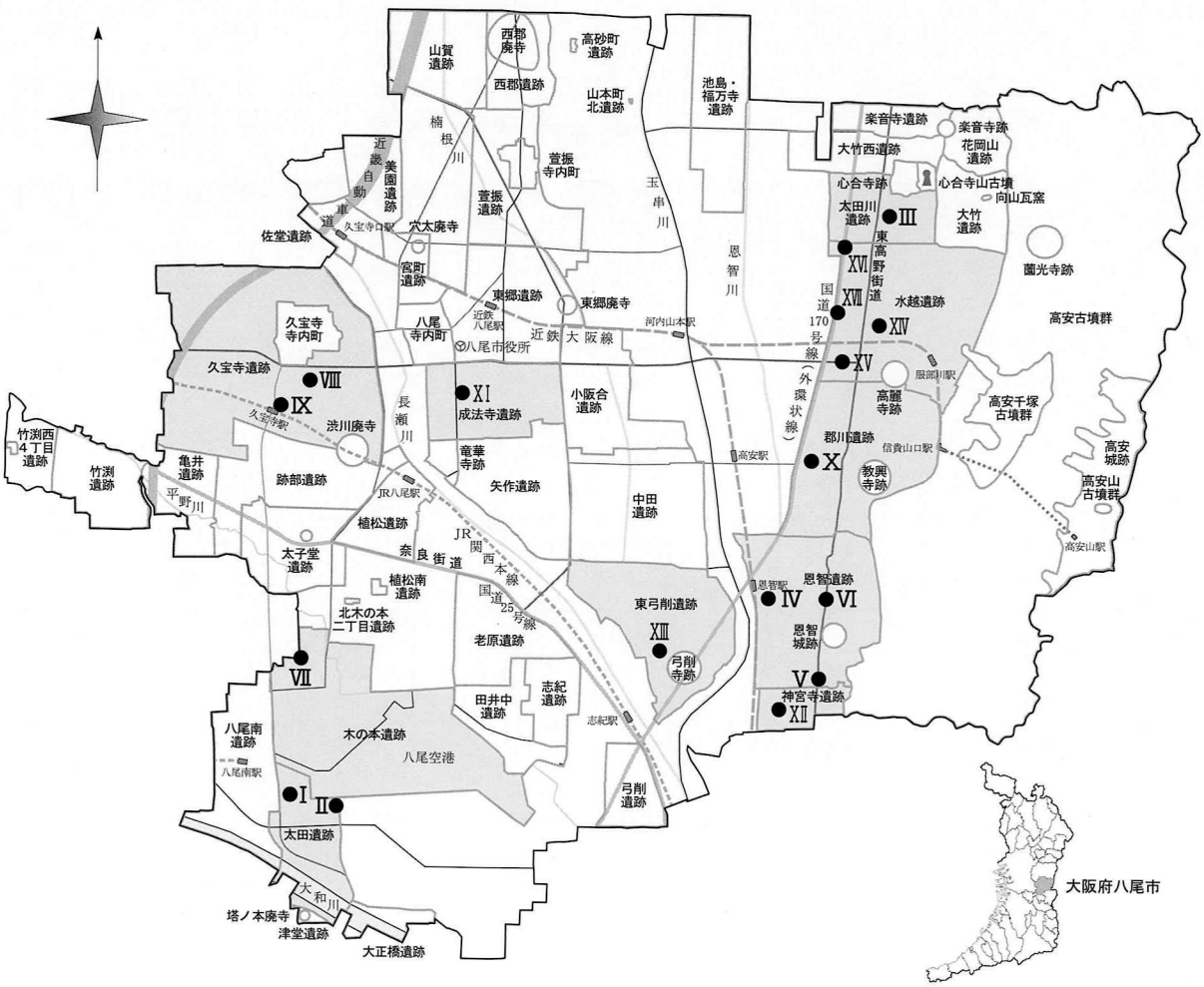
下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

２０１４年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

Ⅰ　太田遺跡（第15次調査）
Ⅱ　太田遺跡（第16次調査）
Ⅲ　太田川遺跡（第２次調査）
Ⅳ　恩智遺跡（第28次調査）
Ⅴ　恩智遺跡（第30次調査）
Ⅵ　恩智遺跡（第31次調査）
Ⅶ　木の本遺跡（第25次調査）
Ⅷ　久宝寺遺跡（第85次調査）
Ⅸ　久宝寺遺跡（第86次調査）
Ⅹ　郡川遺跡（第14次調査）
Ⅺ　成法寺遺跡（第25次調査）
Ⅻ　神宮寺遺跡（第２次調査）
ⅩⅢ　東弓削遺跡（第19次調査）
ⅩⅣ　水越遺跡（第12次調査）
ⅩⅤ　水越遺跡（第13次調査）
ⅩⅥ　水越遺跡（第14次調査）
ⅩⅦ　水越遺跡（第15次調査）

下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査



２０１４年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は、大阪府の中央部東に位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた山麓・丘陵先端から平野部にかけて立地しています。山麓や丘陵先端部には、古くは旧石器時代に遡り得る人々の生活の痕跡が点在しています。また、平野部では古大和川水系の河川が運び続ける土砂が厚く堆積しており、その中に弥生時代以降の生活の跡が連綿と積み重なっています。

このような先人達の残した財産－埋蔵文化財－は、市民が共有すべき財産であるといっても過言ではありません。しかし、市民生活の利便性や豊かさを追求するための開発工事は、一方ではこのような共有財産を破壊することが前提となってしまいます。そこで私どもは、開発工事によって破壊される埋蔵文化財について事前に発掘調査を行い、記録保存・研究に努めているところであります。

本書は、市民生活に密接にかかわる公共下水道工事に伴う発掘調査の報告をまとめたもので、平成24・25年度に行った10遺跡17件の調査成果が収録されています。いずれも小規模な調査ではありますが、縄文時代後期以降、中近世に至るまでの遺構や遺物が検出されております。本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成26年３月

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

理事長　西　浦　昭　夫

序

1．本書は、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が平成24・25年度に実施した八尾市下水道工事に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内訳は下表のとおりである。

1．本書で報告する発掘調査業務は、八尾市教育委員会と八尾市、及び当調査研究会の三者により締結した協定に基づくもので、八尾市教育委員会からの埋蔵文化財発掘調査指示書により当調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．本書作成の業務は、八尾市と当調査研究会で交した覚書に基づき、各現地調査終了後に着手し、平成26年３月をもって終了した。

1．本書に収録した報告は，目次のとおりである。

1．本書の執筆は各調査担当者が行い、全体の構成・編集は坪田真一が行った。

1．本書掲載の地図は，大阪府八尾市役所発行の2,500分の１地形図（平成８年７月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』（平成24年度版）をもとに作成した。

1．本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位（T.P.）である.

1．本書で用いた方位は座標北（国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕）を示している。

1．遺構名は下記の略号で示した。

土坑－ＳＫ　ピット－ＳＰ　溝－ＳＤ　自然河川－ＮＲ

1．遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、その他を白とした。

1．土色については、一部の調査を除き『新版標準土色帖』1997年後期版　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。

1．各調査に際しては、写真・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

平成24年度	平成25年度（平成24年度からの継続含む）
Ⅳ　恩智遺跡第28次調査（ＯＪ2012－28）	Ⅰ　太田遺跡第15次調査（ＯＯＴ2012－15）
Ⅷ　久宝寺遺跡第85次調査（ＫＨ2012－85）	Ⅱ　太田遺跡第16次調査（ＯＯＴ2013－16）
ⅩⅣ　水越遺跡第12次調査（ＭＫ2012－12）	Ⅲ　太田川遺跡第２次調査（ＯＴＧ2013－２）
	Ⅴ　恩智遺跡第30次調査（ＯＪ2013－30）
	Ⅵ　恩智遺跡第31次調査（ＯＪ2013－31）
	Ⅶ　木の本遺跡第25次調査（ＳＫ2013－25）
	Ⅸ　久宝寺遺跡第86次調査（ＫＨ2013－86）
	Ⅹ　郡川遺跡第14次調査（ＫＲ2013－14）
	Ⅺ　成法寺遺跡第25次調査（ＳＨ2012－25）
	ⅩⅡ　神宮寺遺跡第２次調査（ＺＧ2013－２）
	ⅩⅢ　東弓削遺跡第19次調査（ＨＹ2012－19）
	ⅩⅤ　水越遺跡第13次調査（ＭＫ2013－13）
	ⅩⅥ　水越遺跡第14次調査（ＭＫ2013－14）
	ⅩⅦ　水越遺跡第15次調査（ＭＫ2013－15）

目　　次

はしがき
序
Ⅰ　太田遺跡第15次調査（ＯＯＴ2012－15）……1
Ⅱ　太田遺跡第16次調査（ＯＯＴ2013－16）……9
Ⅲ　太田川遺跡第２次調査（ＯＴＧ2013－２）……13
Ⅳ　恩智遺跡第28次調査（ＯＪ2012－28）……17
Ⅴ　恩智遺跡第30次調査（ＯＪ2013－30）……23
Ⅵ　恩智遺跡第31次調査（ＯＪ2013－31）……31
Ⅶ　木の本遺跡第25次調査（ＳＫ2013－25）……45
Ⅷ　久宝寺遺跡第85次調査（ＫＨ2012－85）……49
Ⅸ　久宝寺遺跡第86次調査（ＫＨ2013－86）……55
Ⅹ　郡川遺跡第14次調査（ＫＲ2013－14）……65
Ⅺ　成法寺遺跡第25次調査（ＳＨ2012－25）……69
Ⅻ　神宮寺遺跡第２次調査（ＺＧ2013－２）……79
ⅩⅢ　東弓削遺跡第19次調査（ＨＹ2012－19）……83
ⅩⅣ　水越遺跡第12次調査（ＭＫ2012－12）……95
ⅩⅤ　水越遺跡第13次調査（ＭＫ2013－13）……101
ⅩⅥ　水越遺跡第14次調査（ＭＫ2013－14）……107
ⅩⅦ　水越遺跡第15次調査（ＭＫ2013－15）……113
報告書抄録

Ⅰ　太田遺跡第15次調査（ＯＯＴ2012－15）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市太田新町１丁目地内で実施した下水道工事(24－30工区)に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する太田遺跡第15次調査(ＯＯＴ2012－15)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。なお調査は平成24・25年度にまたがったため、平成24年度をその１、平成25年度をその２として実施した。

1．現地調査は、平成25年３月14日～10月11日(外業実働７日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約28㎡である。

1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。

　遺物復元－竹田貴子

　遺物実測・トレース－市森千恵子

　その他－坪田

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……1

2．調査概要……2

　1）調査の方法と経過……2

　2）基本層序と出土遺物……2

　3）検出遺構と出土遺物……5

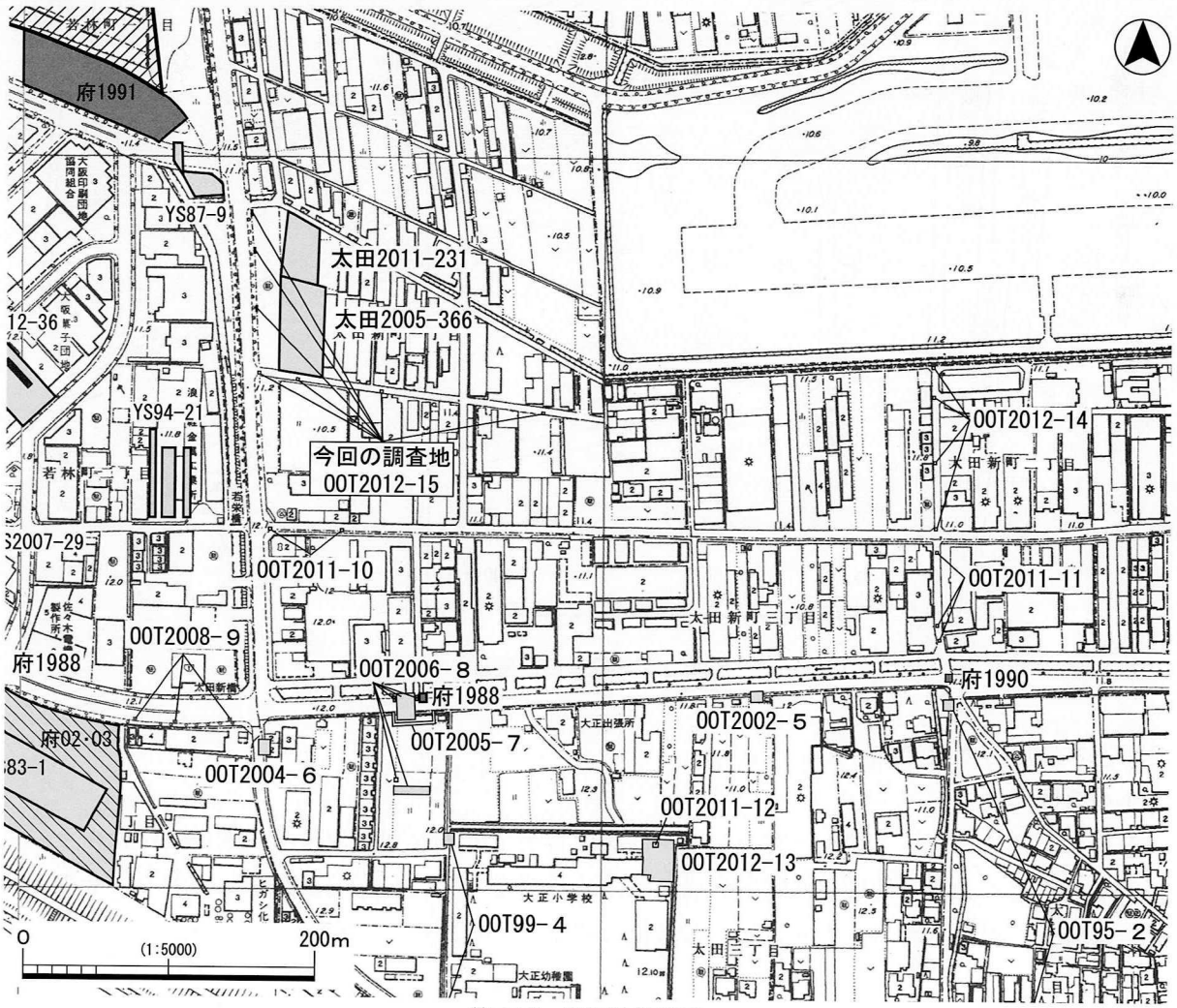
3．まとめ……5

Ⅰ　太田遺跡第15次調査（ＯＯＴ2012－15）

１．はじめに

太田遺跡は八尾市南西部に位置する弥生時代～中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、太田３・４・９丁目、太田新町１・３丁目がその範囲とされている。地理的には南から伸びる羽曳野丘陵の先端部と、北側に広がる旧大和川が形成した沖積地との接点部に位置する。周辺では、北側に木の本遺跡、西側に八尾南遺跡、東側に大正橋遺跡、南側には大和川を挟んで津堂遺跡が存在する。

今回の調査地は遺跡範囲の北西部に位置している。周辺での調査成果を概観すると、北部で実施した遺構確認調査（太田遺跡2005－366）において、古墳時代初頭の集落域を確認しており、土坑からは膨大な量の土器が出土している。また南部の第10次調査（ＯＯＴ2011－10）、及び西側に隣接する八尾南遺跡域で実施した第21次調査（ＹＳ94－21）や遺構確認調査（八尾南遺跡95－248、2001－491）においても、弥生時代後期末～古墳時代初頭の集落域を確認している他、第10次調査では弥生時代前期の遺物包含層も検出している。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

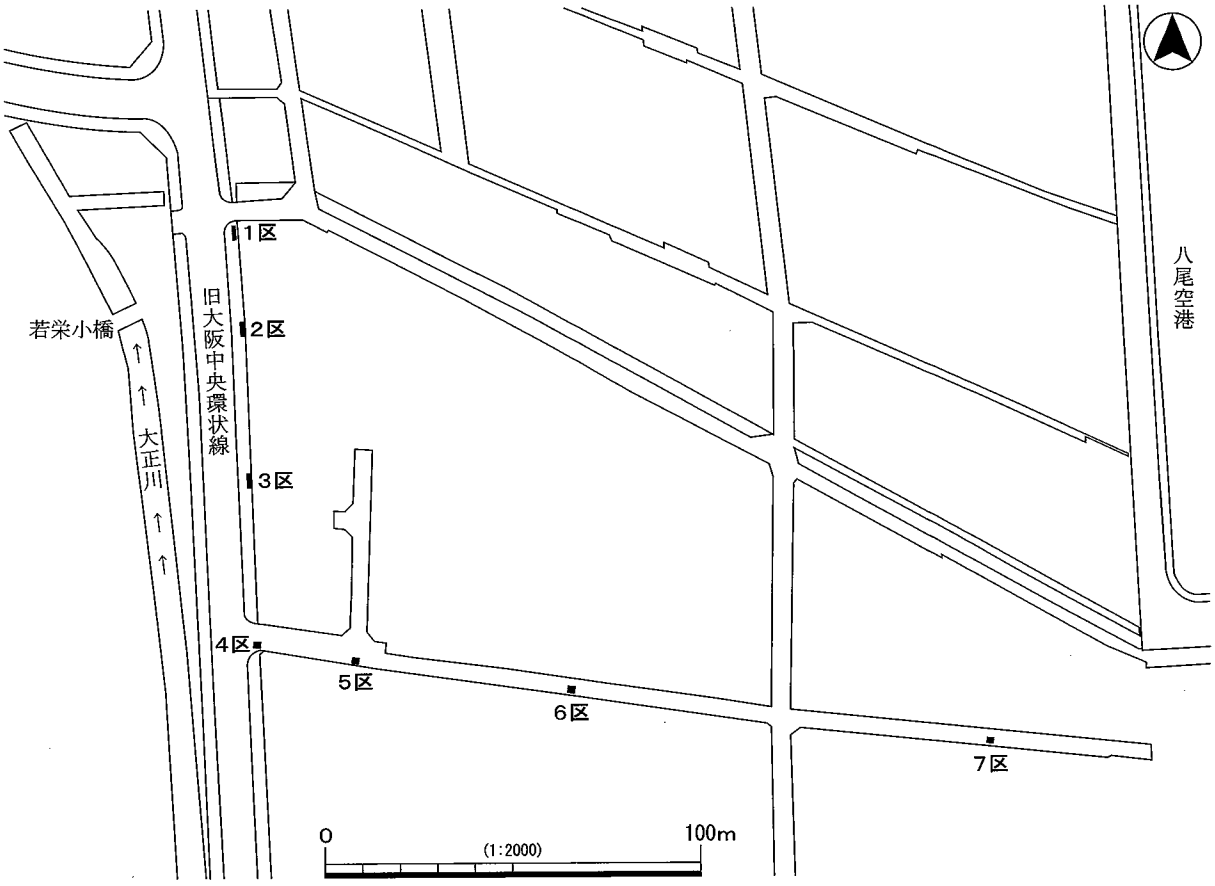
1）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市太田新町１丁目地内で実施した下水道工事(24－30工区)に伴う調査で、当調査研究会が太田遺跡内で行った第15次調査(ＯＯＴ2012－15)である。

調査地は小型人孔部分３箇所(規模約1.0×4.0m)、人孔部分(規模約2.0×2.0m)４箇所の計７箇所で、地区名は北西から１～７区とした。内訳は小型人孔部分が１～３区、人孔部分が４～７区となる。

調査は現地表(T.P.＋11.2～11.8m)下約2.2～3.1mまでについて、機械・人力掘削併用で実施した。なお調査はすべて夜間調査である。

調査では工事図面記載の各調査地点地盤高を標高の基準とした。

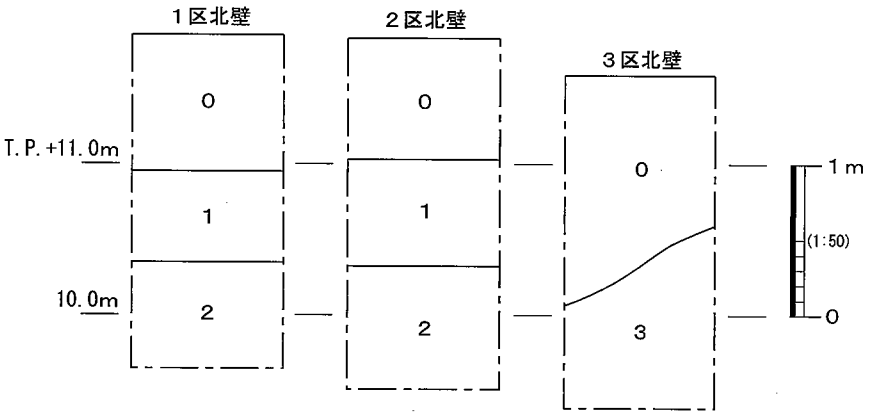


第２図　調査区位置図

2）基本層序と出土遺物

１～３区

０層はアスファルト・盛土・客土、１～３層は客土である。調査地は旧大阪中央環状線上に位置するが、近年まで当地には八尾空港滑走路部分を潜る「河内地下道」が存在しており、その廃止に伴う客土と捉えられる。１～３区から遺物は出土していない。



１～３区
０．アスファルト・盛土・客土
１．黄褐色～灰色シルト混細粒砂～細礫　客土
２．灰色シルト混細粒砂～細礫　客土
３．暗灰黄色シルト質粘土～細礫　ブロック状客土

第３図　１～３区断面図

４区

０層はアスファルト・盛土・撹乱。１層は水成層と考えられるが、作土の可能性もある。２層は暗色を呈する土壌化層で、弥生土器あるいは古式土師器と思われる土器片が少量出土した。３・４層は水成層で、３層は静水性、４層は河川堆積で、３層上部は土壌化する。４層の河川堆積は西側の調査地（ＹＳ94－21）においても確認しており、当地の方が深くまで及んでいる。また５区には及んでいない。

５区

０層はアスファルト・盛土・撹乱。以下はほぼ水平な堆積が続く状況が認められた。１層は作土の可能性がある。２層は水成層である。レベル的に７区２～５層に関連する可能性がある。３層は水成層と考えられ、上部は土壌化が認められる。４層は土壌化層で、弥生土器あるいは古式土師器と思われる土器片が極少量出土した。５～８層は湿地性の水成層でと考えられるが、６層は土壌化している可能性がある。９層は暗色を呈する土壌化層である。10層はやや暗色を呈し、11層の土壌化部分と捉えられる。11層は水成層である。

６区

０層はアスファルト・盛土・撹乱。以下はほぼ水平な堆積が続く状況が認められた。１層は旧耕土である。２層の砂層は水成層で、洪水砂であろう。レベル的に７区２～５層に関連する可能性がある。３～６層は撹拌された作土と考えられる。７層は暗色を呈する土壌化層である。８層は作土の可能性がある。９～12層は水成層で、湿地性堆積である。13層は暗色を呈し、14層の土壌化部分と捉えられる。14層は水成層である。６区から遺物は出土しなかった。

７区

０層はアスファルト・盛土・撹乱。１層は汚れた土壌化層である。弥生土器あるいは古式土師器と思われる土器片が極少量出土した。２～５層は水成層で、一連の河川堆積と考えられ、３層は急激な流水堆積である。６層はブロック状の土壌化層で、古墳時代初頭（庄内式期）の遺物包含層である。層相から遺構埋土の可能性もある。７層は暗色を呈する土壌化層である。８層は水成層である。

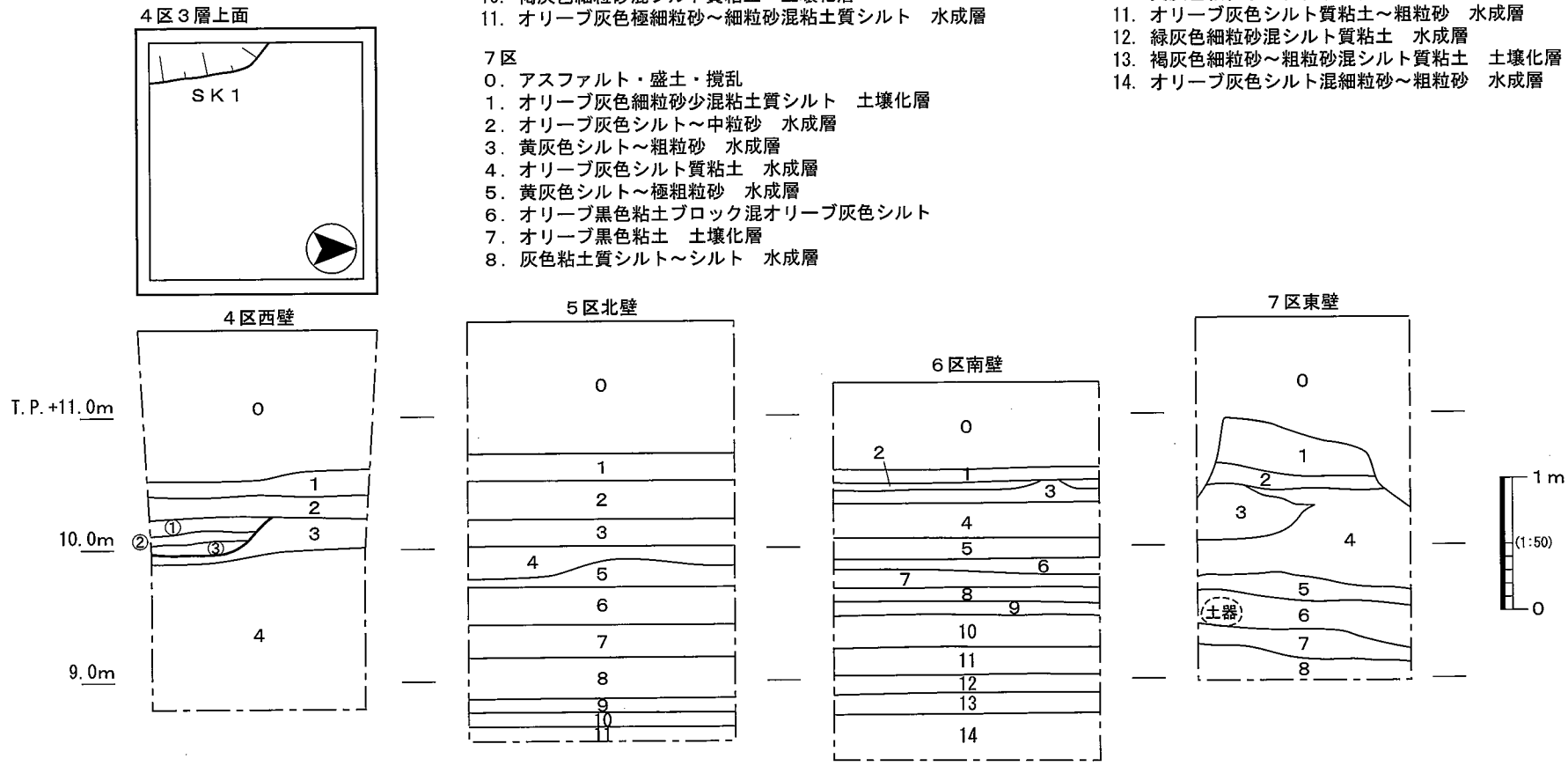
４区
０．アスファルト・盛土・撹乱
１．灰白色シルト質粘土
２．褐灰色細粒砂混シルト質粘土　土壌化層
３．灰黄色粘土質シルト　Fe斑　水成層
４．灰黄色細粒砂～中粒砂　水成層

ＳＫ１
①黄灰色細粒砂～粗粒砂少混シルト質粘土
②褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　炭多
③灰色シルト質粘土

５区
０．アスファルト・盛土・撹乱
１．黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土
２．灰色細粒砂～粗粒砂混シルト　水成層
３．灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　Fe斑　上部土壌化
４．褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　土壌化層
５．灰黄色細粒砂少混シルト質粘土　水成層
６．褐灰色シルト質粘土　土壌化層？
７．オリーブ灰色粘土質シルト　水成層
８．オリーブ灰色シルト質粘土　水成層
９．オリーブ黒色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　暗色土壌化層
10．褐灰色細粒砂混シルト質粘土　土壌化層
11．オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　水成層

７区
０．アスファルト・盛土・撹乱
１．オリーブ灰色細粒砂少混粘土質シルト　土壌化層
２．オリーブ灰色シルト～中粒砂　水成層
３．黄灰色シルト～粗粒砂　水成層
４．オリーブ灰色シルト質粘土　水成層
５．黄灰色シルト～極粗粒砂　水成層
６．オリーブ黒色粘土ブロック混オリーブ灰色シルト
７．オリーブ黒色粘土　土壌化層
８．灰色粘土質シルト～シルト　水成層

６区
０．アスファルト・盛土・撹乱
１．灰色細粒砂～粗粒砂混粘土　旧耕土
２．灰色細粒砂～粗粒砂　水成層
３．黄灰色極細粒砂混粘土　Fe斑　撹拌作土
４．オリーブ灰色粘土　Fe斑　撹拌作土
５．黄灰色細粒砂～粗粒砂混粘土　撹拌作土
６．灰色細粒砂混粘土　Fe斑　撹拌作土
７．褐灰色粘土　土壌化層
８．黄灰色細粒砂～粗粒砂混粘土　Fe斑　撹拌作土
９．緑灰色粘土　水成層
10．黄灰色細粒砂～粗粒砂混粘土　炭酸鉄　水成層
11．オリーブ灰色シルト質粘土～粗粒砂　水成層
12．緑灰色細粒砂混シルト質粘土　水成層
13．褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　土壌化層
14．オリーブ灰色シルト混細粒砂～粗粒砂　水成層



第４図　４～７区平断面図

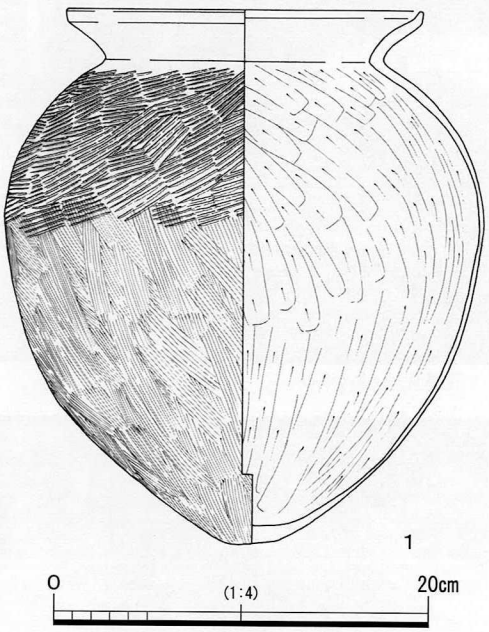
３）検出遺構と出土遺物

ＳＫ１

４区３層上面（T.P.＋10.25m）で検出した土坑である。南西角で検出したもので、西・南は調査区外に至るため詳細は不明である。検出部分の規模は南北約90cm・東西約30cm・深さ約30cmを測る。埋土はブロック状の３層からなり、中層は炭を多く含む。遺物は弥生時代後期頃と考えられる土器片が少量出土したが、図化しえるものはなかった。

７区６層出土遺物

庄内式甕（１）を図化した。１/２程度の残存で、口径19.0cm・器高28.2cm・体部最大径25.6cmを測る。径約2.8cmの平底を有し、調整は口縁部ヨコナデ、体部外面上位平行タタキ、下位ハケ、体部内面下から上のヘラケズリである。体部外面下半は煤ける。古墳時代初頭前半に比定される。



第５図　７区６層出土遺物

３．まとめ

今回の調査では、周辺での調査成果と同様に、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ１箱である。

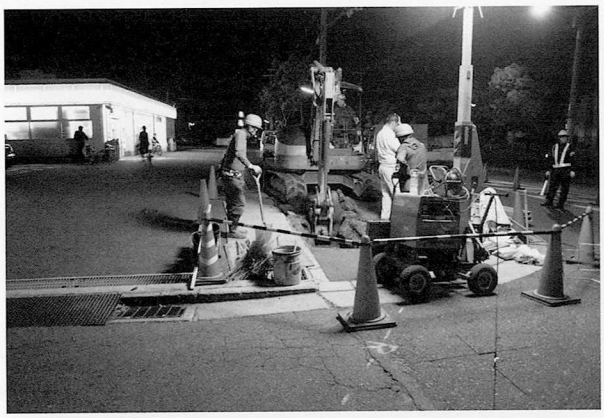
西部では４区で弥生時代後期頃と考えられる遺構を検出した。南約110mで実施した第10次調査１区では、ほぼ同レベルで洪水砂により埋没した同時期の溝を検出しているが、この洪水砂は当地には及んでいないことが判明した。

東部では７区で古墳時代初頭の遺物包含層（６層）を検出した。ブロック状の層相であり、土圧で潰れた状況の庄内式甕が出土していることから、調査区全体を包括するような遺構埋土の可能性も考えられる。北部の太田遺跡2005－366で確認している該期の集落域の広がりが確認されたと言えよう。

参考文献

・原田昌則2007「１－１　太田遺跡（2005－366）の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告55　平成18年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・坪田真一2012「Ⅰ　太田遺跡第10次調査（ＯＯＴ2011－10）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告136』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一1998「Ⅵ　八尾南遺跡第21次調査（ＹＳ94－21）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』財団法人八尾市文化財調査研究会
・吉田野乃1996「16　八尾南遺跡（95－248）の調査」『八尾市内遺跡平成７年度発掘調査報告書Ⅰ　八尾市文化財調査報告33　平成７年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・坪田真一2003「32　八尾南遺跡（2001－491）の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告48　平成14年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

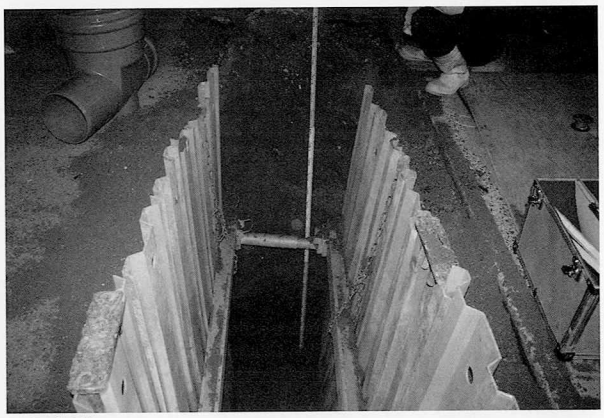
図版1



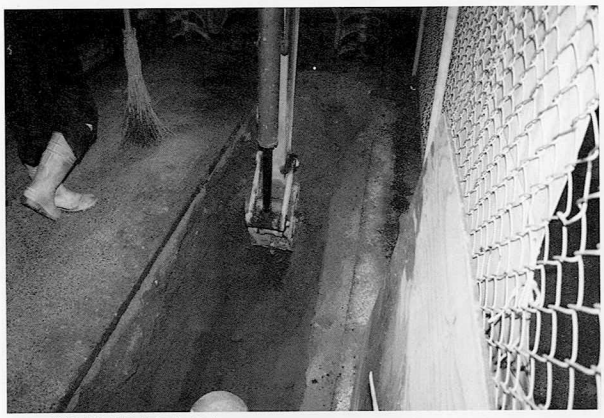
1区調査地（北から）

1区北壁

2区機械掘削（南から）

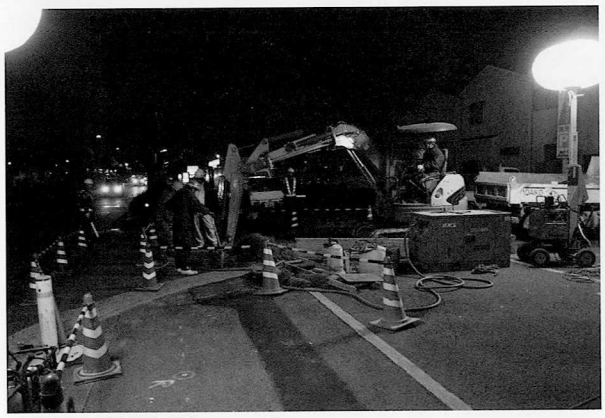


2区北壁



3区機械掘削（南から）

3区北壁



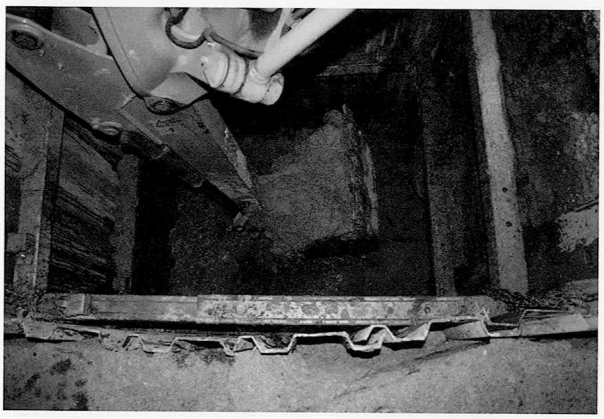
4区調査地（南から）

4区第1面（東から）

図版2

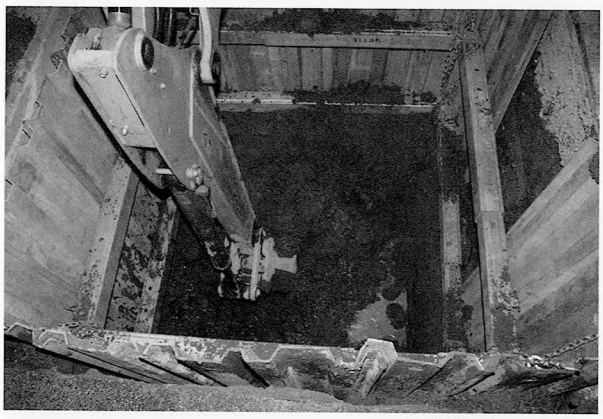
４区ＳＫ１（東から）

４区西壁



４区下部機械掘削（南から）

４区下部（南東から）



５区機械掘削（東から）

５区北壁

５区北壁下部

６区機械掘削（東から）

図版3

6区南壁

6区南壁下部

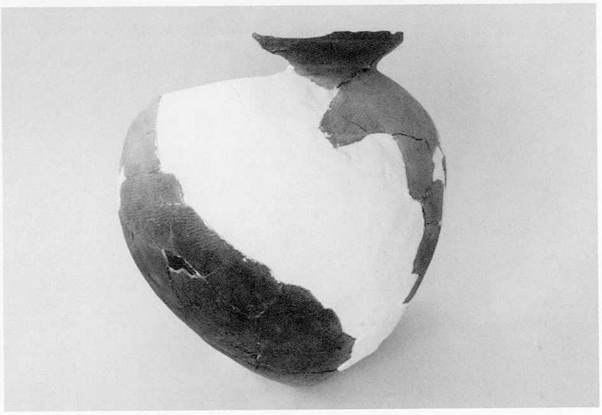
7区機械掘削（東から）

7区東壁上部

7区東壁下部

7区東壁下部

7区東壁6層土器出土状況


7区6層出土遺物（1）

Ⅱ　太田遺跡第16次調査（ＯＯＴ2013－16）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市太田新町二丁目地内で実施した下水道工事(24－30工区)に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する太田遺跡第16次調査(ＯＯＴ2013－16)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成26年１月23日(外業実働１日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約４㎡である。
1．現地調査においては、竹田貴子・村井俊子の参加を得た。
1．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

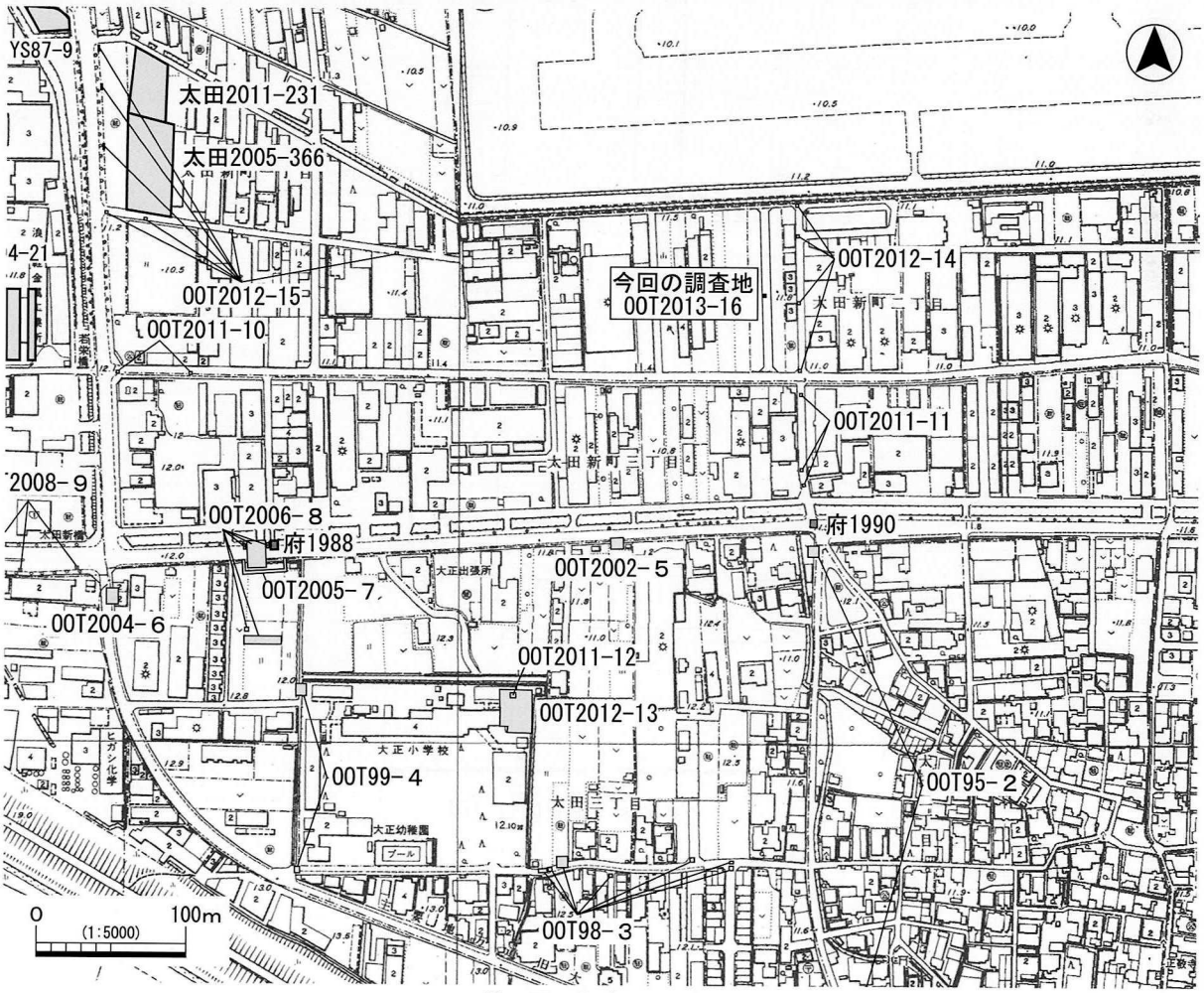
1．はじめに……9
2．調査概要……10
　1）調査の方法と経過……10
　2）基本層序……11
　3）検出遺構と出土遺物……11
3．まとめ……11

Ⅱ　太田遺跡第16次調査（ＯＯＴ2013－16）

１．はじめに

太田遺跡は八尾市南西部に位置する弥生時代～中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、太田３・４・９丁目、太田新町１・３丁目がその範囲とされている。地理的には南から伸びる羽曳野丘陵の先端部と、北側に広がる旧大和川が形成した沖積地との接点部に位置する。周辺では、北側に木の本遺跡、西側に八尾南遺跡、東側に大正橋遺跡、南側には大和川を挟んで津堂遺跡が存在する。

今回の調査地は遺跡範囲の北東部に位置している。周辺では東側で当研究会による第14次調査（ＯＯＴ2012－14）、南側で第２次調査（ＯＯＴ95－２）、第11次調査（ＯＯＴ2011－11）、大阪府教育委員会による調査（府1990）が実施されている程度で、あまり発掘調査が行われていない地域といえる。概観すると、ＯＯＴ2012－14で近世の井戸や耕作土、府1990では自然河川、ＯＯＴ95－２では弥生時代末～古墳時代、ＯＯＴ2011－11では弥生時代後期の遺構が検出されている。一方、西部では当調査研究会第４～10・15次調査を実施しており、第８次調査（ＯＯＴ2006－８）では縄文時代～中世の遺構・遺物を検出した他、旧石器時代の地層から石器も出土している。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

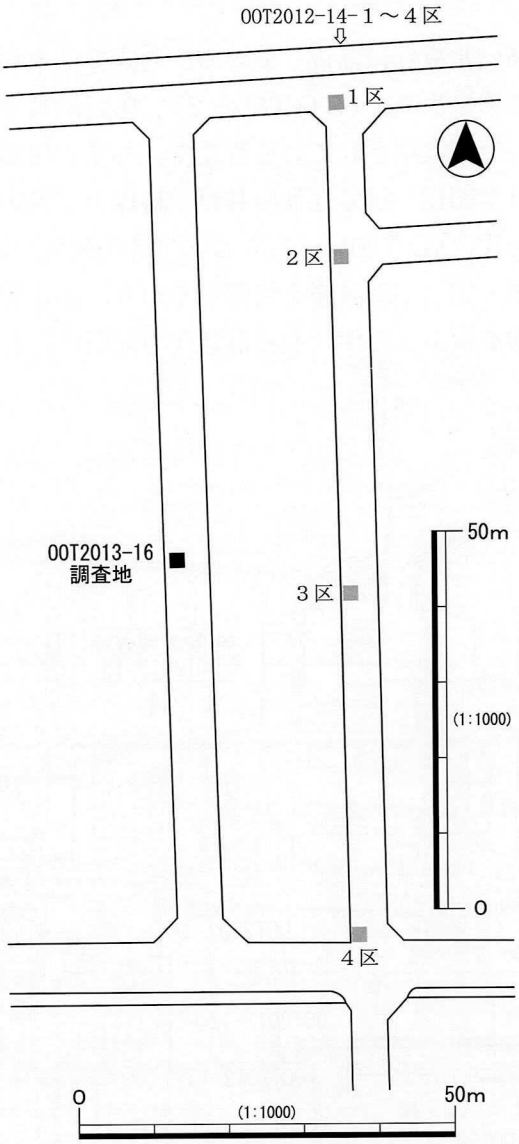
1）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市太田新町二丁目地内で実施した下水道工事(24－30工区)に伴う調査で、当調査研究会が太田遺跡内で行った第16次調査(ＯＯＴ2013－16)である。

調査地は人孔部分１箇所(規模約2.0×2.0m)で、面積は約４㎡である。

調査は現地表(T.P.＋11.6m)下約2.7mまでについて、機械・人力掘削併用で実施した。

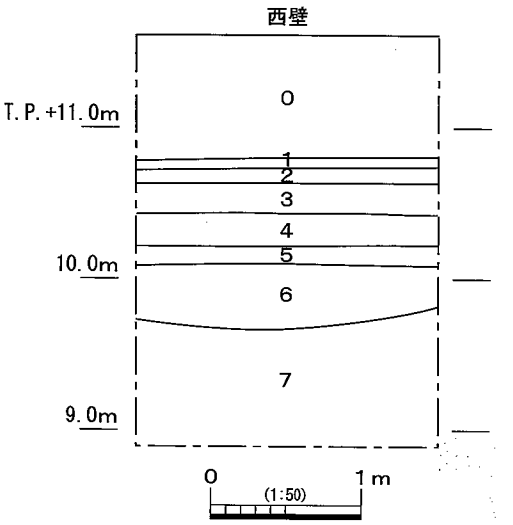
調査では工事図面記載のベンチマーク(KBM.2：T.P.＋11.288)を標高の基準とした。



第２図　調査区位置図

２）基本層序

０層はアスファルト・盛土である。１層は旧耕土である。２～５層も作土と考えられ、２・３は撹拌され、４・５層はブロック状を呈する。時期は中世頃～近世であろう。６・７層はシルト～極粗粒砂からなる水成層で、河川堆積である。７層は湧水が著しい。



０．盛土・撹乱
１．7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　旧耕土
２．2.5GY7/1明オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
３．2.5Y7/3浅黄色極細粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
４．10YR7/2にぶい黄橙色極細粒砂混粘土質シルト　ブロック状作土
５．5Y6/1灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　ブロック状作土
６．2.5Y7/2灰黄色シルト～粗粒砂互層
７．2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂～極粗粒砂互層

第３図　基本層序

３）検出遺構と出土遺物

遺構・遺物は検出されなかった。

３．まとめ

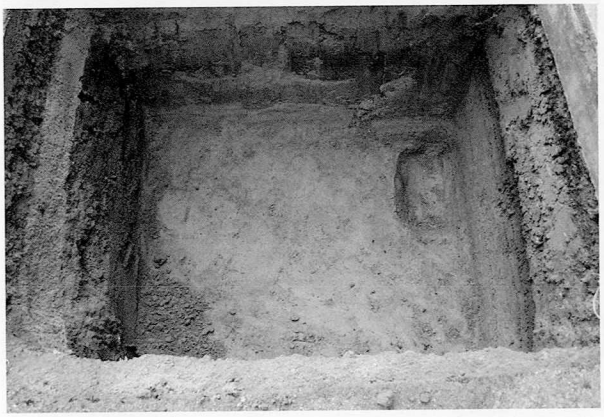
調査では東側で実施した第14次調査と同様に、中世頃～近世の耕作土、及びそれ以下の河川堆積を確認した。出土遺物は無く河川の時期等は不明であるが、当地は中世頃以降連綿と生産域となっている。

参考文献
・亀島重則1990『太田遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
・西村公助1996「Ⅳ　太田遺跡第２次調査（ＯＯＴ95－２）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助2007「Ⅱ　太田遺跡第８次調査（ＯＯＴ2006－８）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告104』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2012「Ⅱ　太田遺跡第11次調査（ＯＯＴ2011－11）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告136』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2013「Ⅰ　太田遺跡第14次調査（ＯＯＴ2012－14）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告141』公益財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

調査地（南から）

機械掘削（南から）



６層上面（北から）

西壁上部

下層機械掘削（南から）

西壁下部

Ⅲ　太田川遺跡第２次調査（ＯＴＧ2013－２）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市大竹３丁目他地内で実施した下水道工事(24－15工区)に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する太田川遺跡第２次調査(ＯＴＧ2013－２)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成25年６月24日～７月25日(外業実働３日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約12㎡である。
1．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……13
2．調査概要……14
　1）調査の方法と経過……14
　2）基本層序と出土遺物……14
3．まとめ……14

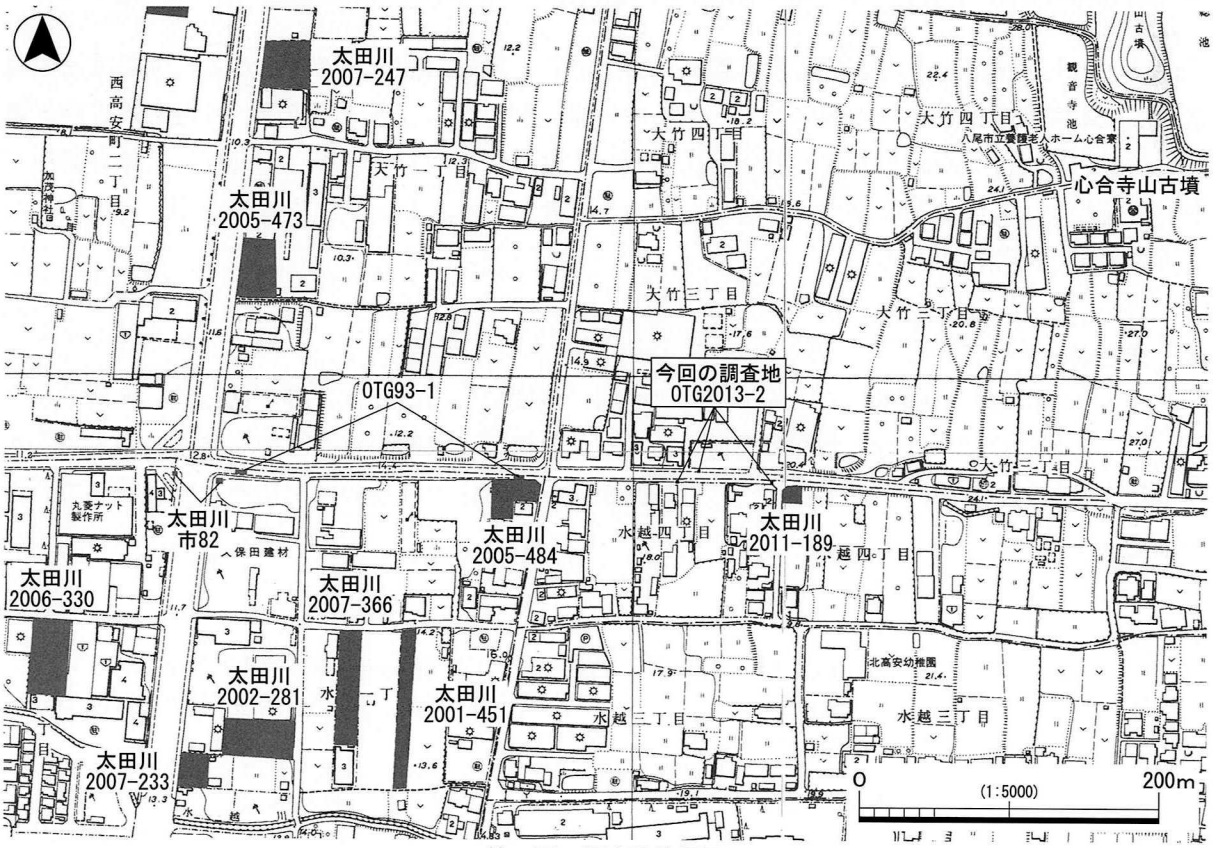
Ⅲ　太田川遺跡第２次調査（ＯＴＧ2013－２）

１．はじめに

太田川遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では大竹１・３・４丁目、水越１・３・４丁目、西高安町１・２丁目の、南北約500m・東西約850mがその範囲とされている。地理的には生駒山西麓の扇状地先端部にあたり、西流する太田川と水越川に挟まれた地域であり、同地形上において北側で大竹西遺跡、心合寺山古墳、心合寺跡、東側で大竹遺跡、南側で水越遺跡に接している。

当遺跡が認識されたのは、昭和15(1940)年３月、東高野街道改修工事の際、滑石製勾玉・弓筈状木製品等を含む地層が確認されたことによる。そして八尾市教育委員会により昭和56(1981)年に立会調査、さらに昭和57(1982)年には最初の発掘調査(太田川市82)が実施され、前者では古墳時代包含層、後者では弥生時代後期の遺構・遺物を検出した。その後も遺構確認調査や小規模な発掘調査が市教委・当調査研究会によって継続的に実施されており、当遺跡は弥生時代～中世の遺跡として認識されている。

今回の調査地である東西道路上の西方では、当調査研究会が第１次調査(ＯＴＧ93－1)を実施しており、縄文時代晩期、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期、奈良時代に亘る遺構・遺物を検出している。なかでも古墳時代後期の溝から出土した滑石製有孔石製品の未成品は、周辺の水越遺跡・大竹西遺跡といった玉造関連遺跡との関係を考える上で注目される資料である。



第１図　調査地位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市大竹３丁目他地内で実施した下水道工事(24－15工区)に伴う調査で、当調査研究会が太田川遺跡内で行った第２次調査(ＯＴＧ2013－２)である。

調査地は人孔部分(規模約2.0×2.0m)３箇所で、総面積約12㎡を測る。地区名は西から１～３区とした。

調査は現地表(T.P.＋18.6～20.6m前後)下約2.9～3.3mまでについて、機械・人力掘削併用で実施した。なお調査はすべて夜間調査である。

調査では工事図面記載の各調査区の地盤高を標高の基準とした。

２）基本層序と出土遺物

１区

０層は盛土・撹乱。１層は水成層と考えられる。２・３層はFe斑を含む土壌化層で、作土の可能性がある。４層は静水性の水成層である。５層は土壌化層で、弥生時代後期頃の遺物包含層で、土器が少量出土したが、図化しえるものはない。６層上面が該期の生活面と考えられる。６・７層は扇状地性の水成層である。

２区

0A層は盛土・撹乱。0B・0C層も均質な層相で盛土と考えられる。１層以下は水成層で、２・４層は中礫を多く含み、土石流堆積の様相である。

３区

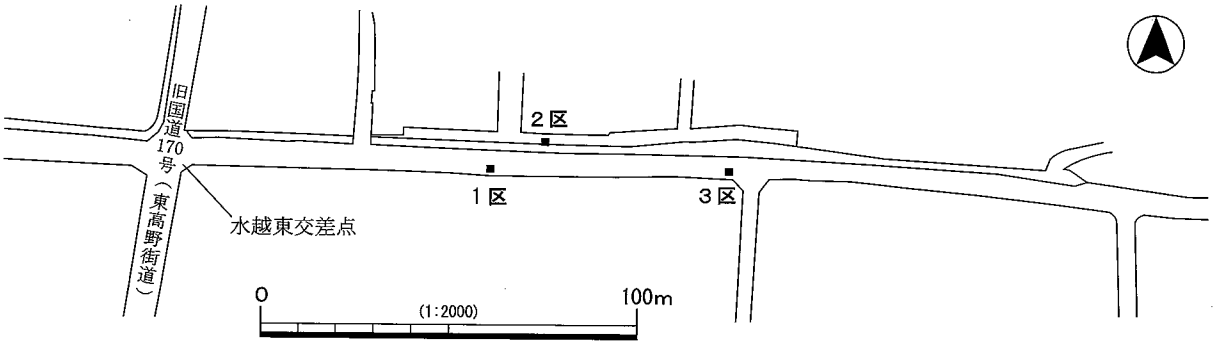
０層は盛土・撹乱。１・２層は撹拌された作土で、１層は旧耕土と考えられる。３層は水成層である。４層はFe斑を含む土壌化層で、作土の可能性がある。５層は水成層、６層も水成層と考えられる。７層はやや暗色を呈する土壌化層で、弥生時代後期の土器片、土師器片、須恵器片が少量出土した。８層は水成層で、土壌化していると考えられ、上面が弥生時代後期～古墳時代の生活面である可能性がある。

３．まとめ

１・３区では西部で確認している弥生時代後期、古墳時代の遺物包含層が見られ、集落域が東に広がることが確認された。また調査地である道路北側には溜池が東西方向に並んでいることから、谷筋あるいは埋没河川に当っている可能性が高く、２区の地層の状況はそれを反映していると考えられる。

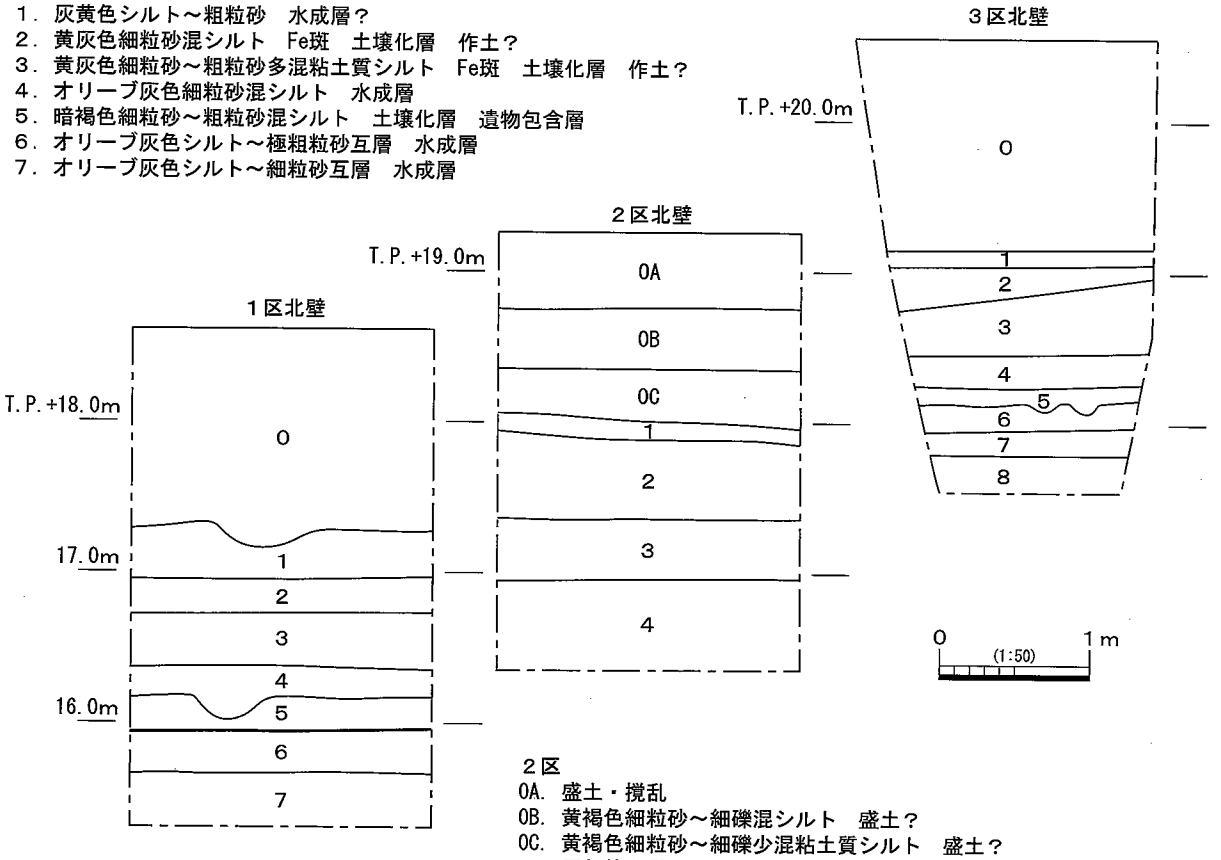
参考文献

・原田　修・久貝　健・島田和子1976『大阪文化誌　第２巻・第２号・通巻第６号』財団法人大阪文化財センター
・財団法人八尾市文化財調査研究会1983「付章　昭和55・56年度調査一覧表」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度　財団法人八尾市文化財調査研究会報告２』
・原田昌則・成海佳子1983「第３章　太田川遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和56・57年度　財団法人八尾市文化財調査研究会報告３』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一1994「Ⅲ　太田川遺跡第１次調査(ＯＴＧ93－１)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』財団法人八尾市文化財調査研究会



第２図　調査区位置図

１区
０．盛土・撹乱
１．灰黄色シルト～粗粒砂　水成層？
２．黄灰色細粒砂混シルト　Fe斑　土壌化層　作土？
３．黄灰色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト　Fe斑　土壌化層　作土？
４．オリーブ灰色細粒砂混シルト　水成層
５．暗褐色細粒砂～粗粒砂混シルト　土壌化層　遺物包含層
６．オリーブ灰色シルト～極粗粒砂互層　水成層
７．オリーブ灰色シルト～細粒砂互層　水成層



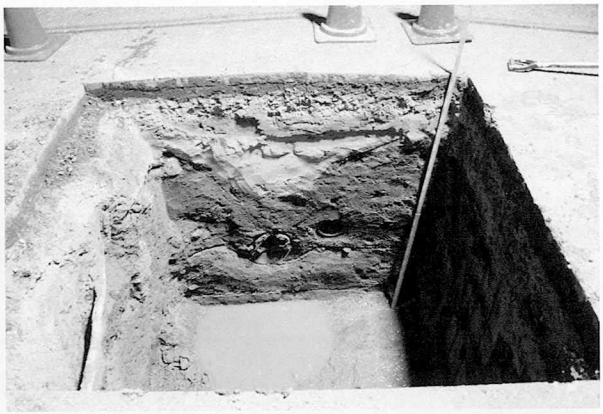
２区
0A．盛土・撹乱
0B．黄褐色細粒砂～細礫混シルト　盛土？
0C．黄褐色細粒砂～細礫少混粘土質シルト　盛土？
１．灰色粘土質シルト～シルト　水成層
２．黄灰褐色細粒砂～中礫多混粘土質シルト　水成層
３．灰色細粒砂～細礫多混シルト　水成層
４．黄褐色細粒砂～中礫　水成層

３区
０．盛土・撹乱
１．暗緑灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　旧耕土？
２．暗オリーブ灰色シルト～細粒砂　撹拌作土
３．黄灰色シルト～細粒砂互層　水成層
４．黄褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　Fe斑多　水成層？
５．暗灰黄色シルト～細粒砂互層　水成層
６．灰色極細粒砂～細粒砂ブロック混シルト質粘土　ブロック状作土？
７．暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　暗色土壌化層
８．灰色極細粒砂～細粒砂混シルト　土壌化層

第３図　平断面図

図版1

調査地（西から）



1区北壁

1区北壁下部

2区北壁

2区北壁下部

3区機械掘削（北から）

3区北壁

3区北壁下部

Ⅳ　恩智遺跡第28次調査（ＯＪ2012－28）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市恩智中町１丁目地内で実施した下水道工事(23－23工区)に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する恩智遺跡第28次調査(ＯＪ2012－28)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成24年10月15・16日(外業実働２日)に、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約８㎡である。
1．現地調査においては市森千恵子・竹田貴子の参加を得た。
1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
　遺物実測－永井律子・村田知子
　遺物トレース－市森
　その他－坪田
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……17
2．調査概要……18
　1）調査の方法と経過……18
　2）基本層序……18
　3）検出遺構と出土遺物……18
3．まとめ……20

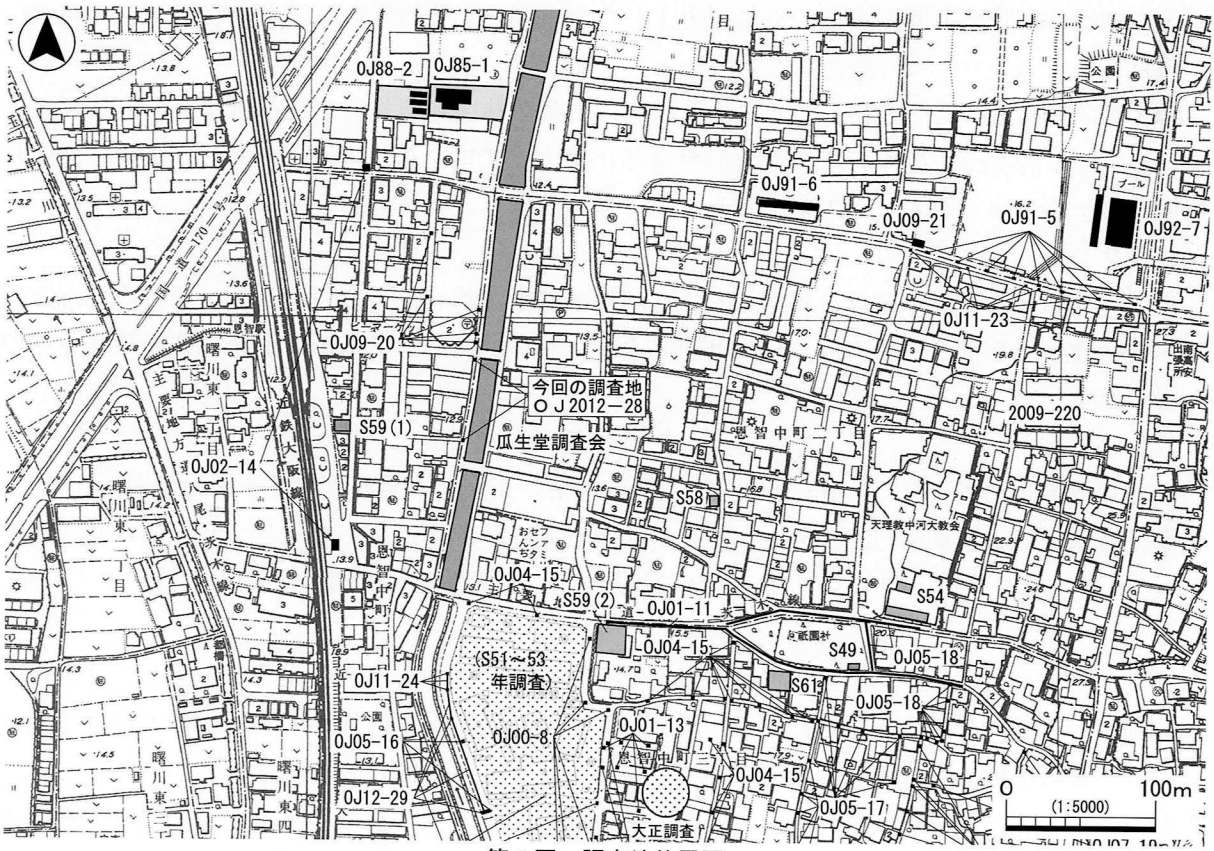
Ⅳ　恩智遺跡第28次調査（ＯＪ2012－28）

１．はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町１～４丁目、恩智中町１～５丁目、恩智南町１～５丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。

本遺跡については、古くは大正６年(1917)の梅原末治・島田貞彦両氏による踏査と鳥居龍蔵氏による試掘調査、昭和14年(1939)の大阪府の事業に伴う藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23年(1948)の今里幾次氏による出土遺物の報告等がある。そして昭和50～53年(1975～1978)には恩智川改修工事に伴う大規模な調査が瓜生堂遺跡調査会により行われ、以降、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる調査が実施されている。これらの調査により当遺跡は縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として認識されており、恩智中町３丁目に位置する「天王の杜」周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

今回の調査地は遺跡範囲の西部にあたり、周辺では前述の恩智川改修に伴う調査の他、市教委S59(1)調査や、当研究会第20次調査を実施している。西部の市教委S59(1)調査では弥生時代中期～古墳時代の遺構・遺物が多く確認されており、弥生時代中期では土器棺墓が検出されている。



第１図　調査地位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市恩智中町１丁目地内で実施された下水道工事(23－23工区)に伴う調査で、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第28次調査(ＯＪ2012－28)である。

調査区は恩智川左岸の南北道路上に設定された人孔部分２箇所(約２×２m、北から１・２区)である。

調査は工事掘削深度である現地表(約T.P.＋12.3～12.4m)下2.5～2.8mまで機械・人力掘削併用で実施した。調査では、工事使用の仮ベンチマークを標高の基準とした。

２）基本層序

０層は盛土・撹乱。１層、及び２区で見られた２・３層は、シルト～極粗粒砂からなる河川堆積である。４層以下は１区で確認した。４～９層は土壌化層である。いずれも暗色を呈する層相で、層界は不明瞭なものである。10層も土壌化層で、11層の土壌化部分と捉えられる。11層のシルト質粘土は水成層である。

３）検出遺構と出土遺物

１区８層上面(T.P.＋10.2m)で土坑１基(ＳＫ１)、ピット６個(ＳＰ１～６)を検出した。遺構面は調査区北部が高く、中央付近から南に下がる状況であった。

ＳＫ１

西部で検出した土坑で、西は調査区外に至る。検出部分の平面形は方形に近く、規模は南北約62cm・東西約62cm以上・深さ約50cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の２層からなる。遺物は弥生時代前期・中期の土器が出土したが、図化しえるものはなかった。

ＳＰ１

ＳＫ１北側に近接して検出した。平面形は東西主軸の楕円形を呈し、規模は南北約25cm・東西約40cm・深さ約30cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層である。遺物は弥生時代中期の土器が出土しており１を図化した。１は甕口縁部と考えられる。

ＳＰ２

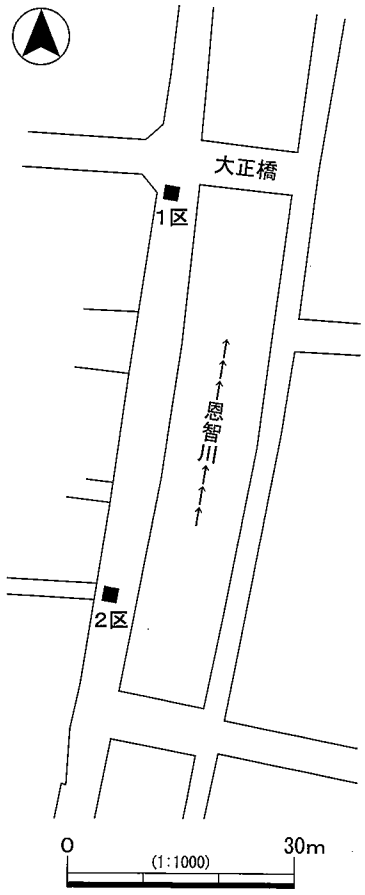
北部で検出した平面不定形なピットである。規模は南北約45cm・東西約55cm・深さ約32cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はＳＰ１と同じくブロック状の単層である。遺物は弥生時代中期の土器が出土した。

ＳＰ３

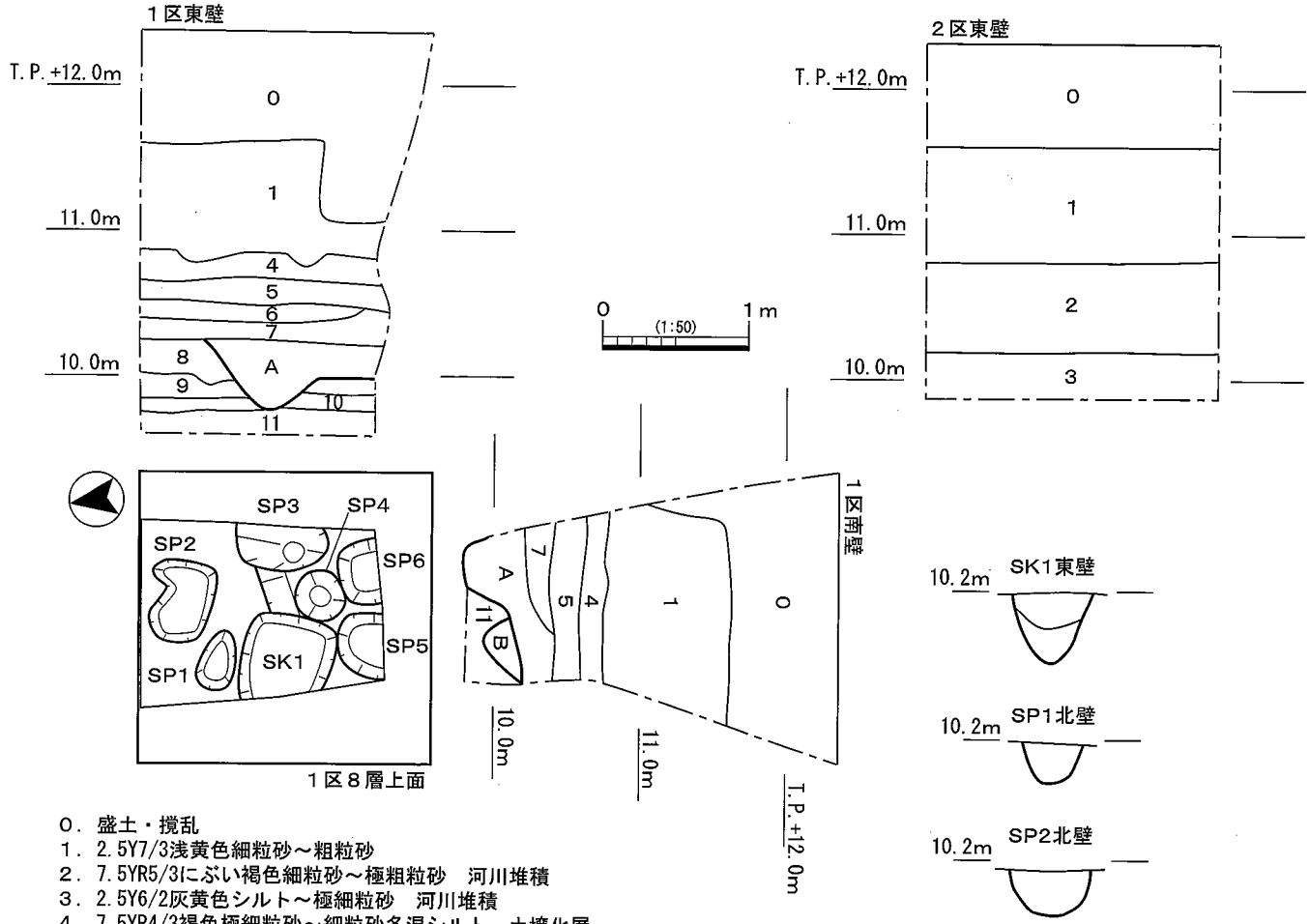
東部で検出したピットで、東は調査区外に至る。検出部分の平面形は南北長軸の楕円形を呈し、規模は南北約65cm・東西約30cm以上・深さ約50cmを測る。断面逆台形を呈し、底部には柱根が見られた。埋土はＳＰ１と同じくブロック状の単層である。遺物は弥生時代中期の土器が出土した。

ＳＰ４

中央で検出したピットで、平面形は直径約35cmの円形を呈する。断面逆台形を呈し、深さ約35cmを測る。埋土はＳＰ１と同じくブロック状の単層で、底部には礎板と考えられる木片が遺存していた。遺物は弥生時代中期の土器が出土しており、２～４を図化した。２は大形の鉢あるいは甕の口縁部で、口径48.8cmを測る。３は甕の底部で、外面調整は縦位ヘラミガキである。４は壺底部であろう。



第２図　調査区位置図



０．盛土・撹乱
１．2.5Y7/3浅黄色細粒砂～粗粒砂
２．7.5YR5/3にぶい褐色細粒砂～極粗粒砂　河川堆積
３．2.5Y6/2灰黄色シルト～極細粒砂　河川堆積
４．7.5YR4/3褐色極細粒砂～細粒砂多混シルト　土壌化層
５．10YR4/1褐灰色極細粒砂～中粒砂多混シルト　土壌化層
６．2.5Y4/1黄灰色細粒砂～粗粒砂多混シルト　土壌化層
７．10YR4/1褐灰色細粒砂～粗粒砂多混シルト　土壌化層
８．5Y4/1灰色細粒砂混シルト質粘土　土壌化層
９．5Y5/1灰色シルト質粘土混細粒砂～粗粒砂　土壌化層
10．2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土～シルト　土壌化層
11．2.5Y4/2暗灰黄色シルト質粘土　水成層

SK1
10YR3/1黒褐色極細粒砂～細粒砂混シルト　ブロック状
2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土ブロック混シルト
SP1～4・6
Ａ．10YR3/1黒褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　ブロック状
SP5
Ｂ．10YR3/2黒褐色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　ブロック状

第３図　平断面図

ＳＰ５

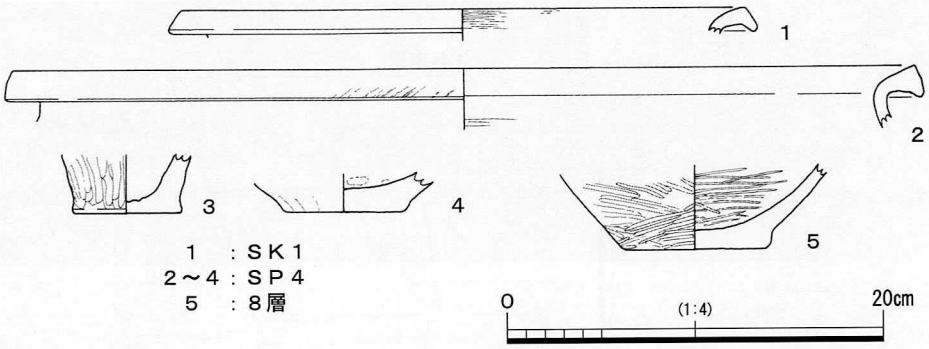
南部で検出したピットで、南は調査区外に至る。検出部分の平面形は円形に近く、規模は南北約30cm以上・東西約45cm・深さ約28cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層である。切り合い関係からみて他の遺構より古く位置付けられ、埋土も異なる。遺物は弥生時代中期頃の土器が出土した。

ＳＰ６

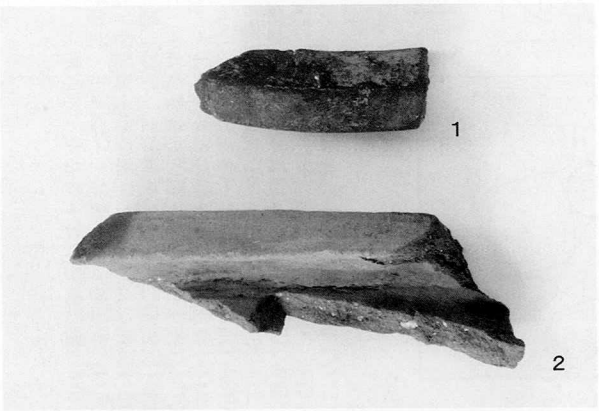
南部で検出したピットで、南は調査区外に至る。検出部分の平面形は方形に近く、規模は南北約26cm以上・東西約45cm・深さ約40cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はＳＰ１と同じくブロック状の単層である。遺物は弥生時代中期の土器が出土した。

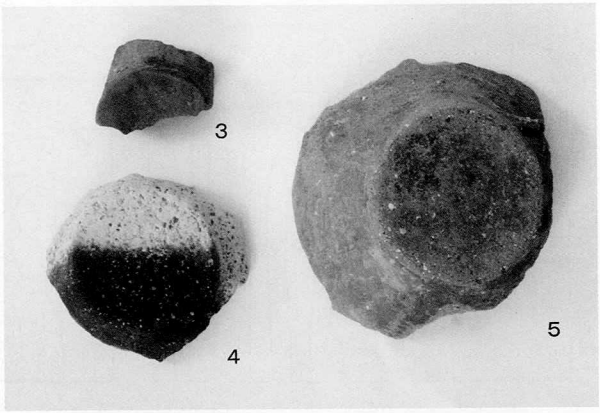
８層出土遺物

５を図化した。壺底部で、調整は内外面ともヘラミガキを施す。弥生時代前期に遡る可能性がある。



第４図　出土遺物





３．まとめ

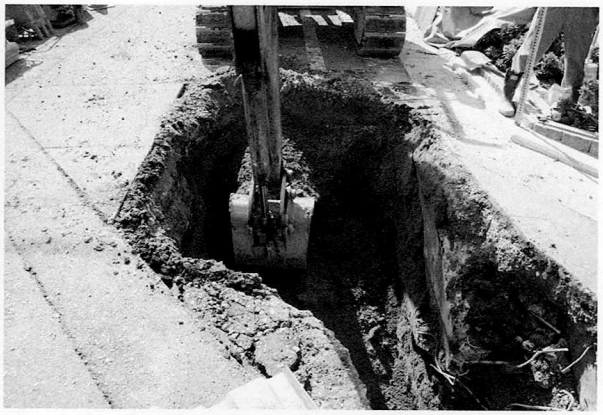
１区では、周辺の調査地と同様に弥生時代中期の遺構が密に検出され、調査地は該期の集落域の中心に含まれていると言えよう。弥生時代前期の土器も認められることから、遺構は検出されなかったものの、集落の時期は前期まで遡る可能性がある。２区では相当する地層が認められなかったが、後世の河川により削平されているものと考えられる。

参考文献

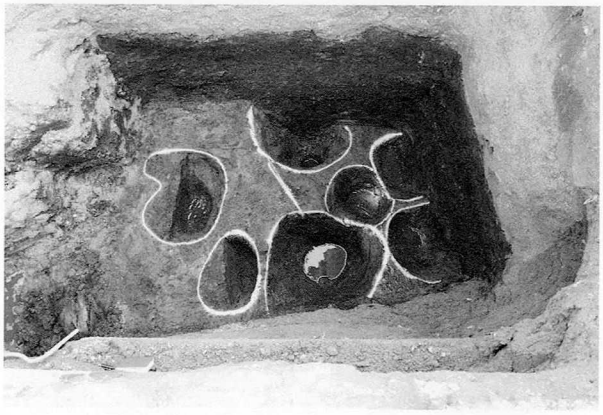
・田代克己・他1980『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会
・米田敏幸1985「２．恩智遺跡の調査〈恩智中町１丁目77－２〉」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告11　昭和59年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・坪田真一2011「Ⅰ　恩智遺跡第20次調査（ＯＪ2009－20）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告132』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

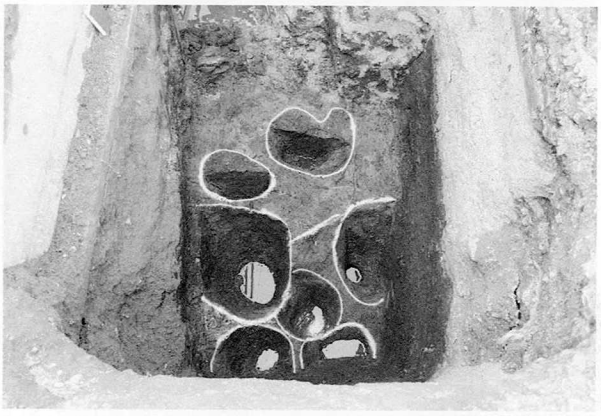
調査地（北から）



１区機械掘削（北から）



１区全景（西から）



１区全景（南から）

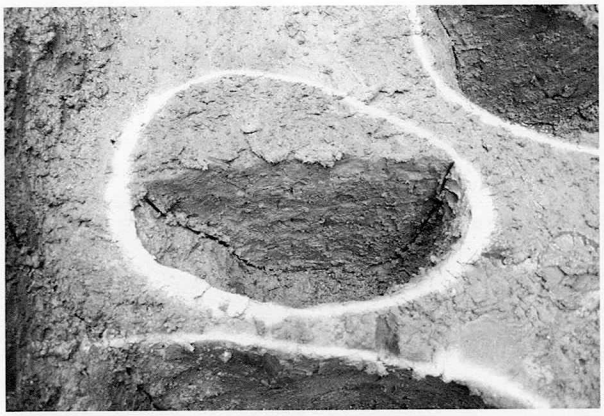
１区東壁

１区東壁

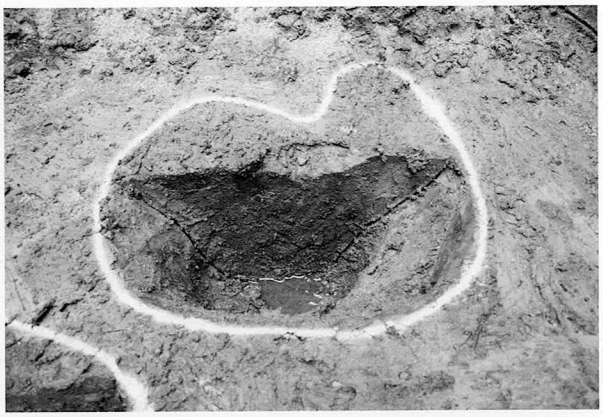
１区南壁

１区ＳＫ１（西から）

図版2



1区ＳＰ１（南から）



1区ＳＰ２（南から）

1区ＳＰ３（西から）

1区ＳＰ４底部礎板（北から）

1区ＳＰ５（北から）

1区ＳＰ６（北から）

2区東壁

2区東壁下部

V　恩智遺跡第30次調査（ＯＪ2013－30）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市恩智南町５丁目地内で実施した下水道工事(24－21工区)に伴う発掘調査報告書である。.

1．本書で報告する恩智遺跡第30次調査(ＯＪ2013－30)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成25年６月３日～７月12日(外業実働５日)に、坪田真一・西村公助を担当者として実施した。調査面積は約20㎡である。

1．現地調査においては國津れいこ・芝﨑和美・竹田貴子・永井律子・村田知子の参加を得た。

1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。

遺物復元－梶本潤二・竹田・田島宣子

遺物実測－伊藤静江・永井・村井俊子

遺物トレース－市森千恵子

その他－坪田

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……23

2．調査概要……24

1）調査の方法と経過……24

2）基本層序と出土遺物……24

3）検出遺構と出土遺物……26

3．まとめ……26

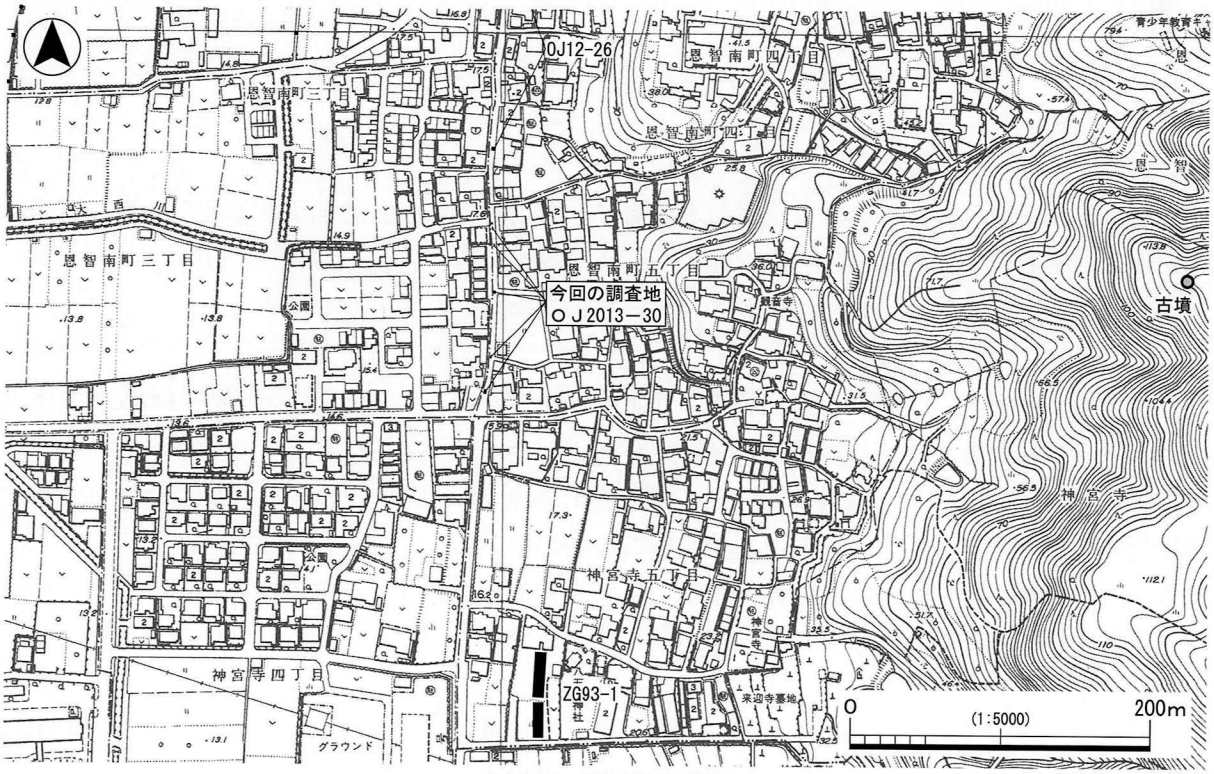
Ⅴ　恩智遺跡第30次調査（ＯＪ2013－30）

１．はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町１～４丁目、恩智中町１～５丁目、恩智南町１～５丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。

本遺跡については、古くは大正６(1917)年の梅原末治・島田貞彦両氏による踏査と鳥居龍蔵氏による試掘調査、昭和14(1939)年の大阪府の事業に伴う藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23年(1948)の今里幾次氏による出土遺物の報告等がある。そして昭和50～53年(1975～1978)には恩智川改修工事に伴う大規模な調査が瓜生堂遺跡調査会により行われ、以降、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる調査が実施されている。これらの調査により当遺跡は縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として認識されており、恩智中町３丁目に位置する「天王の杜」周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

今回の調査地は遺跡範囲の南端部にあたる。周辺では北部で第26次調査(0J12－26)を実施している程度で、あまり発掘調査は行われていない地域である。(0J12－26)では岩盤層や河川堆積を確認している。なお南約200mで実施した神宮寺遺跡第１次調査(ZG93－1)では、弥生時代中期～室町時代の遺構・遺物が多く検出されており、弥生時代中期の土器棺墓からなる墓域の確認や、室町時代の石組井戸は特筆される。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

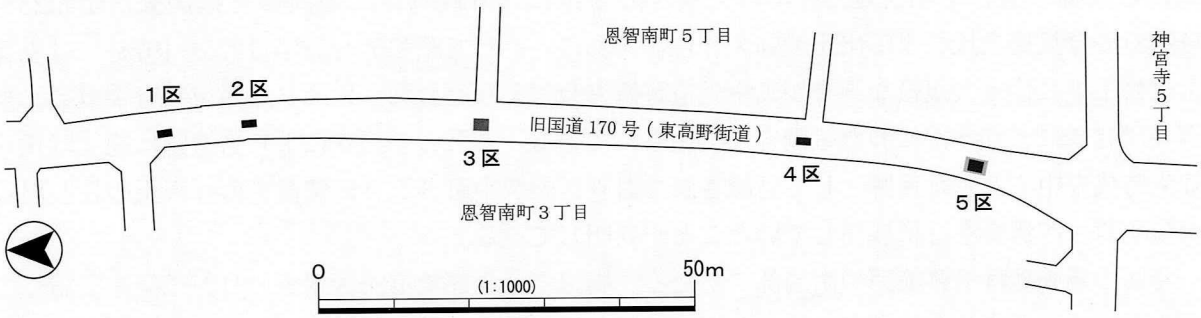
1）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市恩智南町５丁目地内で実施された下水道工事(24－21工区)に伴う調査で、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第30次調査(ＯＪ2013－30)である。

調査区は八尾市東部を縦断する旧国道170号(東高野街道)上に設定された５箇所(北から１～５区)で、内訳は立坑部分(５区)・人孔部分(３区)・小型マンホール部分(１・２・４区)、調査面積は約20㎡である。

調査は工事掘削深度である現地表(約T.P.＋16.2～17.7m)下2.0～3.2mまで機械・人力掘削併用で実施した。

調査では、調査地に点在する工事使用の仮ベンチマークを標高の基準とした。



第２図　調査区位置図

2）基本層序と出土遺物

１区

０層は盛土・撹乱。１・２層は一連の水成層で、河川堆積と考えられる。18世紀頃の堺摺鉢片が出土した。

２区

０層は盛土・撹乱。１～３層は一連の水成層で、河川堆積～土石流堆積と考えられる。遺物は２層から14世紀後半頃の瓦器鉢(１)の他、平瓦片が出土した。

１は片口を有する鉢で、調整は外面ヘラケズリ、内面ヨコハケ・ハケである。

３区

０層は盛土・撹乱。１層は土壌化層で、作土の可能性がある。２層以下は一連の水成層と考えられ、河川堆積と考えられる。遺物は２層から16世紀末頃の備前焼摺鉢片、４層から中世の土師器羽釜片、５世紀末頃の須恵器高杯片、５層から12世紀末～13世紀初頭頃に比定される瓦器椀、16世紀末頃の土師器、須恵器、瓦器羽釜、陶器片が出土した。

５層出土の瓦器椀(２～４)を図化した。いずれも体部のヘラミガキは内面のみで、見込みの暗文は平行線状である。これらは13世紀初頭頃に比定される

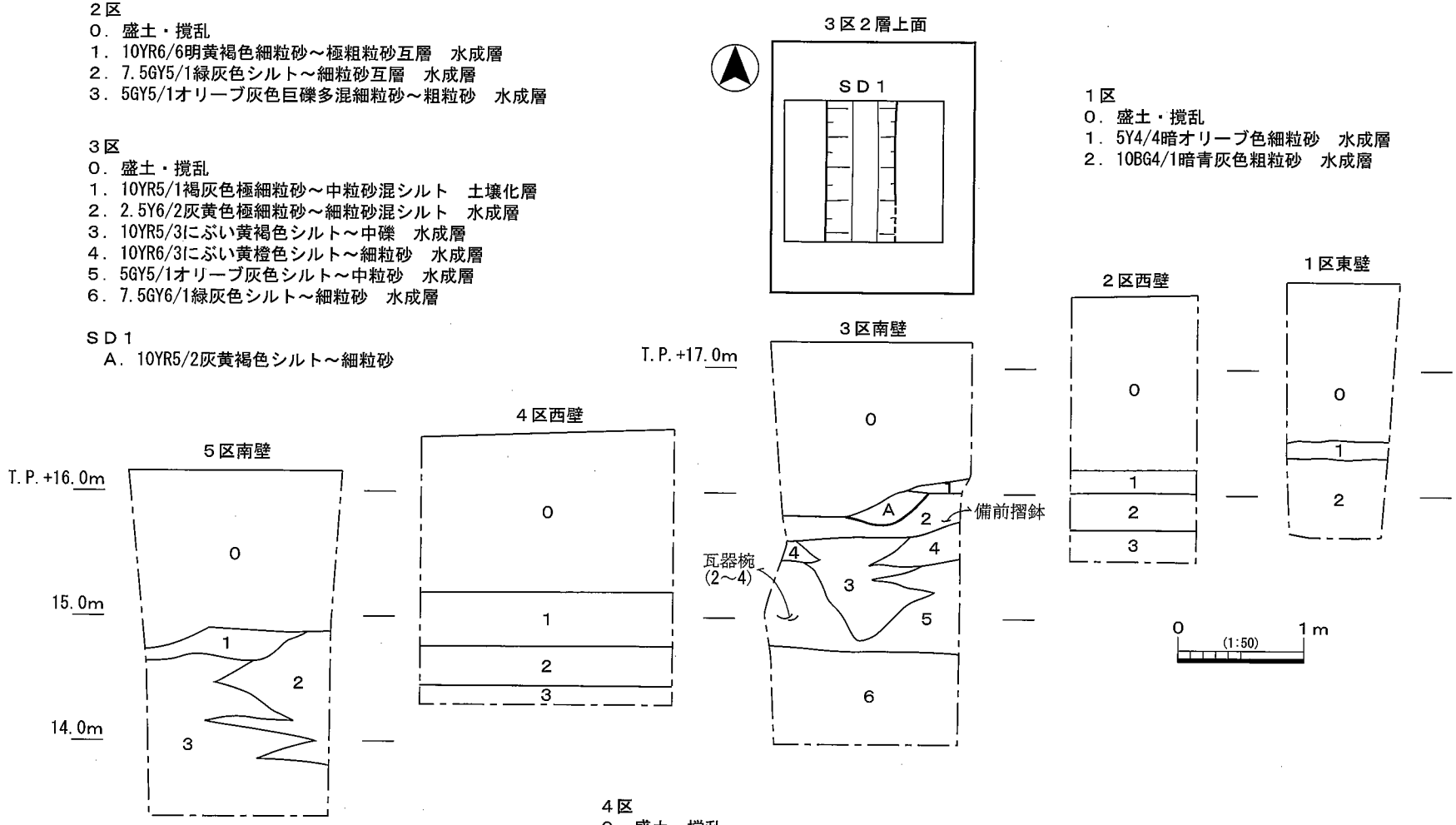
４区

０層は盛土・撹乱。１～３層は一連の水成層で、河川堆積～土石流堆積と考えられる。遺物は１層から平瓦片、２層から土師器・須恵器・瓦器片が出土した

２区
０．盛土・撹乱
１．10YR6/6明黄褐色細粒砂～極粗粒砂互層　水成層
２．7.5GY5/1緑灰色シルト～細粒砂互層　水成層
３．5GY5/1オリーブ灰色巨礫多混細粒砂～粗粒砂　水成層

３区
０．盛土・撹乱
１．10YR5/1褐灰色極細粒砂～中粒砂混シルト　土壌化層
２．2.5Y6/2灰黄色極細粒砂～細粒砂混シルト　水成層
３．10YR5/3にぶい黄褐色シルト～中礫　水成層
４．10YR6/3にぶい黄橙色シルト～細粒砂　水成層
５．5GY5/1オリーブ灰色シルト～中粒砂　水成層
６．7.5GY6/1緑灰色シルト～細粒砂　水成層

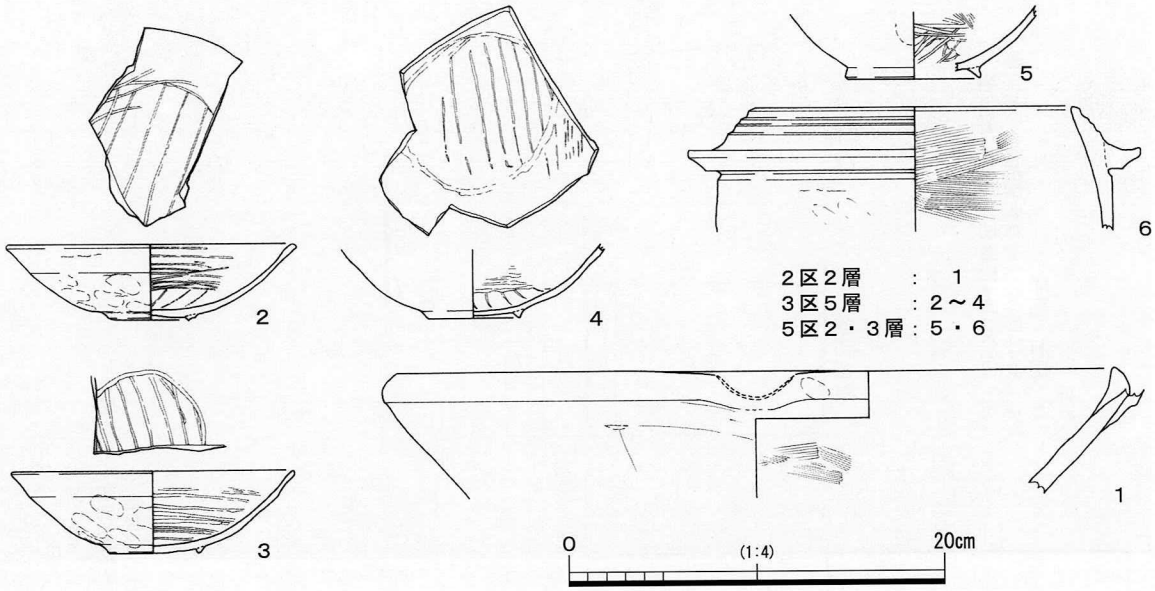
ＳＤ１
Ａ．10YR5/2灰黄褐色シルト～細粒砂



５区
０．盛土・撹乱
１．5Y5/1灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土　土壌化層　作土？
２．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土　水成層
３．5Y6/2灰オリーブ色細粒砂～極粗粒砂互層　水成層

４区
０．盛土・撹乱
１．2.5Y7/3浅黄色シルト～細粒砂　水成層
２．5GY6/1オリーブ灰色中礫混粘土～細粒砂　水成層
３．7.5Y6/1灰色中礫～巨礫混シルト質粘土～極粗粒砂　水成層

第３図　平断面図



第４図　出土遺物

５区

０層は盛土・撹乱。１層は土壌化層で、作土の可能性がある。２・３層は一連の水成層で、河川堆積と考えられる。２・３層からは12世紀後半～16世紀前半頃の土師器、須恵器、瓦器、瓦の他、弥生時代後期の土器片が出土しているが、いずれも著しく摩耗している。５・６を図化した。５は瓦器椀で、体部内面のヘラミガキは密で、見込みの暗文は乱方向に施す。12世紀中頃に比定される。６は瓦器羽釜である。内面調査はヨコハケで、体部外面はヘラケズリである。15世紀末頃に比定される。

３）検出遺構と出土遺物

３区２層上面(T.P.＋16.0m)で溝１条(ＳＤ１)を検出した。

ＳＤ１

東西方向に延びる溝で、規模は検出長約1.2m・幅約0.6m・深さ約0.3mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は水成層と考えられる単層である。遺物は中世頃の土師器、瓦器椀片が出土した。

３．まとめ

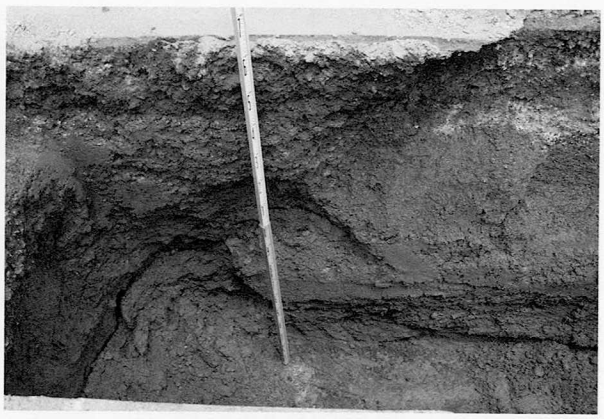
調査では北の第26次調査地と同様に、全域で河川堆積や土石流堆積からなる水成層を確認した。時期は出土遺物から中世～近世に比定される。３区では12世紀末～13世紀初頭頃に比定される瓦器椀が出土しているが、遺存状態は良好であり、近辺に該期の集落域の存在が考えられる。

参考文献

・田代克己・他1980『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会
・高萩千秋2013「Ⅲ　恩智遺跡第26次調査(ＯＪ2012－26)・郡川遺跡第13次調査(ＫＲ2012－13)」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告141』公益財団法人八尾市文化財調査研究会
・岡田清一1997「Ⅲ　神宮寺遺跡第１次調査(ＺＧ93－１)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版１

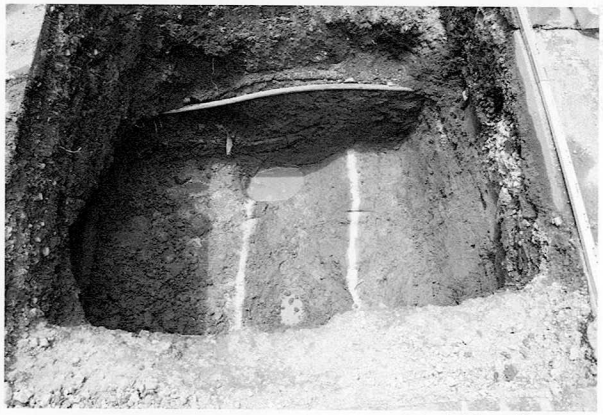
１区機械掘削（南西から）

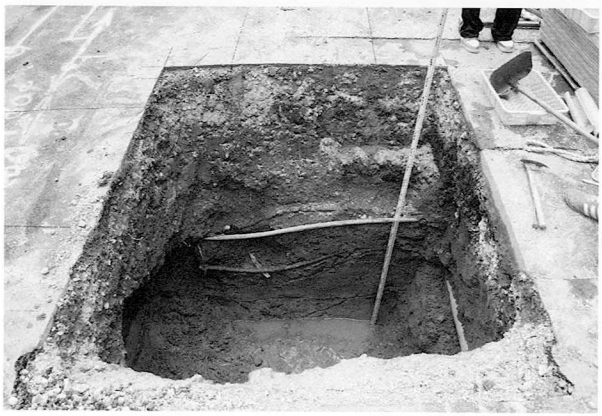

１区東壁

２区機械掘削（南東から）

２区西壁

３区遠景（南東から）

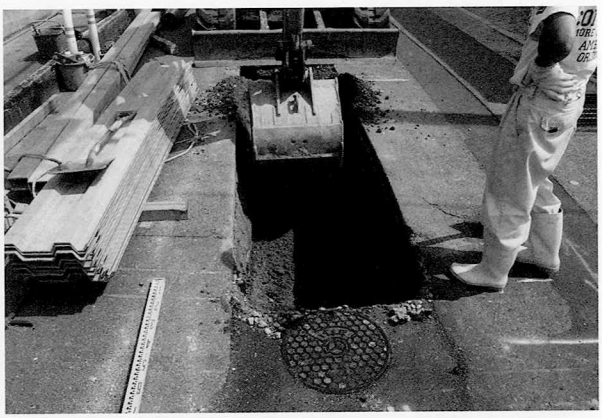

３区２層上面（北から）


３区南壁

３区南壁下部

図版2

3区南壁5層内土器出土状況



4区機械掘削(南から)

4区西壁

4区東壁

4区(南から)

5区調査地(南から)

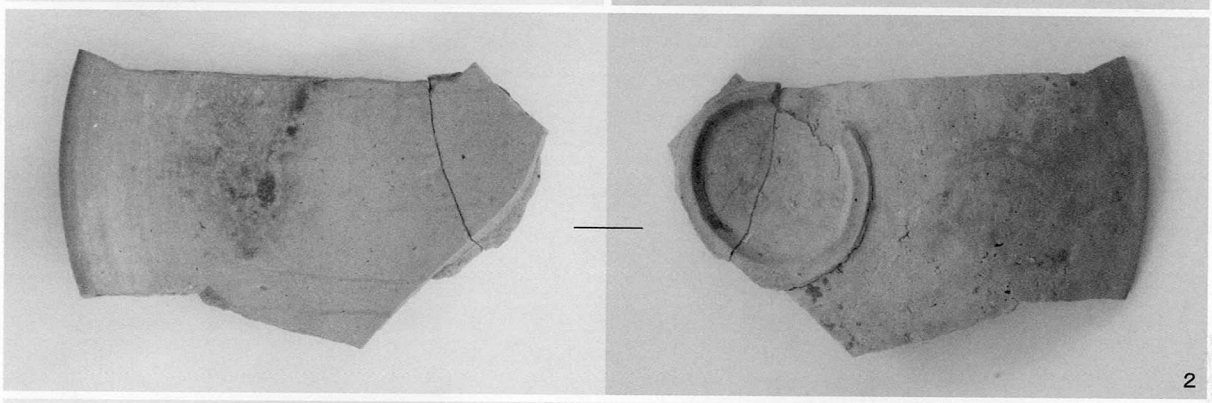
5区南壁

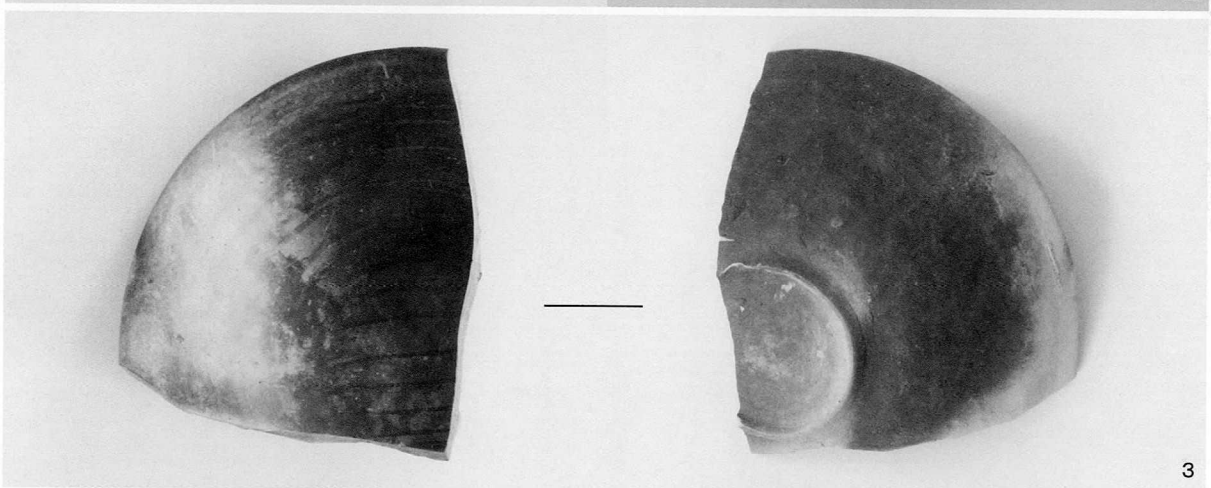
5区南壁下部

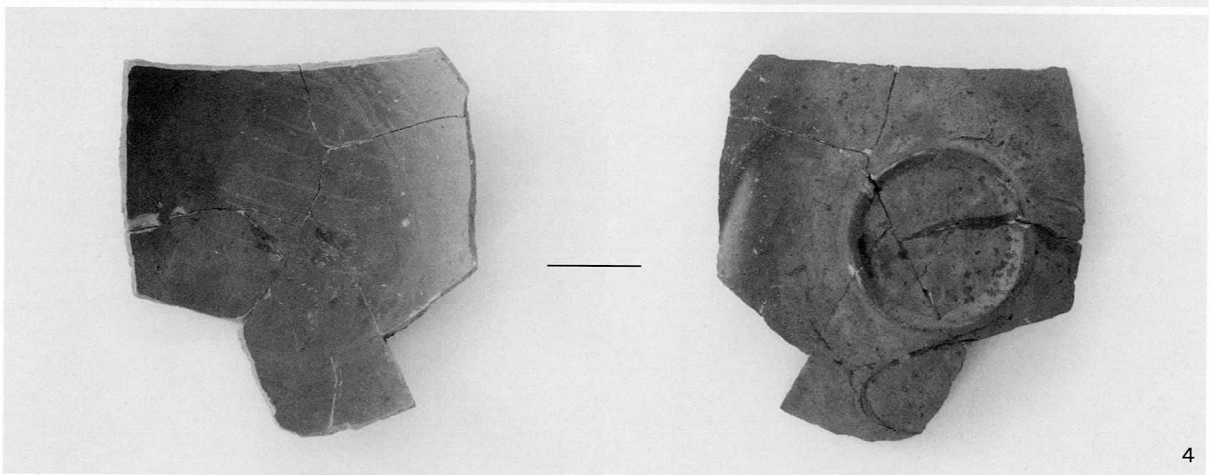
図版3

1

6


2


3


4

Ⅵ　恩智遺跡第31次調査（ＯＪ2013－31）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市恩智中町４丁目地内他で実施した下水道工事(24－43工区)に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する恩智遺跡第31次調査(ＯＪ2013－31)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成25年７月１日～10月１日(外業実働12日)に、坪田真一・西村公助を担当者として実施した。調査面積は約57㎡である。

1．現地調査においては飯塚直世・市森千恵子・伊藤静江・梶本潤二・芝﨑和美・竹田貴子・村井俊子の参加を得た。

1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。

　遺物復元－梶本

　遺物実測－飯塚・市森・伊藤・國津れいこ・田島宣子・永井律子・村井・村田知子

　遺物トレース－市森

　その他－坪田

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……31

2．調査概要……32

　1）調査の方法と経過……32

　2）基本層序と出土遺物……32

　3）検出遺構と出土遺物……32

3．まとめ……35

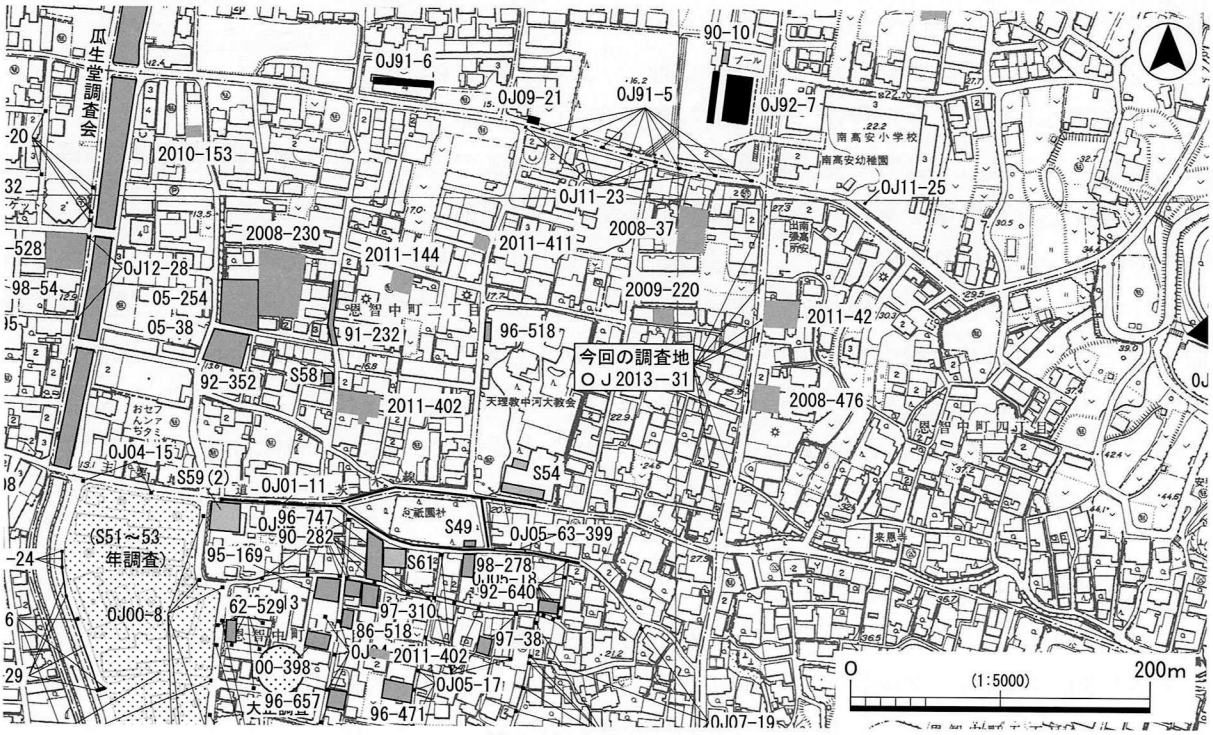
Ⅵ　恩智遺跡第31次調査（ＯＪ2013－31）

１．はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町１～４丁目、恩智中町１～５丁目、恩智南町１～５丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。

本遺跡については、古くは大正６(1917)年の梅原末治・島田貞彦両氏による踏査と鳥居龍蔵氏による試掘調査、昭和14(1939)年の大阪府の事業に伴う藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23年(1948)の今里幾次氏による出土遺物の報告等がある。そして昭和50～53年(1975～1978)には恩智川改修工事に伴う大規模な調査が瓜生堂遺跡調査会により行われ、以降、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる調査が実施されている。これらの調査により当遺跡は縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として認識されており、恩智中町３丁目に位置する「天王の杜」周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

今回の調査地は遺跡範囲の中央部を縦断する旧国道170号(東高野街道)上にあたる。周辺では北西部で第５・７・23次調査(0J91－5、0J92－7、0J2011－23)の他、遺構確認調査では旧国道沿いで恩智2008－476、2011－42、西部で恩智2008－37、2009－220を実施している。概観すると、0J91－5東部では古墳時代中期の溝、0J92－7では縄文時代後期～弥生時代中期頃と、13世紀頃の遺構・遺物、0J2011－23東部、恩智2008－476では平安時代末頃の遺構、恩智2009－220では縄文時代後期～晩期の遺物包含層を検出している。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

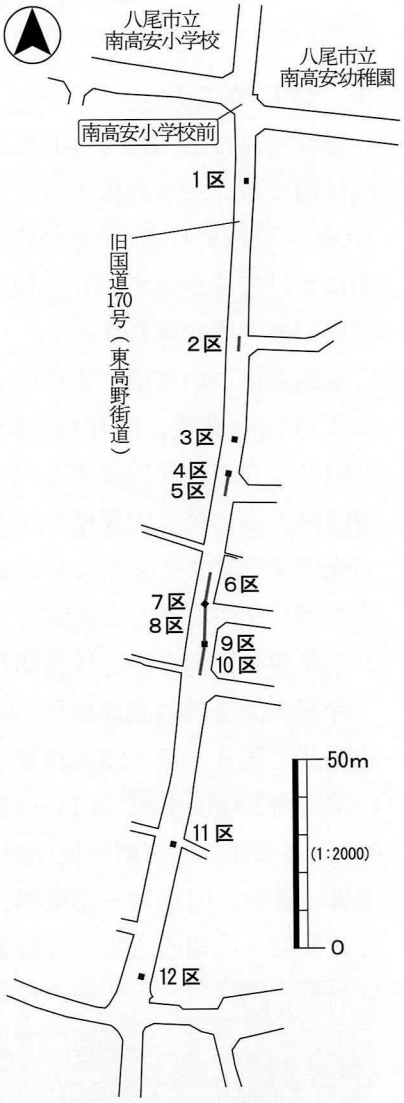
1）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市恩智中町４丁目地内他で実施された下水道工事(24－43工区)に伴う調査で、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第31次調査(ＯＪ2013－31)である。

調査区は、旧国道170号(東高野街道)上に設定された人孔部分７箇所・管路部分５箇所の計12箇所(北から１～12区)で、調査面積は計約57㎡である。内訳は、人孔部分－１・３・４・７・９・11・12区、管路部分－２・５・６・８・10区となる。

調査は工事掘削深度である現地表(約T.P.＋20.6～27.2m)下2.2～3.0mまで機械・人力掘削併用で実施した。

調査では、調査地に点在する工事使用の仮ベンチマークを標高の基準とした。



第２図　調査区位置図

2）基本層序

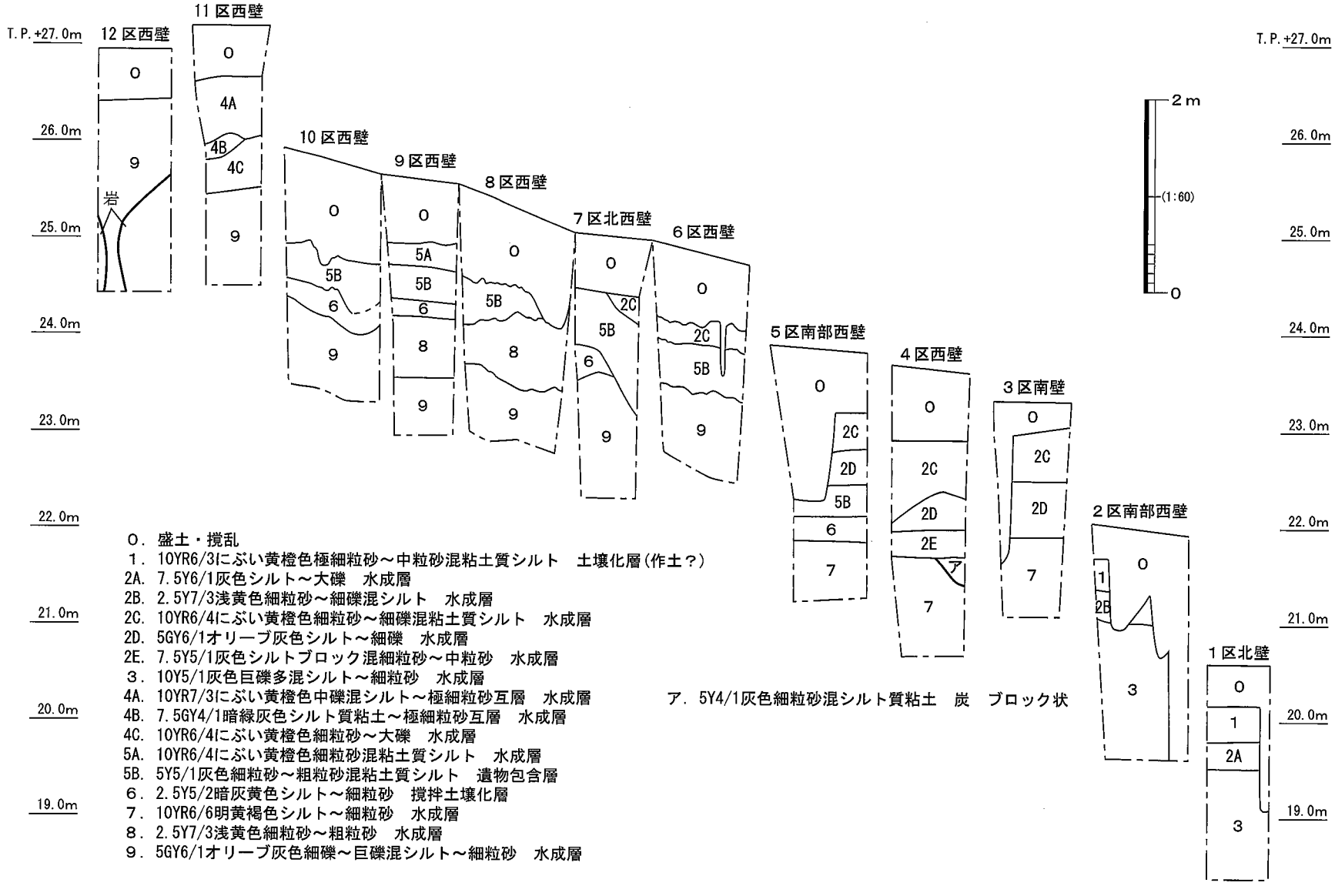
調査地は生駒山地西麓の扇状地にあたり、しかも南北約200mに亘って調査区が点在している。そのため類似する層相であっても同一の地層と断定するのは困難と考えられるが、ここでは層相と出土遺物から大まかに基本層序を設定した。

調査地は北から南に向かって上がる道路で、現地表面の標高は１区がT.P.＋20.6m、11区が27.2mで、標高差約6.6mを測る。

０層は盛土・撹乱。１層(1A・1B層)は１・２区で見られた土壌化層で、作土の可能性もある。時期は中世以降である。２層(2A～2E層)は１～７区で見られた水成層である。2C層では３区から中世頃の土師器、丸瓦片が、６区から奈良時代の土師器が出土した。３層は１・２区で見られた水成層で、径１mまでの巨礫を含む土石流堆積である。２区では最上部から13世紀前半頃までの土師器、瓦器が出土した。４層(4A～4C層)は11区で見られた水成層である。4C層から須恵器片１点が出土した。５層(5A・5B層)は５～９区で見られ、水成層と考えられる。縄文時代後期～弥生時代中期の土器を含んでいる。下位の６層は土壌化層で、弥生時代中期頃の生活面に相当すると考えられる。７層は３～５層で見られた水成層である。４区では上面で遺構状の落ち(ア層)を西壁で確認した。８層は８・９区で見られた水成層である。９層は６～10区で見られた水成層で、径１mを超えるような巨礫を含む土石流堆積である。

3）検出遺構と出土遺物

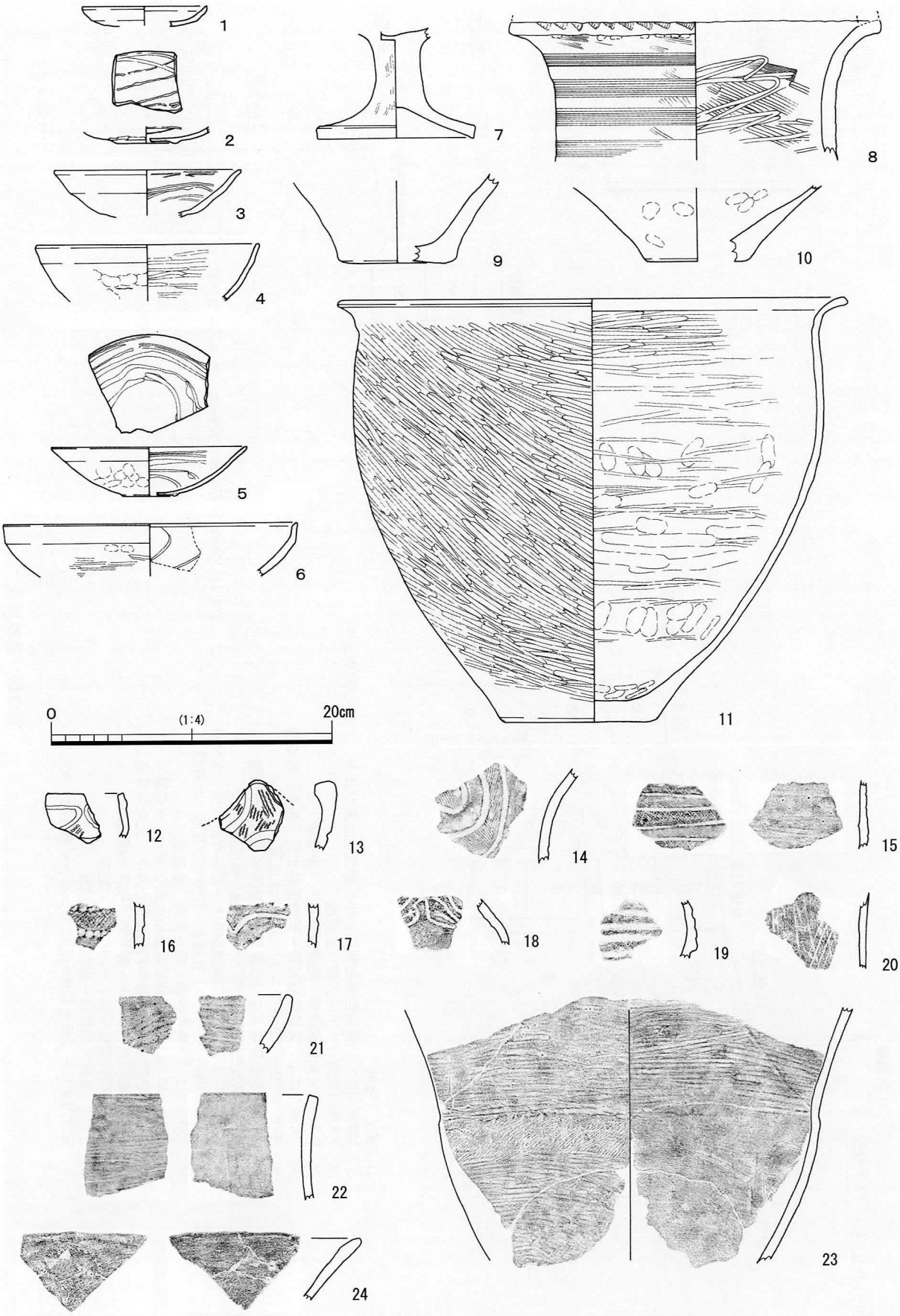
４区西壁で、７層上面(T.P.＋21.7m)から切り込む遺構状の落ち(ア層)を確認した。検出部分で深さ約30cmを測る。ア層はブロック状の層相で炭を多く含む。遺物は弥生時代中期頃に比定される土器片が出土したが、図化しえるものはなかった。



0．盛土・撹乱
1．10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂～中粒砂混粘土質シルト　土壌化層（作土？）
2A．7.5Y6/1灰色シルト～大礫　水成層
2B．2.5Y7/3浅黄色細粒砂～細礫混シルト　水成層
2C．10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂～細礫混粘土質シルト　水成層
2D．5GY6/1オリーブ灰色シルト～細礫　水成層
2E．7.5Y5/1灰色シルトブロック混細粒砂～中粒砂　水成層
3．10Y5/1灰色巨礫多混シルト～細粒砂　水成層
4A．10YR7/3にぶい黄橙色中礫混シルト～極細粒砂互層　水成層
4B．7.5GY4/1暗緑灰色シルト質粘土～極細粒砂互層　水成層
4C．10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂～大礫　水成層
5A．10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂混粘土質シルト　水成層
5B．5Y5/1灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　遺物包含層
6．2.5Y5/2暗灰黄色シルト～細粒砂　撹拌土壌化層
7．10YR6/6明黄褐色シルト～細粒砂　水成層
8．2.5Y7/3浅黄色細粒砂～粗粒砂　水成層
9．5GY6/1オリーブ灰色細礫～巨礫混シルト～細粒砂　水成層

ア．5Y4/1灰色細粒砂混シルト質粘土　炭　ブロック状

第３図　基本層序



第４図　出土遺物

地層内出土遺物

１は土師器皿である。２～５は瓦器椀である。２は見込みに粗い平行線状暗文を施す。３～５は内面にのみ粗くヘラミガキを施す。１～５は13世紀前半に比定される。２区３層上層出土。

６は土師器杯で、外面に横位のヘラミガキを、内面には螺旋状と思われる暗文を施す。奈良時代に比定されよう。６区2C層出土。

７～11は弥生土器である。７は中実の脚柱部を有する脚部で、台付鉢の台脚部と考えられる。８は有段口縁の広口壺である。口縁部上部は剥落しているが、外端面最下位に扇形文を、また頸部には４段以上の櫛描直線文を巡らせる。９・10は壺底部と考えられる。11は鉢で、全体の2/3程度が遺存しており、口径36.4cm・器高30.2cm・底径11.0cmを測る。調整は外面が左上り、内面が横位のヘラミガキである。９区北壁内で、横位で土圧により潰れた状況で出土した。これらは７・８が河内第Ⅲ様式、11が第Ⅱ様式に比定されよう。７・９－５区5B層、８・10－７区5B層、11－９区5B層出土。

12～24は縄文土器である。12～16は磨消縄文を施すもので、後期前葉の中津式に比定される。12・13は深鉢口縁部の小片で、13は波状口縁の頂部にあたる。16は凹線上に刺突文を加える。17・18は曲線基調の凹線文を施すもので、後期中葉の北白川上層式２期に比定されよう。19は凹線文を巡らせるもので、深鉢の口縁部付近と考えられる。後期後葉の元住吉山Ⅱ式に比定される。20は縁帯文土器頸部と考えられる。内外面に条痕文が見られ、外面に斜位の垂下条線を施す。後期中葉の北白川上層式２期に比定される。21～23は内外面に横位の条痕文を施す深鉢で、21・22は口縁部、23は口縁部～体部である。21・22は後期～晩期の所産であろう。23は体部内面が横位の板ナデで、口縁部～体部間の外面に縄文を施す。後期中葉の元住吉山Ⅰ式、あるいは後葉の元住吉山Ⅱ式に比定されよう。24は外面に横位の条痕文を施すもので、浅鉢口縁部と考えられる。後期～晩期の所産であろう。12・19－５区5B層、13－６区5B層、14・20－７区5B層、17・21－９区5A層、15・16・18・22・23－９区5B層、24－10区5B層出土。

３．まとめ

今回の調査では縄文時代後期～中世の遺物を検出した。出土遺物はコンテナ１箱である。

縄文時代後期～弥生時代中期では５～10区で遺物包含層（５層）を確認した。５層は水成層の可能性もあるが、遺存状況の良好な土器片も多く、近隣に該期の集落が存在するものと考えられる。周辺では北西約70mで実施した遺構確認調査〈恩智2009－220〉において縄文時代後期の包含層を確認している他、さらに南西部の「天王の杜」周辺では縄文時代晩期の集落域が確認されており、これらと関連する可能性がある。

北部の２区では13世紀前半頃の土器が出土している。周辺では北西部の0J2011－23や、６～10区東側に近接する〈恩智2008－476〉において該期の遺構を検出しており、東高野街道沿いに展開した集落が存在したものと捉えられよう。

参考文献

・田代克己・他1980『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会
・西村公助1992「Ⅳ　恩智遺跡第５次調査(ＯＪ91－５)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　財団法人八尾市文化財調査研究会報告34』財団法人八尾市文化財調査研究会
・成海佳子1997「Ⅰ　恩智遺跡第７次調査(ＯＪ92－７)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2012「Ⅳ　恩智遺跡第23次調査(ＯＪ2011－23)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告136』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助2010「Ⅰ－３－２)恩智遺跡(2008－476)の調査」『八尾市内遺跡平成21年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告61　平成21年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・坪田真一2010「Ⅱ－３－７)恩智遺跡(2009－220)の調査」『八尾市内遺跡平成21年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告61　平成21年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・寺沢　薫・森井貞雄　1989「２－１河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社

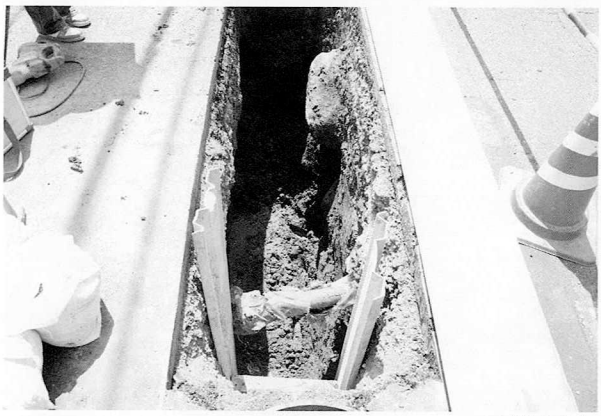
図版1

１区調査地（北から）

１区機械掘削（東から）

１区北壁

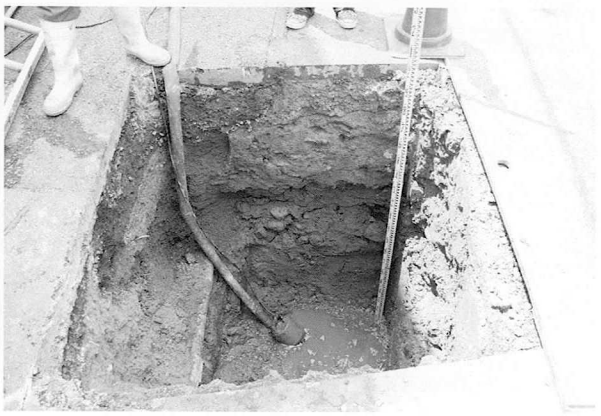
２区機械掘削（北西から）



２区（北から）

２区西壁

３区調査地（南から）



３区南壁

図版2

4区調査地（北から）

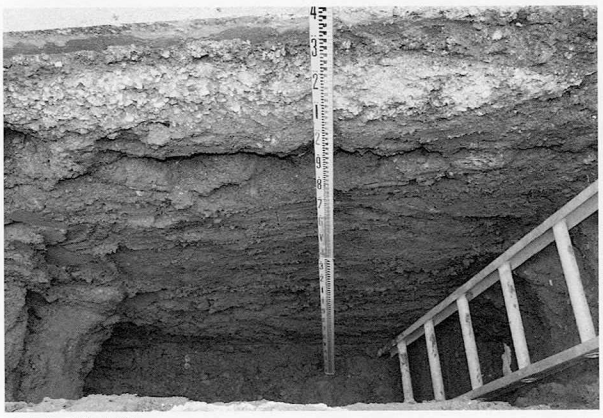
4区西壁

4区西壁ア層

5区西壁北部

5区西壁南部

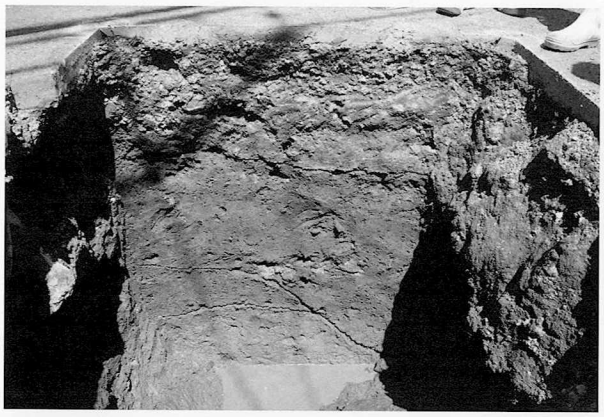
6区機械掘削（北から）



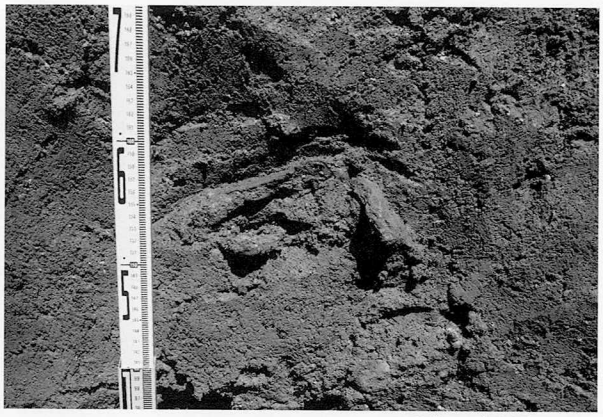
6区西壁北部

6区西壁南部

図版3



7区北西壁



7区北西壁5B層内土器

8区全景（北から）

8区西壁

9区調査地（南西から）

9区西壁

9区西壁5B層内土器

9区北壁5B層内土器

図版4

10区機械掘削（北から）

10区全景（北から）

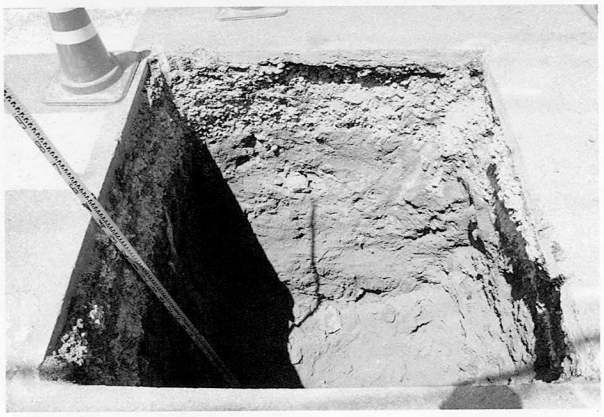
10区西壁中部

11区機械掘削（南西から）

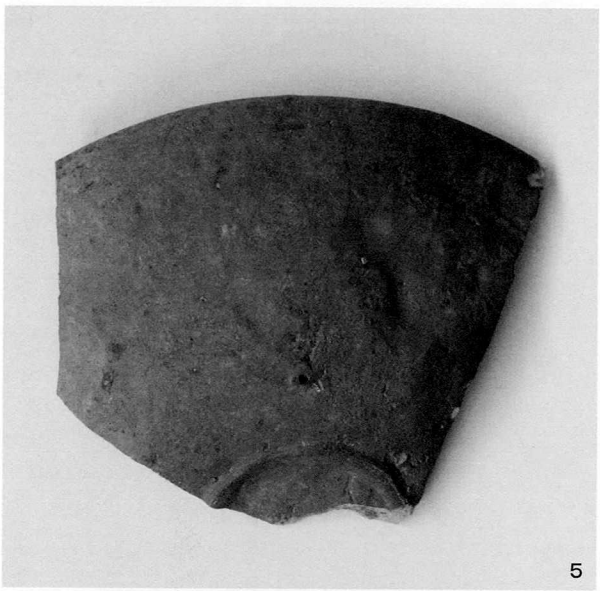
11区西壁

12区調査地（南から）

12区機械掘削（南東から）


12区西壁

図版5

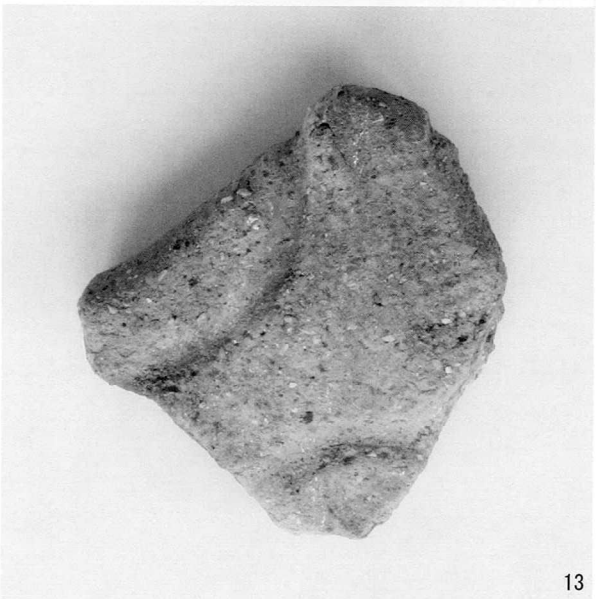

5

7

8

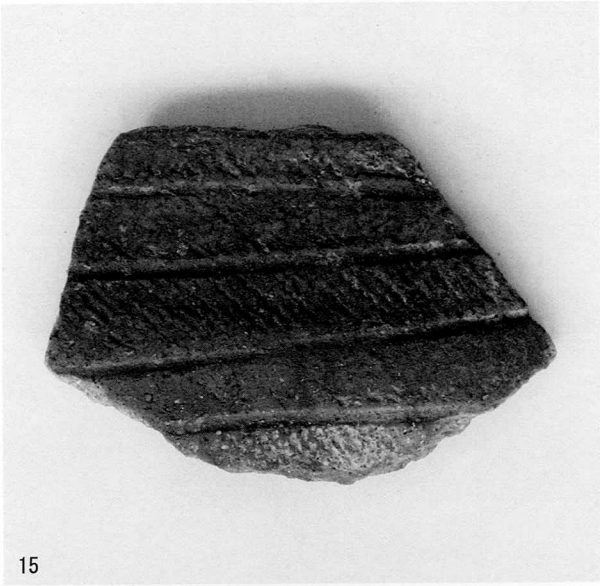
11

12

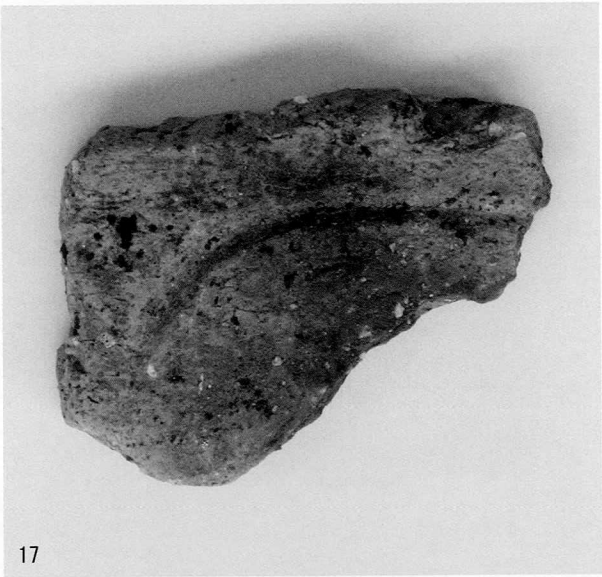

13

図版6

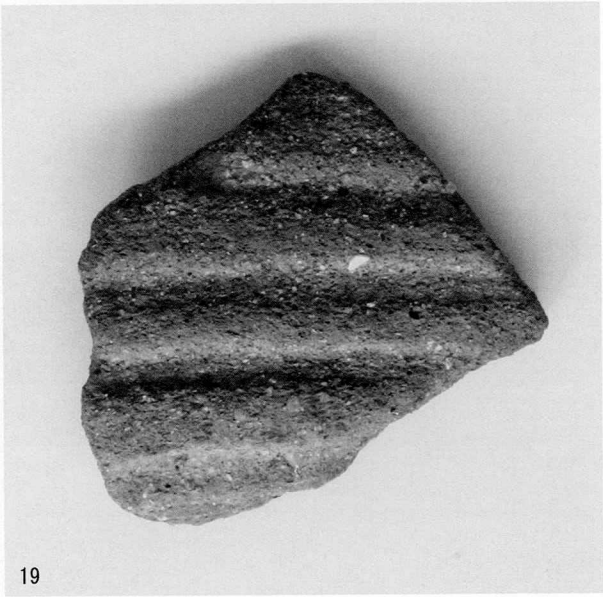
14


15

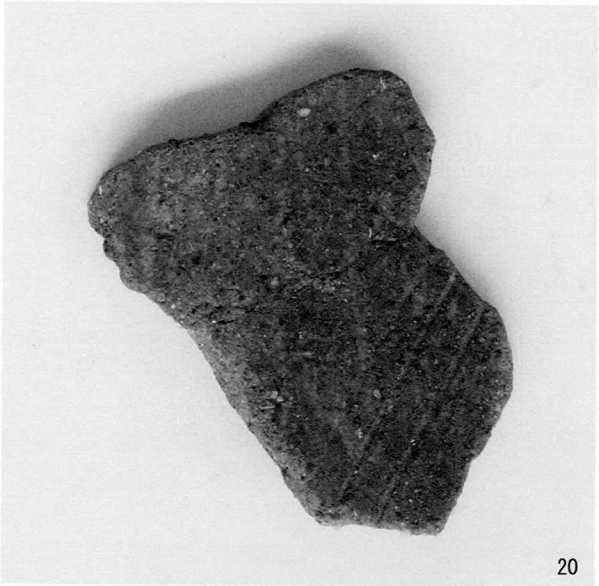
16


17

18

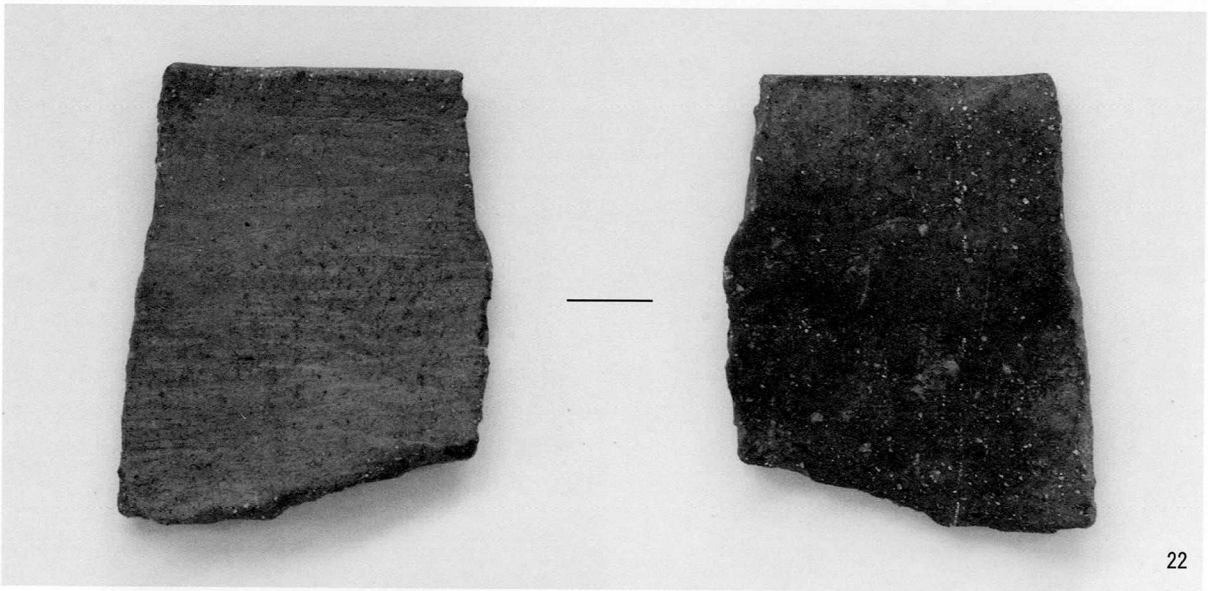

19

図版7

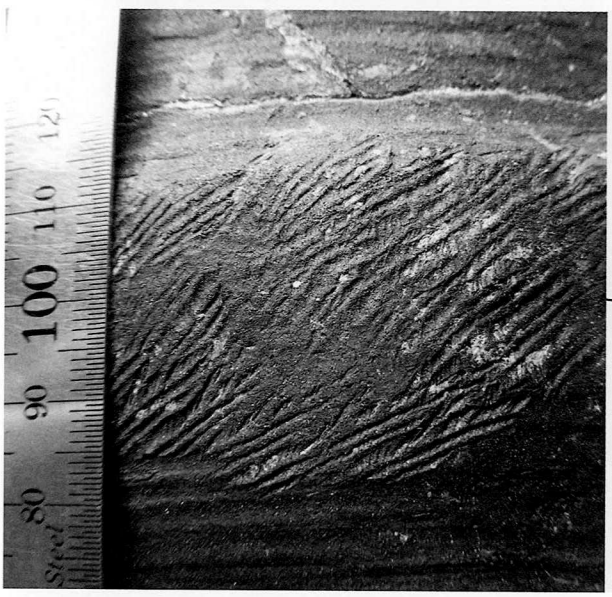


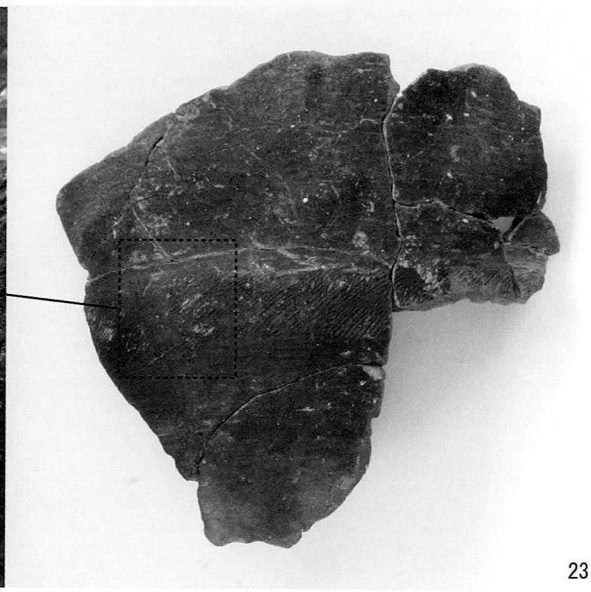
20

24



22





23

Ⅶ　木の本遺跡第25次調査（ＳＫ2013－25）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南木の本３丁目地内で実施した下水道工事(24－41工区)に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する木の本遺跡第25次調査(ＳＫ2013－25)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成25年６月３日(外業実働１日)に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約４㎡である。
1．現地調査においては、梶本潤一・田島宣子の参加を得た。
1．内業整理業務は西村が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

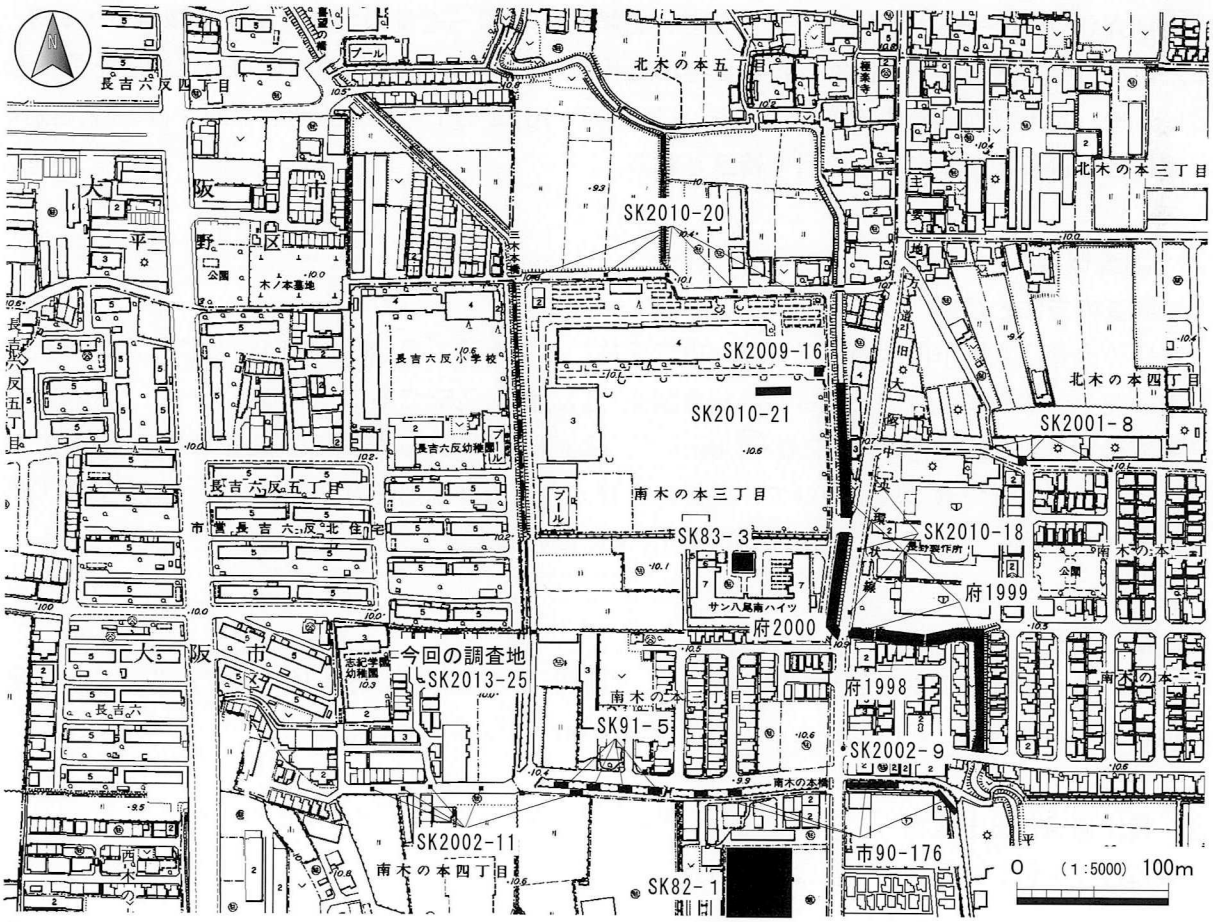
1．はじめに……45
2．調査概要……46
　1）調査の方法と経過……46
　2）基本層序……46
　3）検出遺構と出土遺物……46
3．まとめ……47

Ⅶ　木の本遺跡第25次調査（ＳＫ2013－25）

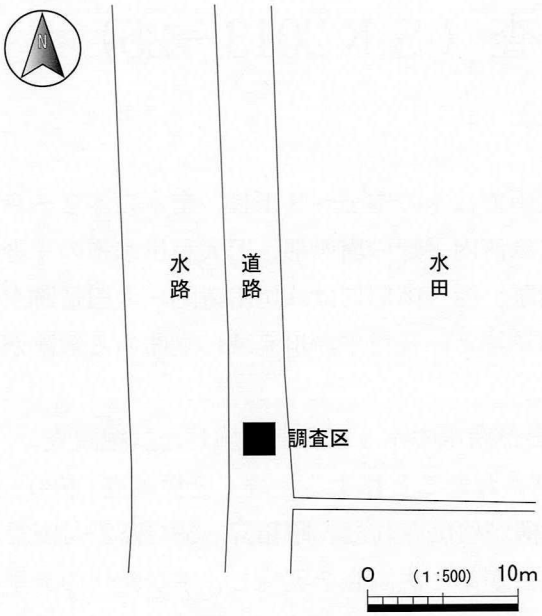
１．はじめに

木の本遺跡は八尾市の南部に位置し、現在の行政区画では木の本１～３丁目、南木の本２～９丁目、空港１丁目がその範囲とされている。地形的には河内平野の南西部、旧大和川水系の平野川左岸の沖積地上に位置し、東に田井中遺跡・老原遺跡、西～南側には八尾南遺跡・太田遺跡が隣接する他、北側には太子堂遺跡・植松遺跡・植松南遺跡といった平野川流域に展開する遺跡が存在する。

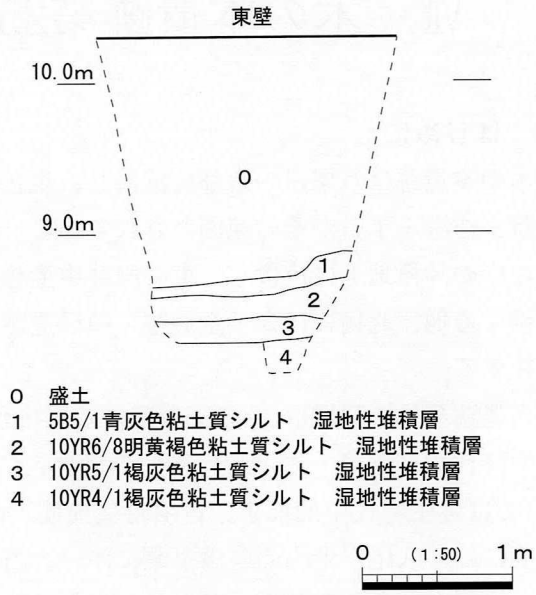
当遺跡発見の契機は、昭和56年度に八尾市教育委員会が南木の本４丁目で実施した試掘調査で、弥生時代中期前半～古墳時代後期の遺物包含層が確認されたことによる。続く発掘調査（市80～81）では弥生時代中期前半、古墳時代前期・中期の遺構が検出された。昭和57・58（1982・1983）年度には、八尾空港内の整備事業に伴い、当調査研究会が第１次調査を実施し、平安時代の条里水田の広がりを確認した。その後も河川改修や、下水道工事等に伴う調査が大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により実施され、弥生時代前期以降の遺跡であることが確認されている。



第１図　調査地周辺図



第２図　調査区位置図



第３図　断面図

今回の調査地は遺跡範囲西端にあたる。南東部では大阪府教育委員会により平野川改修工事に伴う調査(府1998～2000)が実施されており、古墳時代初頭～近世の集落遺構が確認されている。また南部の第３次調査(ＳＫ83－３)では古墳時代前期～中期の掘立柱建物・遺物包含層を検出している他、北東部に近接する第16次調査(ＳＫ2009－16)で出土した弥生時代後期～古墳時代前期の銅鏃は、遺存状況が良好な資料で特筆される。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市南木の本３丁目地内で実施した下水道工事(24－41工区)に伴う調査で、当調査研究会が木の本遺跡内で行った第25次調査(ＳＫ2013－25)である。

調査地は人孔部分１箇所(約2.0×2.0m)で、総面積は約4.0㎡を測る。調査は現地表(T.P.＋10.3m)下2.2mまでの地層について、機械および人力により掘削を行い実施した。調査では工事使用のベンチマーク(KBM.3：T.P.＋10.234m)を標高の基準とした。

２）基本層序

№4人孔を現地表下約2.2mまで調査した。現地表面の標高はT.P.＋10.3mである。０～４層の堆積層を確認した。０層は盛土。１～４層は湿地性堆積層である。

３）検出遺構と出土遺物

遺構の検出および遺物の出土はなかった。

３．まとめ

今回の調査地では湿地性堆積層を確認したに留まった。当地は集落域から外れていると考えられる。

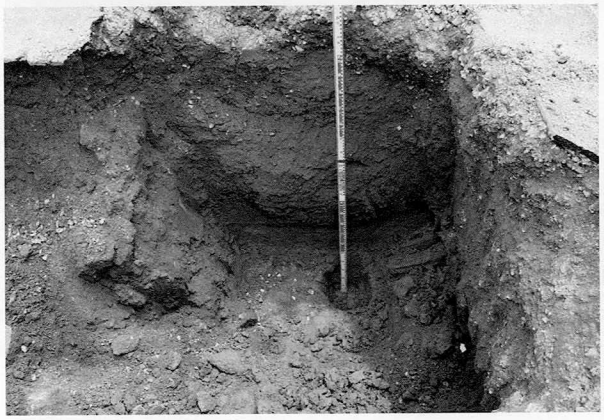
参考文献

・原田昌則・成海佳子1983「第３章　木の本遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度　財団法人八尾市文化財調査研究会報告２』財団法人八尾市文化財調査研究会
・藤沢真依・他1999『木の本遺跡発掘調査概要・Ⅲ－平野川改修工事に伴う発掘調査－』大阪府教育委員会
・横田明・岩瀬透1999『木の本遺跡発掘調査概要・Ⅳ－１級河川平野川改修工事に伴う発掘調査－』大阪府教育委員会
・藤田道子2001『木の本遺跡発掘調査概要・Ⅴ－一級河川平野川改修工事に伴う発掘調査－』大阪府教育委員会
・原田昌則・他1984『木の本遺跡　－八尾空港整備事業に伴う発掘調査－　財団法人八尾市文化財調査研究会報告４』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2011「Ⅲ　木の本遺跡第16次調査（ＳＫ2009－16）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告132』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2012「Ⅷ　木の本遺跡第20次調査（ＳＫ2010－20）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告136』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2012「Ⅱ　木の本遺跡第21次調査（ＳＫ2010－21）」『財団法人八尾市文化財調査研究会138』財団法人八尾市文化財調査研究会

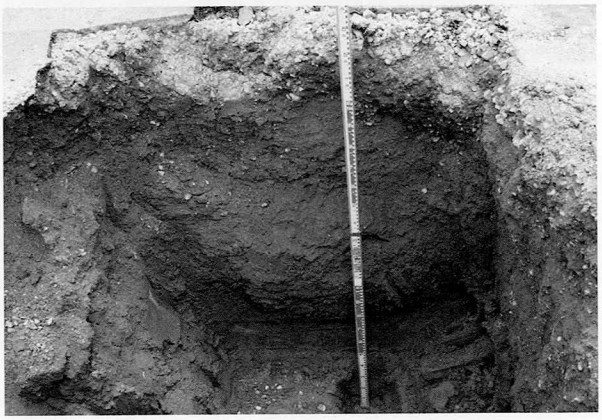
図版1

調査地周辺（北東から）

機械掘削状況（北から）



４層上面全景（西から）



東壁０～４層（西から）

Ⅷ　久宝寺遺跡第85次調査（ＫＨ2012－85）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南久宝寺１丁目地内他で実施した下水道工事(24－26工区)に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する久宝寺遺跡第85次調査(ＫＨ2012－85)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成25年１月24日～３月７日(外業実働３日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約12㎡である。

1．現地調査においては、飯塚直世・梶本潤二・芝﨑和美・竹田貴子・田島宣子の参加を得た。

1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
　遺物実測－飯塚、遺物トレース－市森千恵子、その他－坪田。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……49
2．調査概要……50
　1）調査の方法と経過……50
　2）基本層序……50
　3）検出遺構と出土遺物……50
3．まとめ……52

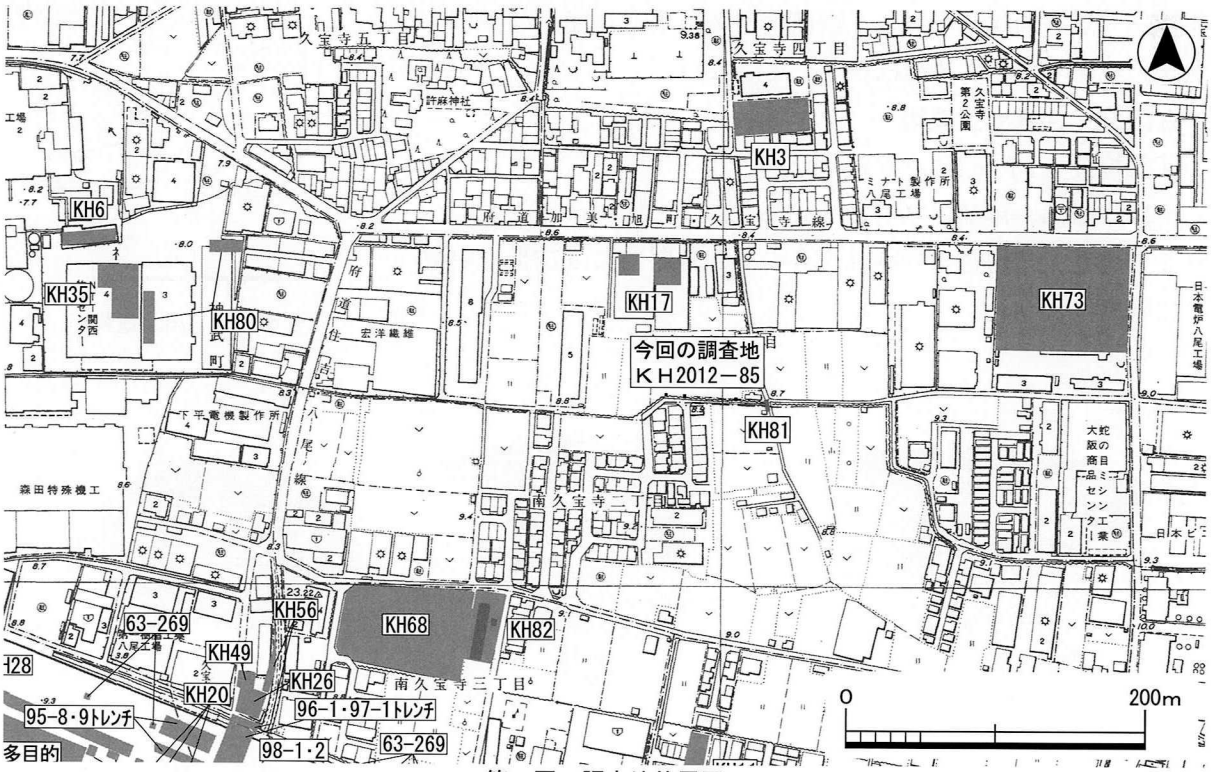
Ⅷ　久宝寺遺跡第85次調査（ＫＨ2012－85）

１．はじめに

久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画によると、八尾市内では北久宝寺１～３、久宝寺１～６、西久宝寺、南久宝寺１～３、神武町、北亀井町１～３、龍華町１・２、渋川町１～７がその範囲となっており、さらに西の大阪市域・北の東大阪市域に広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・亀井遺跡・太子堂遺跡が存在する。

当遺跡発見の契機は、昭和10年に八尾市久宝寺５丁目で行われた道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことによる。昭和48年度には、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道天理～吹田線関連の総延長13.5kmに及ぶ発掘調査が開始され、以降、大阪府文化財センター・東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会において多次にわたる発掘調査が実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代晩期～近世にわたる遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は遺跡範囲中心部のやや南東にあたり、北側には中世末以降に久宝寺御坊顕証寺を中核として発展する久宝寺寺内町が位置している。調査地周辺では当調査研究会が第３・17・73・81次調査(KH3・17・73・81)を実施しており、KH17では弥生時代後期末～古墳時代前期、平安時代後期、KH3・81では古墳時代前期、KH73では奈良時代～中世を中心とした遺構が検出されている。なかでもKH17出土の古墳時代前期の多量の木製品(紡織具・農具等)や、KH3検出の古墳時代前期の方形周溝墓、KH81検出の近世用水施設は特筆される。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市南久宝寺１丁目地内他で実施した下水道工事(24－26工区)に伴う調査で、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第85次調査(ＫＨ2012－85)である。

調査地は人孔部分(約2.0×2.0m)３箇所(西から１～３区)で、総面積は約12㎡を測る。

調査は工事掘削深度である現地表(約T.P.＋8.5～8.8m)下約3.0mまでについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査においては、工事設計図記載のベンチマーク(KBM.1:T.P.＋8.800m)を標高の基準とした。

2）基本層序

０層は盛土・撹乱、及び現況の東西水路堆積土である。１層は３区で見られた撹拌された作土である。時期は近世であろう。２・３層は３区で見られた土壌化層で、作土の可能性もある。中世の土師器・瓦器が出土した。４層は１区で見られた水成層で、河川堆積層である。５層は３区で見られた水成層で、河川堆積層である。東に約20mの地点で実施した第81次調査では、約T.P.＋6.6mまで及んでいたが、当地ではT.P.＋5.8m以下に及んでおり、より河川の流心に近いと捉えられる。６層以下は１・２区で見られた。６～９層の粘土層は炭酸鉄やラミナ状の植物遺体を含む層相で、湿地性の水成層である。10層は暗色を呈する土壌化層である。２区では古式土師器と考えられる土器片が出土した。11層は水成層で、河川堆積層であろう。

3）検出遺構と出土遺物

２区11層上面(約T.P.＋5.9m)でピット１個(ＳＰ１)を検出した。

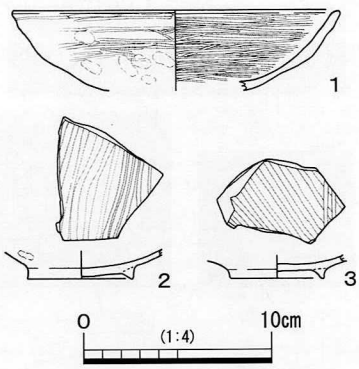
ＳＰ１

平面形は南北主軸の楕円形を呈し、規模は南北約35cm・東西約22cm・深さ約10cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層である。遺物は出土していない。

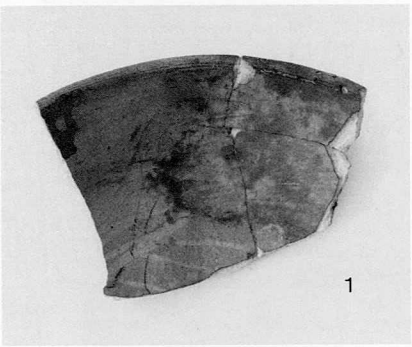
３区２・３層出土遺物

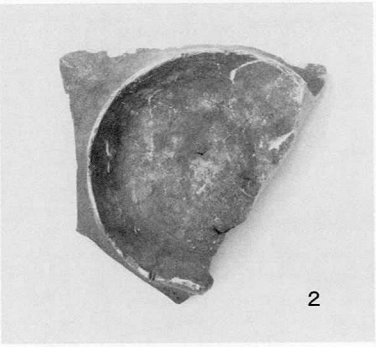
瓦器椀３点(１～３)を図化した。

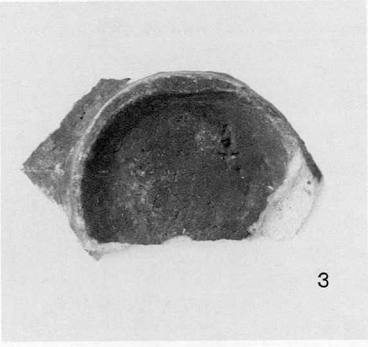
１は口縁部～体部、２・３は底部である。いずれも内面のヘラミガキが比較的密に施されるもので、時期的には12世紀中頃に比定されよう。

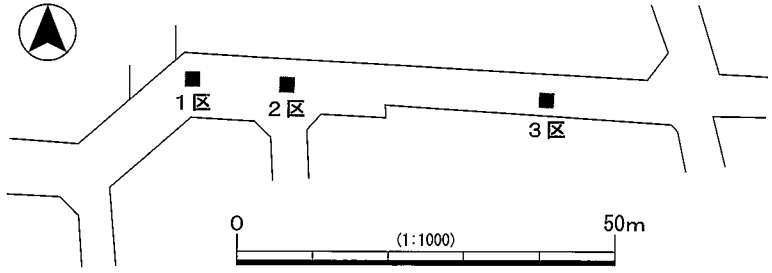


第４図　出土遺物

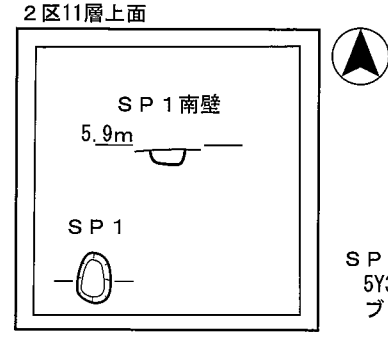




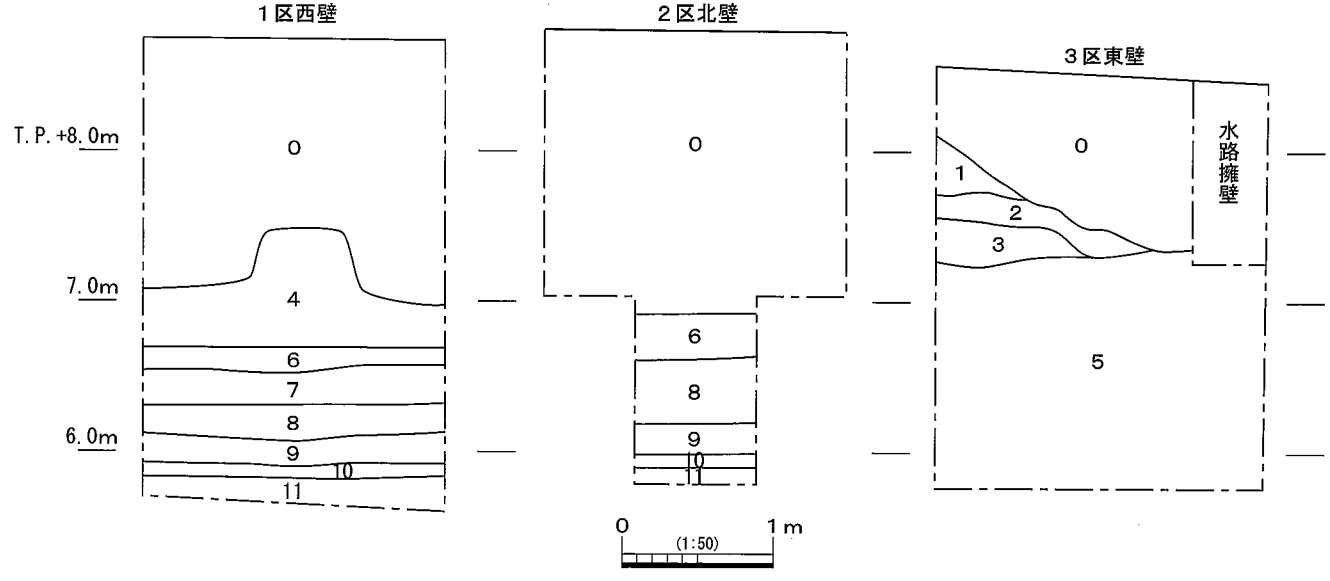




第２図　調査区位置図



SP1
5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土混シルト
ブロック状



０．盛土・撹乱・現水路堆積層
１．10YR7/4にぶい黄橙色シルト質粘土～粗粒砂　撹拌作土
２．10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　炭　土壌化層
３．2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土混細粒砂～粗粒砂　土壌化層
４．5Y6/1灰色シルト～粗粒砂　水成層（河川堆積）
５．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～極粗粒砂　細礫～大礫や粘土ブロック含む　水成層（河川堆積）
６．2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　炭酸鉄　水成層（湿地性堆積）
７．2.5GY6/1オリーブ灰色粘土　水成層（湿地性堆積）
８．7.5GY6/1緑灰色粘土　炭酸鉄　水成層（湿地性堆積）
９．5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　ラミナ状炭化植物遺体　水成層（湿地性堆積）
10．2.5GY3/1暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　土壌化層
11．2.5GY6/1オリーブ灰色シルト～極細粒砂互層　水成層（河川堆積）

第３図　平断面図

３．まとめ

１・２区ではT.P.＋5.9～6.0mで古墳時代前期頃と考えられる遺物包含層、T.P.＋5.8～5.9mで遺構面を確認し、２区では該期のピット１個を検出した。３区ではT.P.＋7.5m前後で平安時代末頃の遺物包含層を確認したが、１・２区では削平されているようである。

古墳時代前期の集落域は北部・東部の調査地、平安時代末頃の集落域は北部の調査地において確認されており、それらの広がりを確認した。３区で見られた河川堆積（５層）は、東部のKH81や北西部のKH7でも確認されており、平安時代中期頃に埋没する大規模な河川の存在が想定できる。

参考文献

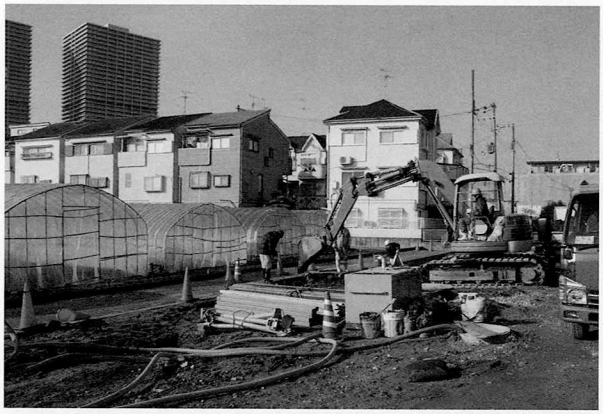
・西村公助1989「6　久宝寺遺跡（第３次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度　財団法人八尾市文化財調査研究会報告25』財団法人八尾市文化財調査研究会

・岡田清一1997「Ⅱ　久宝寺遺跡第17次調査（ＫＨ93－17）」『久宝寺遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告55』財団法人八尾市文化財調査研究会

・荒川和哉・他2009「Ⅰ　久宝寺遺跡第73次調査（ＫＨ2007－73）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告127』財団法人八尾市文化財調査研究会

・坪田真一2013「Ⅸ　久宝寺遺跡第81次調査（ＫＨ2011－81）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告141』公益財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

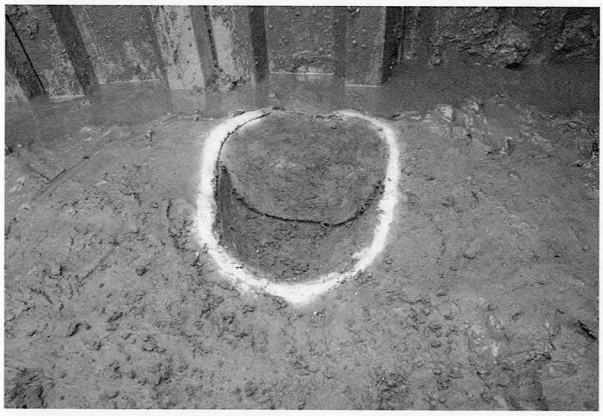


調査地（北東から）

１区西壁上部

１区西壁下部

２区全景（北から）



２区ＳＰ１（北から）

２区北壁

３区機械掘削（西から）

３区東壁

Ⅸ　久宝寺遺跡第86次調査（ＫＨ2013－86）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南久宝寺３丁目地内で実施した下水道工事(24－206工区)に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する久宝寺遺跡第86次調査(ＫＨ2013－86)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成25年７月24日～９月20日(外業実働14日)に、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約99㎡である。
1．現地調査においては飯塚直世・梶本潤二・芝﨑和美・竹田貴子の参加を得た。
1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
　遺物実測－飯塚・伊藤静江・村田知子
　遺物トレース－市森千恵子
　その他－坪田
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……55
2．調査概要……56
　1）調査の方法と経過……56
　2）基本層序……57
　3）検出遺構と出土遺物……57
3．まとめ……57

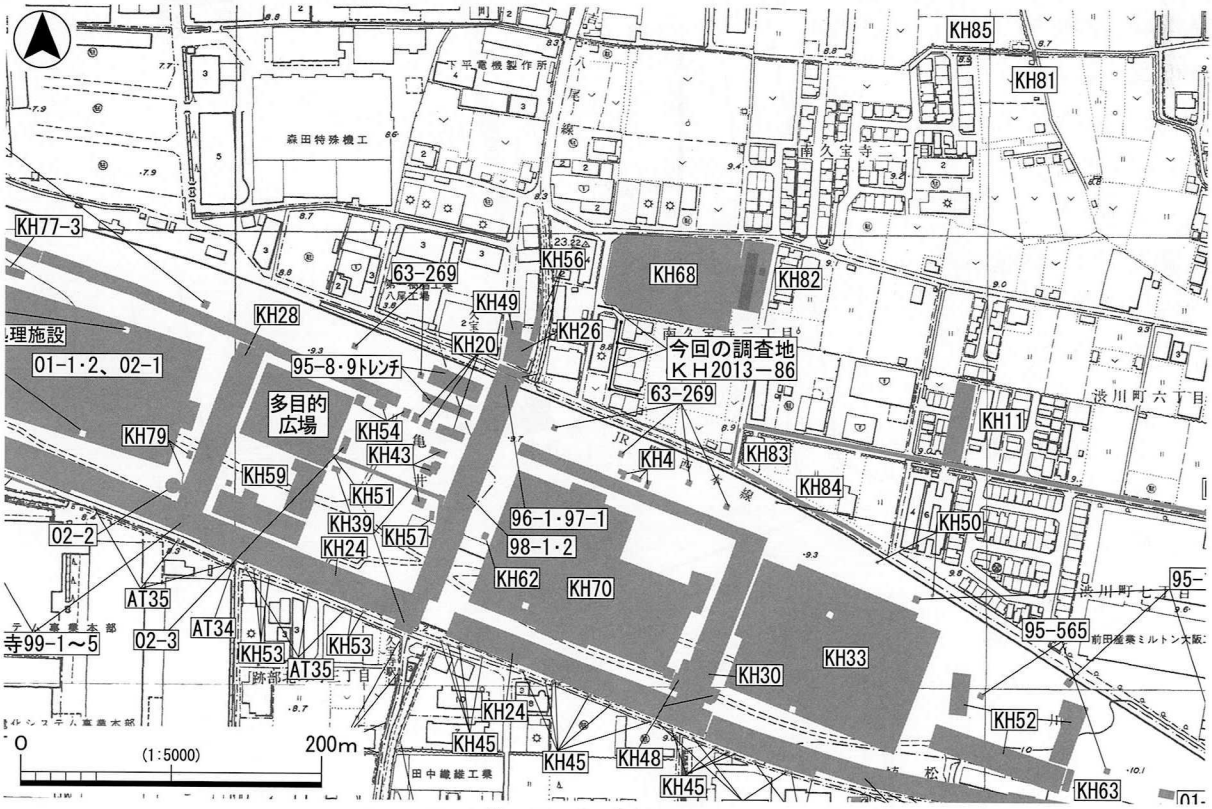
Ⅸ　久宝寺遺跡第86次調査（ＫＨ2013－86）

１．はじめに

久宝寺遺跡は、古大和川の主流であった古長瀬川左岸の低位沖積地に位置する縄文時代晩期～近世の複合遺跡である。八尾市の北西部に位置し、現在の行政区画では八尾市久宝寺１～６、北久宝寺１～３、西久宝寺、南久宝寺１～３、神武町、北亀井１～３、龍華町１・２、渋川町１～７、及び東大阪市大蓮東５、大蓮南２一帯の東西1.8km・南北1.7kmがその範囲にあたる。当遺跡の周辺には、北東に佐堂遺跡、東に宮町遺跡・八尾寺内町遺跡・成法寺遺跡、南に亀井遺跡・跡部遺跡、西に加美遺跡（大阪市）が隣接している。

当遺跡は、昭和10年に八尾市久宝寺５丁目で実施された道路工事中に、弥生土器や土師器・須恵器、そして丸木舟の残片が出土したことが発見の契機となった。その後、昭和55～61年に（財）大阪文化財センター（現、財団法人大阪府文化財センター。以下府センター）によって実施された近畿自動車道建設に伴う発掘調査により、縄文時代晩期～近世の複合遺跡であることが判明した。また遺跡範囲の南部を占める旧国鉄竜華操車場跡地の再開発にあたっては、昭和63年以降、府センター、八尾市教育委員会、当調査研究会によって継続的に調査が実施されており、府センターによる水処理施設調査地では古墳時代初頭～前期の墳墓が60基以上検出されており特筆される。

今回の調査地は遺跡範囲の南部、旧国鉄竜華操車場北側に位置する。周辺では北東部で当調査研究会による第68・82次調査、西部で第26・49・56次調査等があり、古墳時代中期～後期を中心とする多大な調査成果を得ている。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

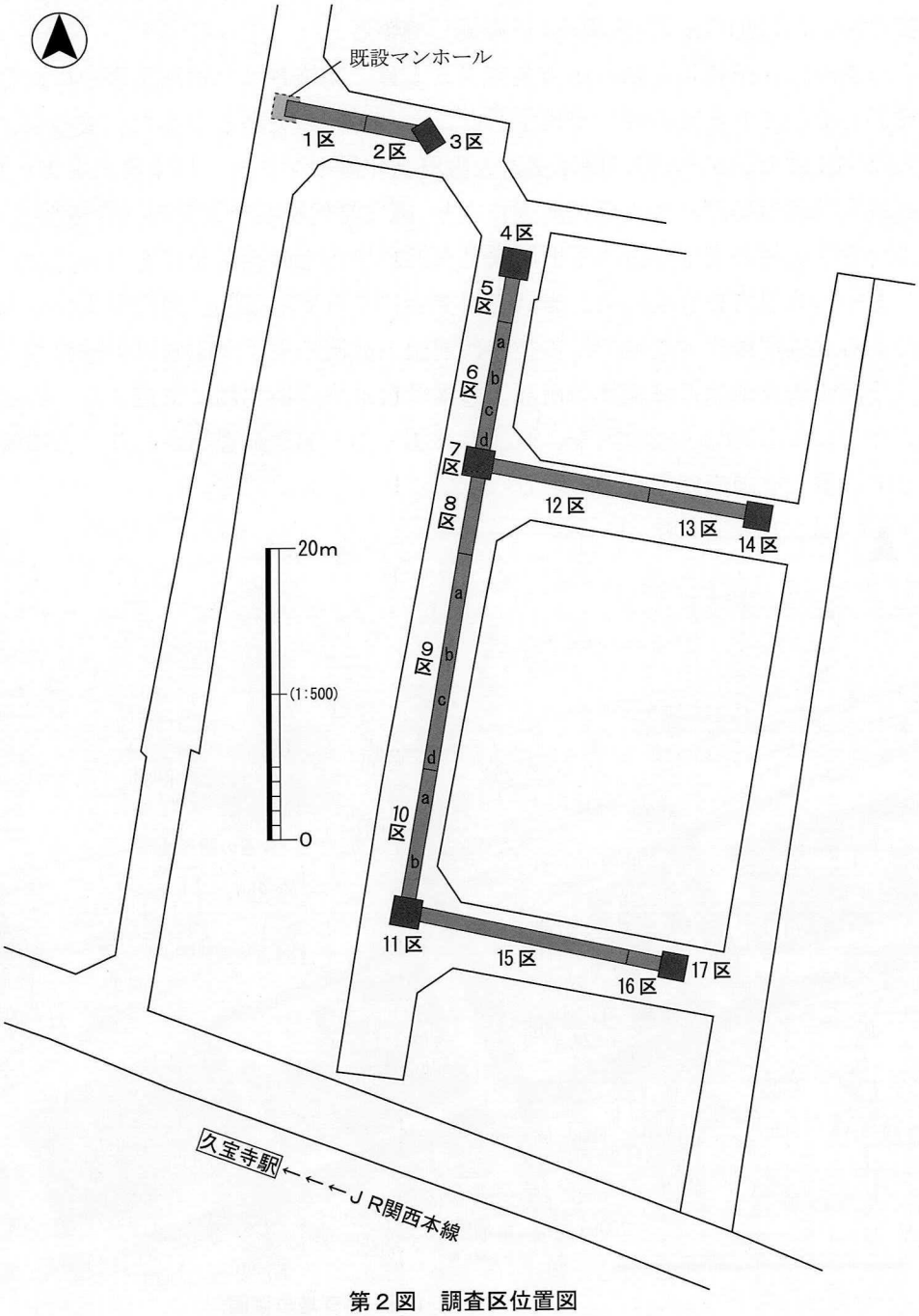
今回の調査は八尾市南久宝寺３丁目地内で実施された下水道工事(24－206工区)に伴う調査で、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第86次調査(ＫＨ2013－86)である。

調査区は立坑部分１箇所(約1.5×2.0m)、人孔部分５箇所(約2.0×2.0m)、及び管路部分約76.0m(幅約0.8～1.0m)で、調査面積は約99㎡である。調査は工事の進捗状況に合わせて実施し、地区名は北から１～17区とした。調査区の内訳は立坑・人孔部分が３・４・７・11・14・17区、他の地区が管路部分となる。なお３～11区については夜間調査である。

調査は工事掘削深度である現地表(約T.P.＋8.6～8.7m)下1.5～3.1mまで機械・人力掘削併用で実施した。

なお管路部分の内、夜間調査となった５・６・８～10区の地層については、工事の進捗状況に合わせて任意の地点において断面図を作製した(小文字アルファベット地点)。

調査では、調査地内に所在する工事使用の仮ベンチマーク(KBM.5：T.P.＋8.644m)を標高の基準とした。また夜間調査範囲については設計図記載の地盤高値を使用した。



第２図　調査区位置図

２）基本層序

０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土である。１～３区ではT.P. +8.2m、他では概ねT.P. +7.8～7.9mで見られた。１～３区で見られた２層(T.P. +7.7～7.8m)、３層(T.P. +7.5～7.7m)は島畑作土～盛土である。４層(T.P. +7.7～7.8m)、５層(T.P. +7.5～7.7m)は撹拌された水田作土である。２～５層の時期は出土遺物等から中世～近世に比定される。6B層(T.P. +7.6m)は９区南部～10区北部で見られたシルト～極細粒砂基調の水成層である。15区東部～17区で見られた水成層もこれに相当すると考えられ、ここでは上位にシルト質粘土の6A層が見られる。７層(T.P. +7.4～7.6m)はほぼ全域で見られた土壌化層で、作土の可能性もある。古墳時代後期～奈良時代の遺物包含層となっており、該期の土器を少量含んでいる。２区では上面で溝(Ａ層)を検出した他、11区と15区西端部では下面で遺構埋土と考えられる層(Ｂ層)を断面で確認した。８層(T.P. +7.3～7.4m)は極細粒砂～中粒砂からなる水成層で、河川堆積である。11区、及び14区においてほぼ同レベルで見られたことから同一の地層とした。９層(T.P. +7.1～7.4m)はMn斑やFe斑を多く含む土壌化層で、北部では古墳時代中期～後期の土器を少量含んでいる。10・11層(T.P. +7.0～7.2m)は粘土～極細粒砂からなる一連の水成層で、10層は土壌化部分と捉えられる。12層(T.P. +6.0m)は３区でのみ確認した炭酸鉄を多く含む湿地性の水成層である。

３）検出遺構と出土遺物

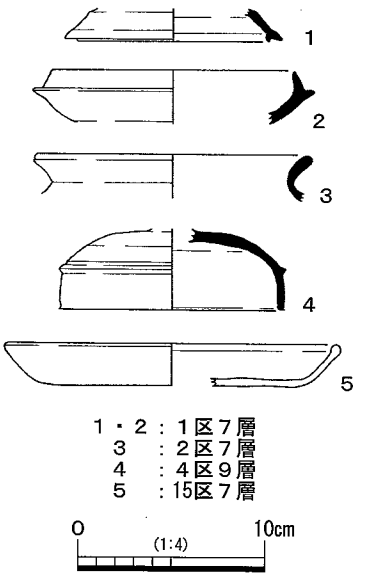
２区７層上面(T.P. +7.5m)で溝１条(ＳＤ１)を検出した。

ＳＤ１

北東－南西方向に直線的に延びる溝で、規模は検出長約1.6m・深さ約0.5mを測る。幅は検出部分で約0.6mを測るが、本来は約1.2mの規模が考えられる。断面逆凸形を呈し、埋土は単層である。遺物は出土していない。

地層内出土遺物

１～５を図化した。１・２は須恵器杯蓋・杯身である。１は飛鳥時代、２は古墳時代後期後半に比定される。１区７層出土。３は須恵器壺で古墳時代後期頃に比定される。２区７層出土。４は須恵器杯身である。天井部には灰が被り、中央にはつまみ基部の形跡が認められる。古墳時代中期末に比定される。４区９層出土。５は土師器皿である。口縁端部を巻き込むもので、奈良時代に比定される。15区７層出土。



第３図　出土遺物

３．まとめ

今回の調査では、古墳時代中期～奈良時代の遺物包含層、中世の遺構・遺物を検出した。出土遺物はコンテナ１箱である。

北東部で実施した第68・82次調査では、古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物群や道路状遺構等からなる居住域を検出しており、当地周辺を本拠地としていたとされる物部氏との関連も注目されている。今回の調査地においても、北部で該期の遺物包含層が見られた。しかし遺構は検出

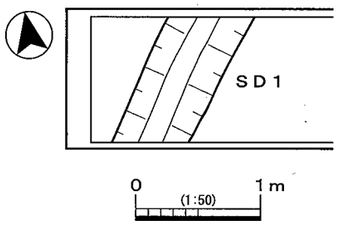
されず、遺物の包蔵も希薄であり、この居住域からは外れているものと考えられる。

南東部の15区では奈良時代の土器が出土した。東に約70mの地点で該期の遺構が確認されており、この集落域との関連が考えられる。

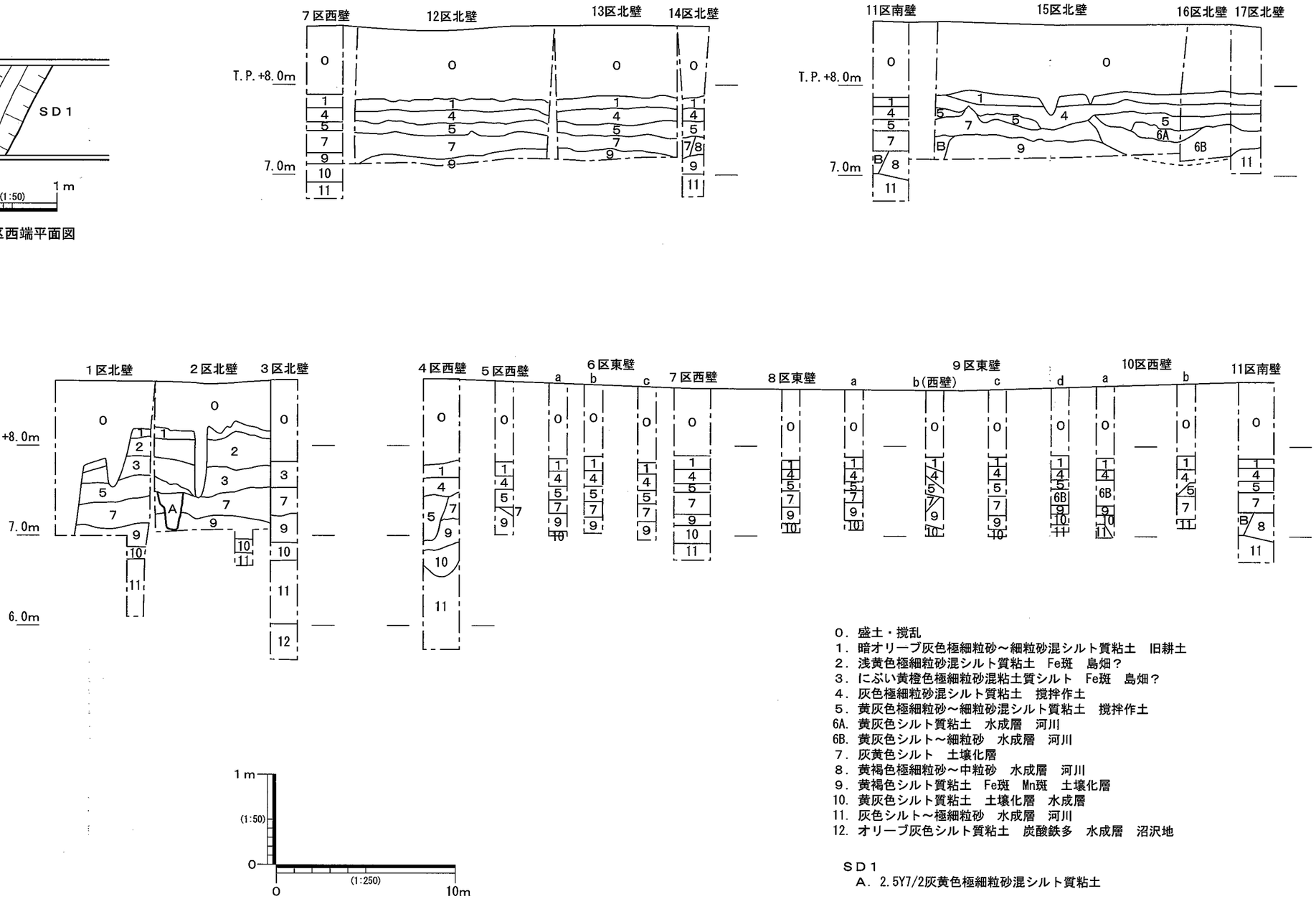
中世以降は生産域となっており、水田作土や島畑作土・盛土を確認した。

参考文献

・岡田清一・樋口　薫2002『久宝寺遺跡　－八尾市神武町93－1の道路築造工事に伴う久宝寺遺跡第26次発掘調査報告－　財団法人八尾市文化財調査研究会報告70』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2005「Ⅲ　久宝寺遺跡第49次調査（ＫＨ2003－49）」『久宝寺遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告83』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2005「Ⅵ　久宝寺遺跡第56次調査（ＫＨ2004－56）」『久宝寺遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告83』財団法人八尾市文化財調査研究会
・菊井佳弥2007「８．久宝寺遺跡第68次調査（ＫＨ2006－68）」『平成18年度　財団法人八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2013「14．久宝寺遺跡第82次調査（ＫＨ2012－82）」『平成24年度　公益財団法人八尾市文化財調査研究会事業報告』公益財団法人八尾市文化財調査研究会
・藤井淳弘1998「１．久宝寺遺跡（97－186）の調査－南久宝寺地区埋蔵文化財試掘調査概要報告－」『八尾市内遺跡平成９年度発掘調査報告書Ⅱ　八尾市文化財調査報告39　平成９年度公共事業』八尾市教育委員会



第５図　２区西端平面図



０．盛土・撹乱
１．暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　旧耕土
２．浅黄色極細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　島畑？
３．にぶい黄橙色極細粒砂混粘土質シルト　Fe斑　島畑？
４．灰色極細粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
５．黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
6A．黄灰色シルト質粘土　水成層　河川
6B．黄灰色シルト～細粒砂　水成層　河川
７．灰黄色シルト　土壌化層
８．黄褐色極細粒砂～中粒砂　水成層　河川
９．黄褐色シルト質粘土　Fe斑　Mn斑　土壌化層
10．黄灰色シルト質粘土　土壌化層　水成層
11．灰色シルト～極細粒砂　水成層　河川
12．オリーブ灰色シルト質粘土　炭酸鉄多　水成層　沼沢地

ＳＤ１
Ａ．2.5Y7/2灰黄色極細粒砂混シルト質粘土

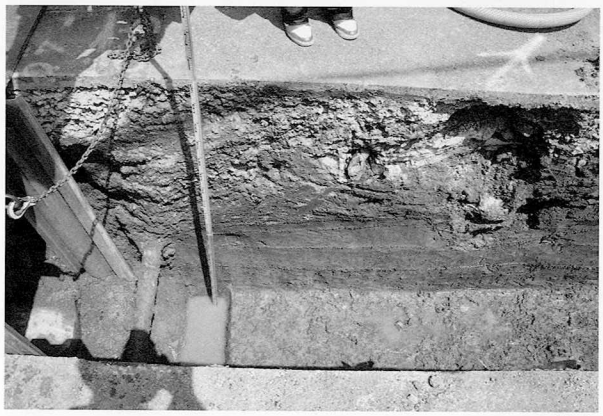
遺構埋土
Ｂ．灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　ブロック状

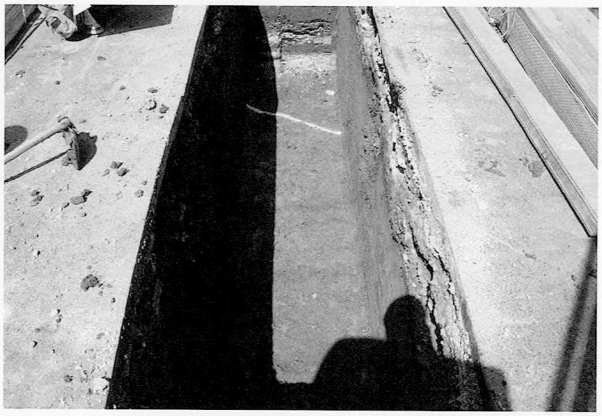
第４図　断面図

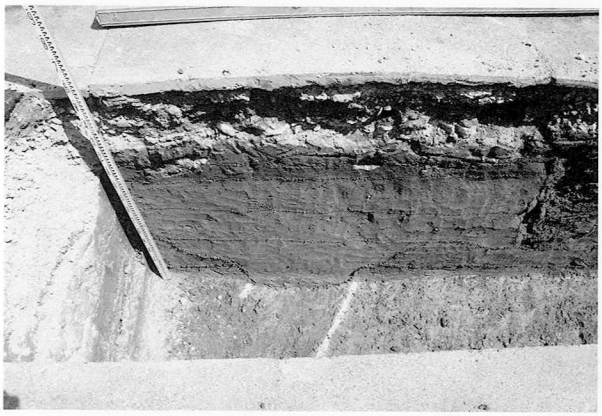
図版1

調査地（南から）

１区全景（南西から）


１区北壁


２区ＳＤ１（東から）


２区北壁

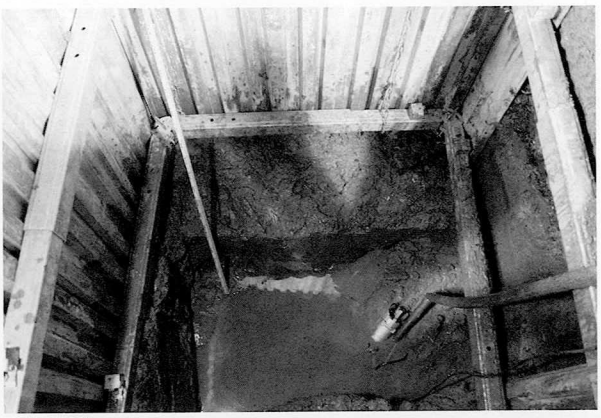
３区機械掘削（北西から）

３区北壁

３区北壁下部

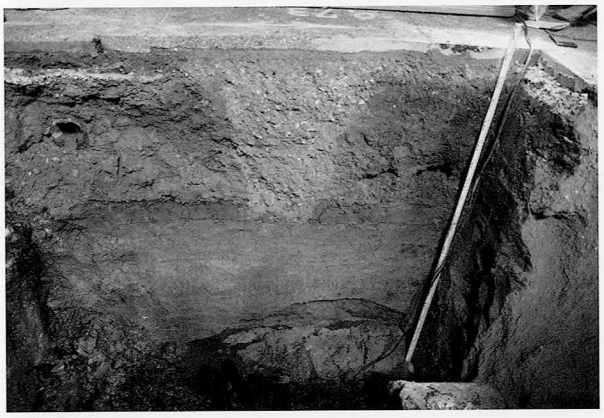
図版2

4区西壁

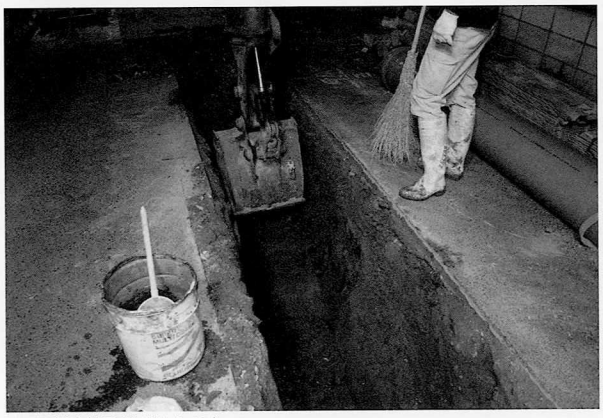

4区西壁下部

5区西壁

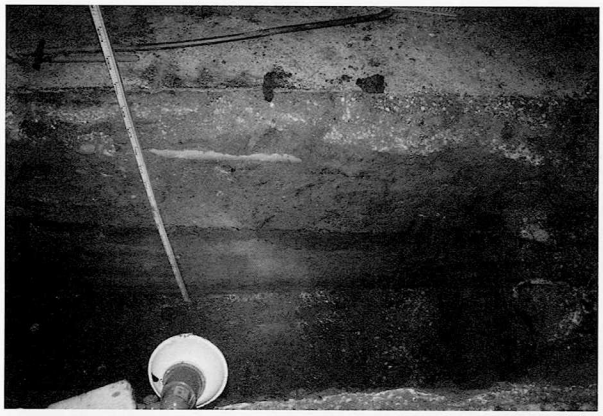
6区b東壁


7区西壁

8区東壁


9区機械掘削(北から)

9区a東壁



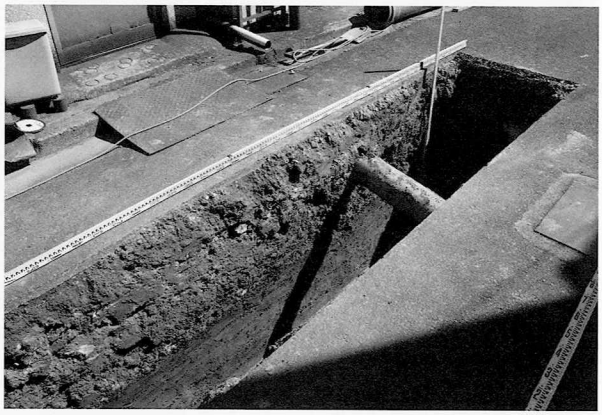
９区ｃ東壁

10区ａ西壁

11区南壁

12区機械掘削（東から）

12区北壁西半



12区北壁東半

13区調査状況（西から）

13区北壁

図版4

14区全景（東から）

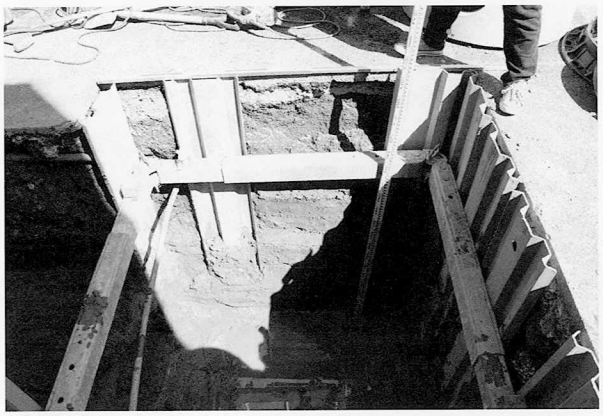
14区北壁

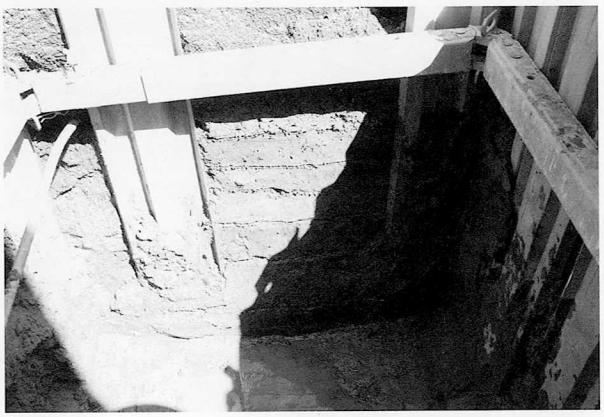
15区全景（東から）

15区北壁

16区全景（西から）

16区北壁


17区北壁


17区北壁

X　郡川遺跡第14次調査（ＫＲ2013－14）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市教興寺２丁目地内で実施した下水道工事(24－39工区)に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する郡川遺跡第14次調査(ＫＲ2013－14)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成25年５月16日～平成25年６月７日(外業実働３日)に、西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約12㎡である。
1．現地調査においては、伊藤静江・市森千恵子・梶本潤一・田島宣子の参加を得た。
1．内業整理業務は西村が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は西村が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……65
2．調査概要……67
　1）調査の方法と経過……67
　2）基本層序と出土遺物……67
3．まとめ……67

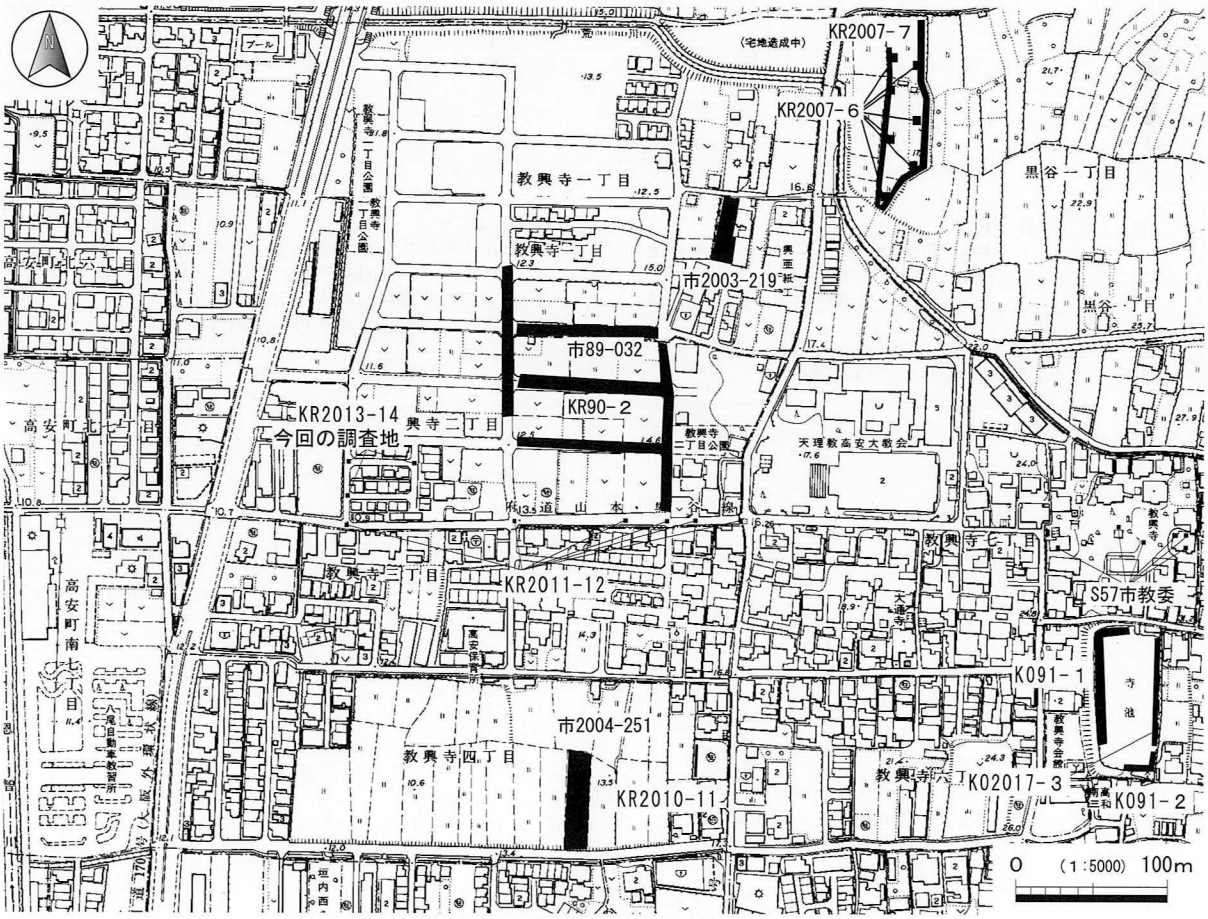
X　郡川遺跡第14次調査（ＫＲ2013－14）

１．はじめに

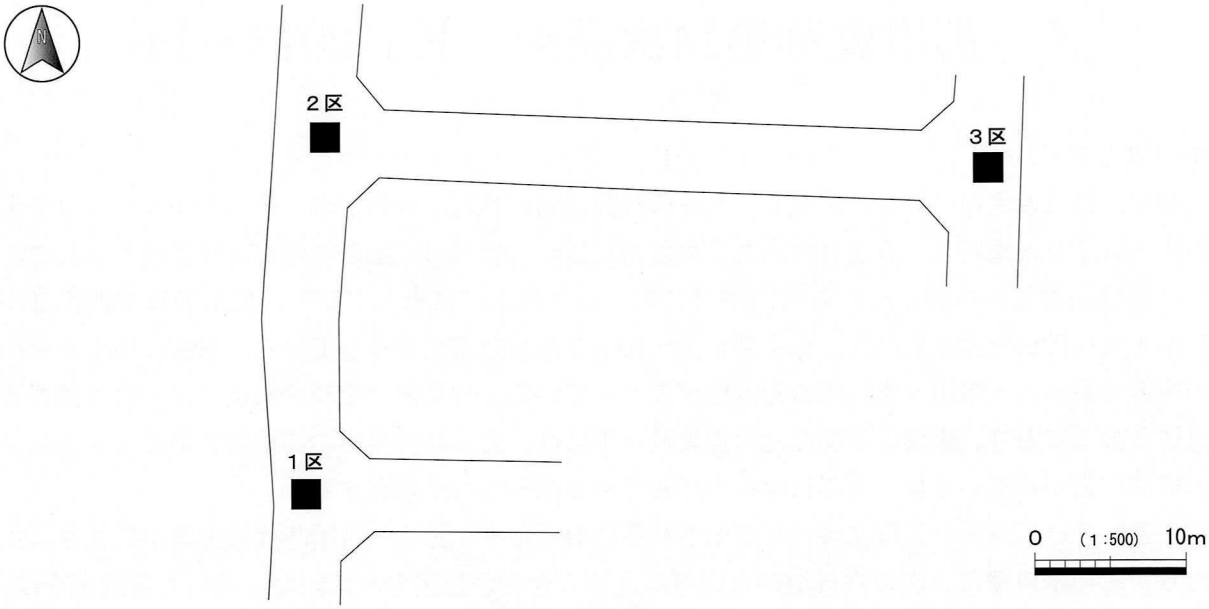
郡川遺跡は八尾市の東部に位置し、現在の行政区画の郡川１～５丁目・教興寺１～７丁目・黒谷１～５丁目・垣内１～５丁目にあたる東西約1.1km・南北約1.2kmの範囲が遺跡範囲とされている。生駒山西麓から西に広がる河内平野に続く扇状地上に立地しており、地形的には西半部がT.P.＋11～30mを測る緩斜面、東半部が30～70mを測る急斜面となっている。西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で水越遺跡、南側で恩智遺跡と接しており、東側の生駒山地西麓地域一帯には、古墳時代後期の群集墳を中心とする高安古墳群が広がっている他、東部には古代寺院である教興寺跡が存在する。

当遺跡では以前から、縄文時代後期とされる磨製石斧や、弥生・古墳時代の土器が採集されており、北の水越遺跡、南の恩智遺跡と同様の遺跡の存在が想定されていた。最初の発掘調査は、昭和63年に実施された八尾市教育委員会による遺構確認調査であり、古墳時代中期～後期の集落が確認された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる発掘調査が行われており、当遺跡は南方の生駒山地西麓に位置する恩智遺跡と同様、縄文時代には扇状地末端部に集落が形成され、以降連綿と続く集落遺跡であると認識されている。

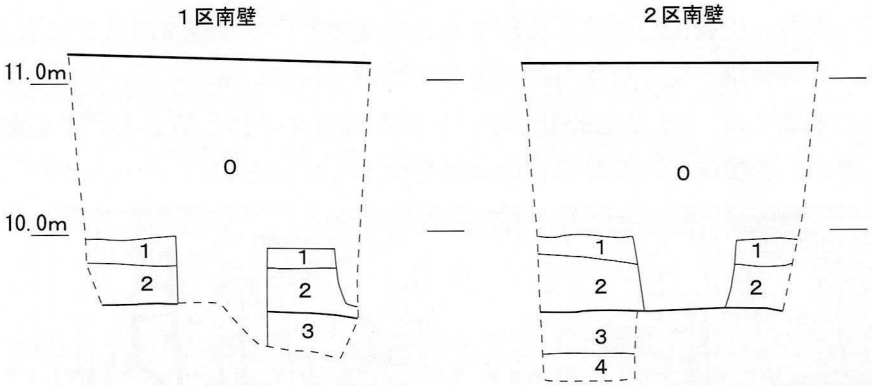
今回の調査地北東側では、平成２(1990)年度に区画整理事業に伴う第２次調査を実施しており、弥生時代前期～中期、古墳時代、室町時代の遺構を検出している。



第１図　調査地周辺図

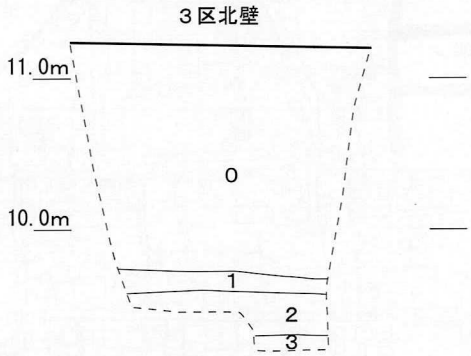


第２図　調査区位置図



0　盛土
1　N3/0暗灰色細粒砂混粘土　旧耕作土
2　5B4/1暗青灰色細粒砂～シルト　河川堆積層
3　5B6/1青灰色礫混細粒砂　河川堆積層

0　盛土
1　5B2/1青黒色細粒砂混粘土　旧耕作土
2　10Y3/1オリーブ黒灰色細粒砂混粘土　作土層
3　2.5Y5/6黄褐色シルト　河川堆積層
4　10YR4/6褐色礫混細粒砂　河川堆積層



0　盛土
1　10BG5/1青灰色細粒砂～シルト　河川堆積層
2　5Y4/1灰色細粒砂　河川堆積層
3　5B5/1青灰色シルト　河川堆積層

第３図　１～３区断面図　S＝１／50

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市教興寺２丁目地内で実施した下水道工事（24－39工区）に伴う調査で、当調査研究会が郡川遺跡内で行った第14次調査（ＫＲ2013－14）である。

調査地は道路上に設置される人孔部分３箇所（約2.0×2.0m：南西から１～３区）で、総面積は約12㎡を測る。

調査は現地表（T.P.＋11.1～11.2m）下2.0～2.1mについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では各調査区周辺に位置する工事使用のベンチマークを標高の基準とした。

２）基本層序と出土遺物

１区

№１人孔を現地表下約2.0mまで調査した。現地表面の標高はT.P.＋11.1mである。０層は盛土である。１層は旧耕作土である。２・３層は河川堆積層である。

２区

№２人孔を現地表下約2.1mまで調査した。現地表面の標高はT.P.＋11.1mである。０層は盛土である。１層は旧耕作土である。２層は近世頃の作土である。３層は湿地性堆積層で、４層は河川堆積土層である。

３区

№６人孔を現地表下約2.1mまで調査した。現地表面の標高はT.P.＋11.2mである。４層の堆積を確認した。０層は盛土である、１～３層は河川堆積土層である。

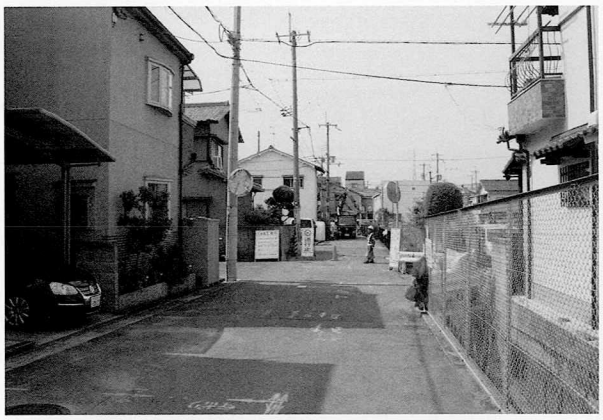
３．まとめ

今回の調査地では、近世頃と考えられる作土層を２区で確認した。それ以下では、河川堆積層が見られた。このような堆積状況は、第12次調査（ＫＲ2011－12）でも確認しており、当地一帯には東西方向の谷が存在していたと推測される。

参考文献

・原田昌則　1999「Ⅲ　郡川遺跡第２次調査（ＫＲ90－２）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』　財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　2013「ＸⅠ　郡川遺跡第12次調査（ＫＲ2011－12）」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告141』　公益財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

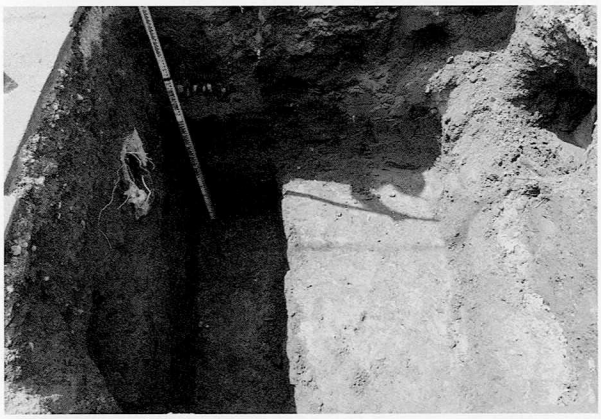


1・2区調査地周辺(北から)

3区調査地周辺(西から)

1区3層上面全景(北から)

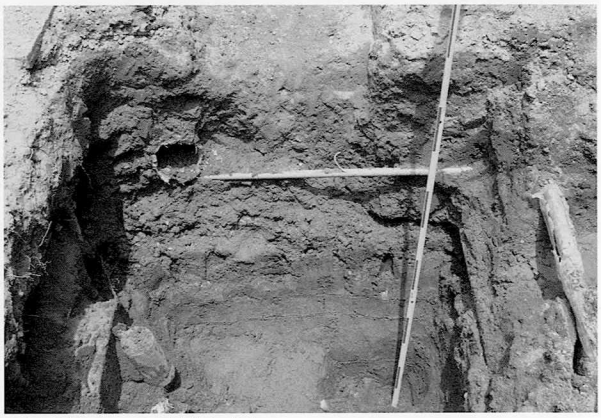
1区南壁0～3層(北から)



2区3層上面全景(北から)

2区南壁0～4層(北から)

3区2層上面全景(南から)



3区北壁0～3層(南から)

XI　成法寺遺跡第25次調査（ＳＨ2012－25）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市清水町１・２丁目地内で実施した下水処理水送水管布設工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する成法寺遺跡第25次調査（ＳＨ2012－25）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。なお調査は平成24・25年度にまたがったため、平成24年度をその１、平成25年度をその２として実施した。

1．現地調査は、平成25年３月13日～４月17日（外業実働８日）に、坪田真一・高萩千秋を調査担当者として実施した。調査面積は約11.25㎡である。

1．現地調査においては、飯塚直世・梶本潤二・芝﨑和美・竹田貴子・田島宣子・村田知子の参加を得た。

1．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……69

2．調査概要……71

　1）調査の方法と経過……71

　2）基本層序と出土遺物……71

3．まとめ……71

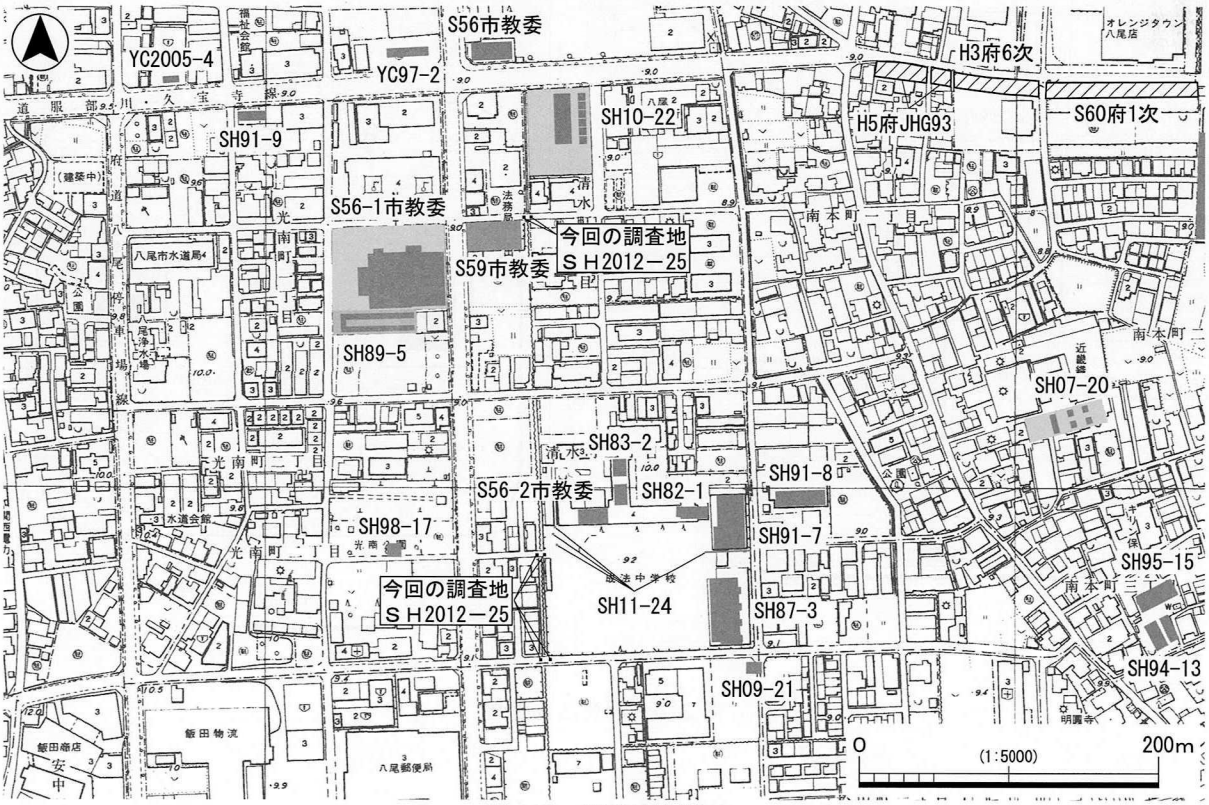
Ⅺ　成法寺遺跡第25次調査（ＳＨ2012－25）

１．はじめに

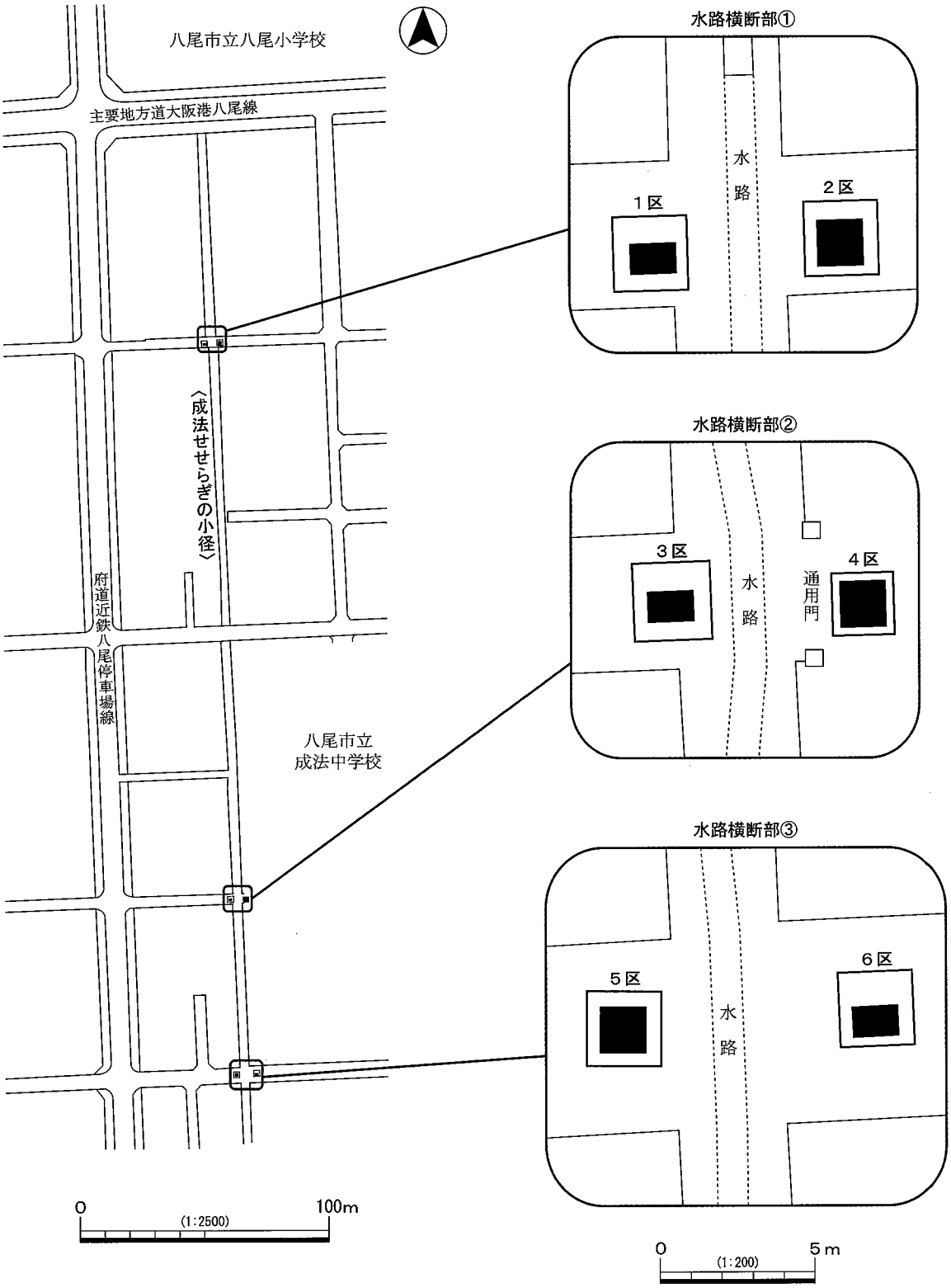
成法寺遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置し、現在の行政区画では光南町１・２丁目、清水町１・２丁目、南本町１～４丁目、高美町１・２丁目、松山町１丁目、明美町１丁目、陽光園１丁目がその範囲とされ、東西約1.1km・南北約0.6kmに広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地している。周辺では北側で東郷遺跡・八尾寺内町、東側で小阪合遺跡、南側で矢作遺跡・龍華寺跡に隣接し、西側には長瀬川が北流している。

当遺跡は昭和56年５月、八尾市教育委員会が光南町１丁目29番で実施した試掘調査により確認された遺跡で、以降大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる発掘調査が行われている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期からの遺跡であることが知られている。

今回の調査地周辺では、北部で市教委によるS56－1、S59、当研究会による第５・22次調査等が実施されており、S56－1、S59、第５次調査では、弥生時代後期・古墳時代後期の集落遺構、古墳時代前期～中期の墓域等が検出されている。また南部の市立成法中学校敷地内においては、校舎改築に伴う調査(S56－2)が市教委により実施され、古墳時代～中世の遺物包含層が確認された。その後当研究会が、校舎改築や体育館・プール築造等に伴う第１～３・７・24次調査を実施しており、古墳時代初頭～前期・後期、飛鳥～奈良時代の集落遺構、中世の生産関連遺構等を確認している。さらに東側の第８次調査では、奈良時代初頭の遺物が大量に投棄された溝を検出している。



第１図　調査地位置図


八尾市立八尾小学校
主要地方道大阪港八尾線
〈成法せせらぎの小径〉
府道近鉄八尾停車場線
八尾市立
成法中学校
0
100m
(1:2500)
水路横断部①
水
路
1区
2区
水路横断部②
3区
水
路
通
用
門
4区
水路横断部③
5区
水
路
6区
0
5m
(1:200)

第２図　調査区位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市清水町１・２丁目地内で実施した下水処理水送水管布設工事に伴う調査で、当調査研究会が成法寺遺跡内で行った第25次調査（ＳＨ2012－25）である。

工事は南北方向に延びる現況水路（「成法せせらぎの小径」）の下に下水処理水送水管を横断させるもので、調査対象は３地点で、水路を挟んで両側に設置される発進立坑（約1.5×1.5m）・到達立坑（約1.5×1.0m）部分である。調査区は計６箇所（北から１～６区）で、総面積は約11.25㎡を測る。なお平成24年度にその１として３・４区、平成25年度にその２として１・２・５・６区の調査を実施した。

調査は現地表（T.P. +9.3～9.4m）下2.7～3.5mについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では各地点に所在する工事使用のベンチマークを標高の基準とした。

２）基本層序と出土遺物

１・２区

０層は盛土・撹乱。１～６層は作土で、１層はブロック状、２～６層は撹拌が著しい。７層は水成層で、河川堆積と考えられる。８層は暗色を呈し土壌化している可能性がある。９層は湿地性の水成層である。

遺物は１区５・６層から時期不明の土師器片が少量出土した。２区では２層から近世磁器片、５層から時期不明の土師器片、８層から古墳時代初頭～前期頃の古式土師器片が少量出土した。

３・４区

０層は盛土・撹乱。１層は整地層である。２層は３区で見られた水成層である。近世の水路の存在が考えられる。３層は４区で見られた旧耕土である。４～７層は撹拌された作土である。８層は水成層で、河川堆積と考えられる。９～12層は湿地性の水成層である。

遺物は４区５層から中世の土師器、瓦器片、６層から中世の瓦器片、７層から時期不明の土師器片が出土した。

５・６区

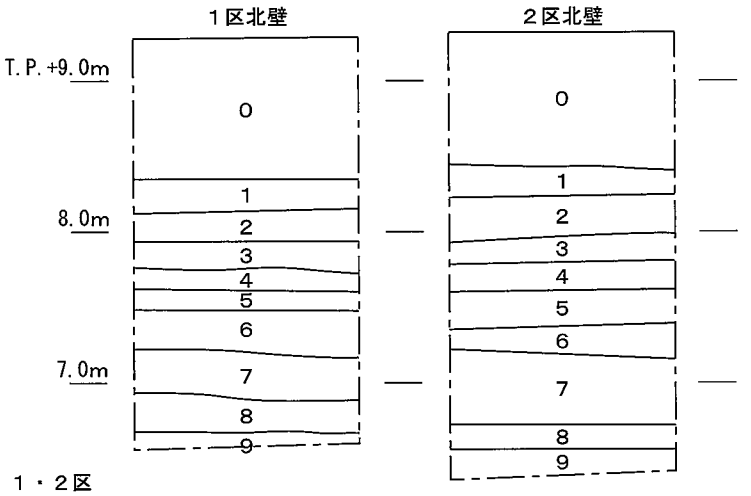
０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土である。２層は撹拌された作土である。３層は５区で見られた水成層である。４・５層は撹拌された作土である。６・７層は静水性の水成層である。８層は水成層で、河川堆積と考えられる。９～12層は湿地性の水成層である。掘削床面から湧水が認められ、直下に砂層の存在が看取される。

遺物は５区３層から中世頃の瓦器片が出土したのみである。

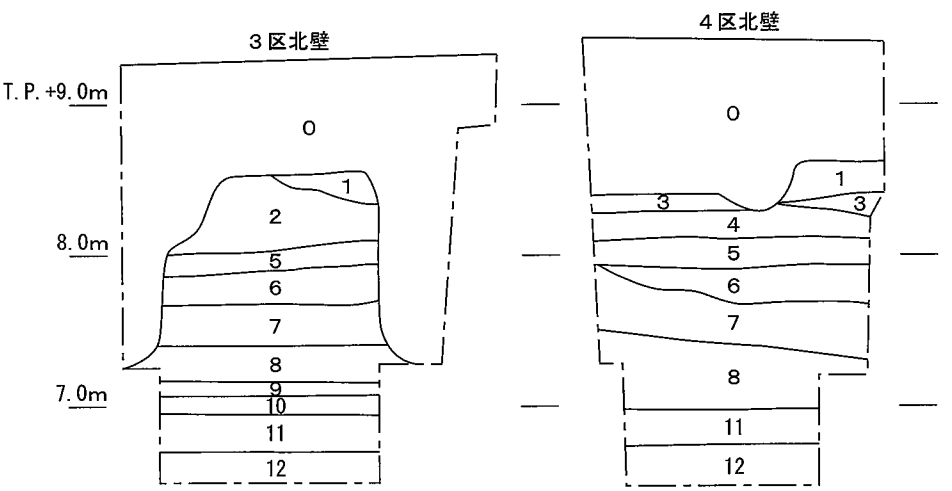
３．まとめ

今回の調査では遺構は検出されず、また出土遺物は作土からのものが多くを占め、積極的に居住域を示すような遺物包含層は確認できなかった。

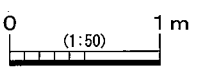
北部１・２区の南西側に近接するS59市教委調査では、北西－南東方向に延びる古墳時代初頭の溝が検出されており、この溝より南西側のS56－1市教委、第５次調査で確認されている墓域との有機的な関連が考えられている。１・２区で確認した８層が該期の遺構面に相当すると考えら



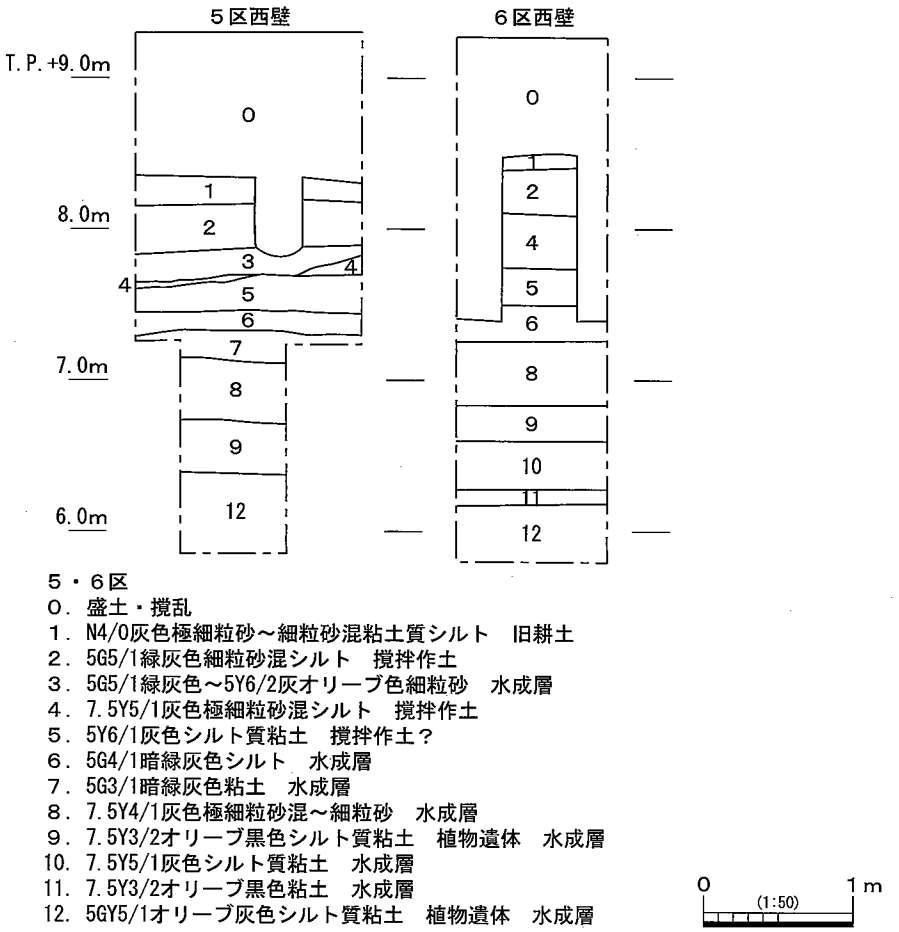
1・2区
0．盛土・撹乱
1．10YR7/3にぶい黄橙色極細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　ブロック状作土
2．10Y5/1灰色極細粒砂～中粒砂多混シルト　Fe斑　撹拌作土
3．7.5GY6/1緑灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　撹拌作土
4．5Y6/2灰オリーブ色シルト質粘土～極細粒砂　撹拌作土
5．2.5Y6/2灰黄色極細粒砂混粘土　Fe斑　撹拌作土
6．5Y6/2灰オリーブ色シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
7．10YR6/3にぶい黄橙色粘土質シルト～中粒砂互層　水成層
8．5GY3/1暗オリーブ灰色粘土　土壌化層？
9．5GY6/1オリーブ灰色細粒砂混シルト　水成層



0．盛土・撹乱
1．10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂混シルト質粘土　整地層
2．5Y6/1灰色シルト～極細粒砂互層　水成層
3．N4/0灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　撹拌作土(旧耕土)
4．7.5GY5/1緑灰色極細粒砂～細粒砂混シルト　撹拌作土
5．5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混シルト　撹拌作土
6．5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト　撹拌作土
7．7.5Y5/1灰色極細粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
8．7.5Y5/1灰色粘土～中粒砂互層　水成層(河川堆積)
9．5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土　水成層
10．5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂混粘土　水成層
11．7.5Y3/1オリーブ黒色粘土　水成層
12．5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　水成層



第3図　断面図



第３図　断面図

れるが、この溝を挟んで墓域の対岸に位置していることから、集落域の外側に当たる可能性がある。

南部の３～６区についてはT.P.＋7.4m前後以下は河川堆積・湿地性堆積からなる水成層で、その上位は作土層が続く状況であり、北東部の調査地で確認されている古墳時代～古代の遺構面は削平されているか、あるいは当地に及んでいないと考えられる。東部の第21次調査地においては古墳時代後期頃以前に埋没する自然河川が確認されているが、この河川の影響下にあった可能性も考えられる。

参考文献

・高萩千秋・他1983『成法寺遺跡－八尾市光南町１丁目29番地の調査－』八尾市教育委員会
・米田敏幸1985「５．成法寺遺跡の調査〈清水町１丁目33〉」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告11　昭和59年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・高萩千秋1991「第２章　第１次調査（ＳＨ82－１）発掘調査報告」『成法寺遺跡〈第１次調査～第４次調査・第６次調査報告書〉財団法人八尾市文化財調査研究会報告33』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋1991「第３章　第２次調査（ＳＨ83－２）発掘調査報告」『成法寺遺跡〈第１次調査～第４次調査・第６次調査報告書〉財団法人八尾市文化財調査研究会報告33』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋1991「第４章　第３次調査（ＳＨ87－３）発掘調査報告」『成法寺遺跡〈第１次調査～第４次調査・第６次調査報告書〉財団法人八尾市文化財調査研究会報告33』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一1992「Ｉ　成法寺遺跡（ＳＨ89－５）」『平成４年度　八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅱ）　財団法人八尾市文化財調査研究会報告35』財団法人八尾市文化財調査研究会

・坪田真一1996「Ⅰ　成法寺遺跡第７次調査（ＳＨ91－７）」『成法寺遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告51』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一1996「Ⅱ　成法寺遺跡第８次調査（ＳＨ91－８）」『成法寺遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告51』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋2011「Ⅳ　成法寺遺跡第22次調査（ＳＨ2010－22）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告135』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2012「Ⅳ　成法寺遺跡第24次調査（ＳＨ2011－24）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告138』財団法人八尾市文化財調査研究会
・成海佳子2011「Ⅶ　成法寺遺跡第21次調査（ＳＨ2009－21）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告132』財団法人八尾市文化財調査研究会

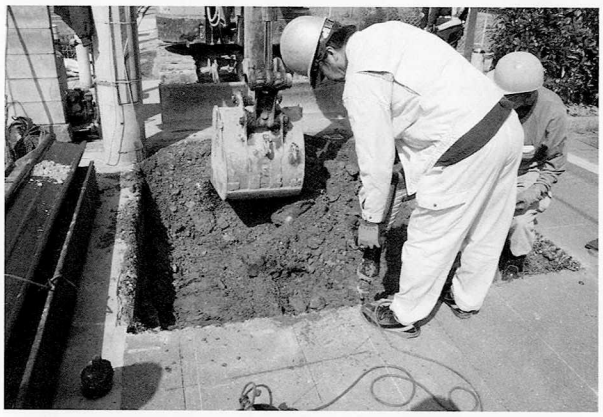
図版1

１・２区調査地（東から）

１区北壁

１区下層機械掘削（東から）

１区北壁下部



２区機械掘削（東から）

２区北壁

２区全景（東から）

２区北壁下部

図版2

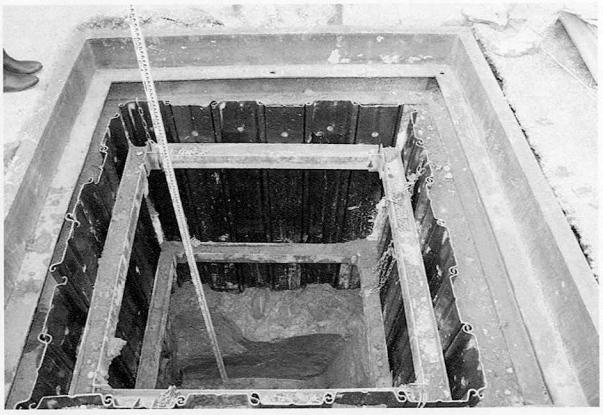
3区調査地（東から）

3区全景（東から）

3区北壁

3区北壁下部

4区調査地（北から）



4区全景（南から）

4区北壁

4区北壁下部

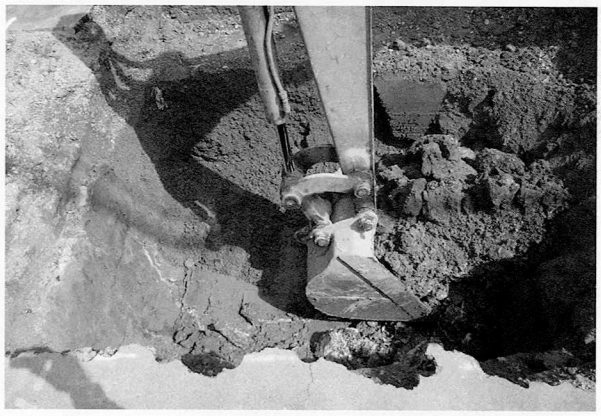
５区西壁

５区西壁下部

５区全景（北から）

５区掘削状況（北から）

６区調査地（西から）



６区機械掘削（南から）

６区西壁

６区全景（西から）

XII　神宮寺遺跡第２次調査（ＺＧ2013－２）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市神宮寺３丁目地内で実施した下水道工事(25－37工区)に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する神宮寺遺跡第２次調査(ＺＧ2013－２)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成25年10月29日～10月30日(外業実働２日)に、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約８㎡である。
1．現地調査においては梶本潤二・田島宣子の参加を得た。
1．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

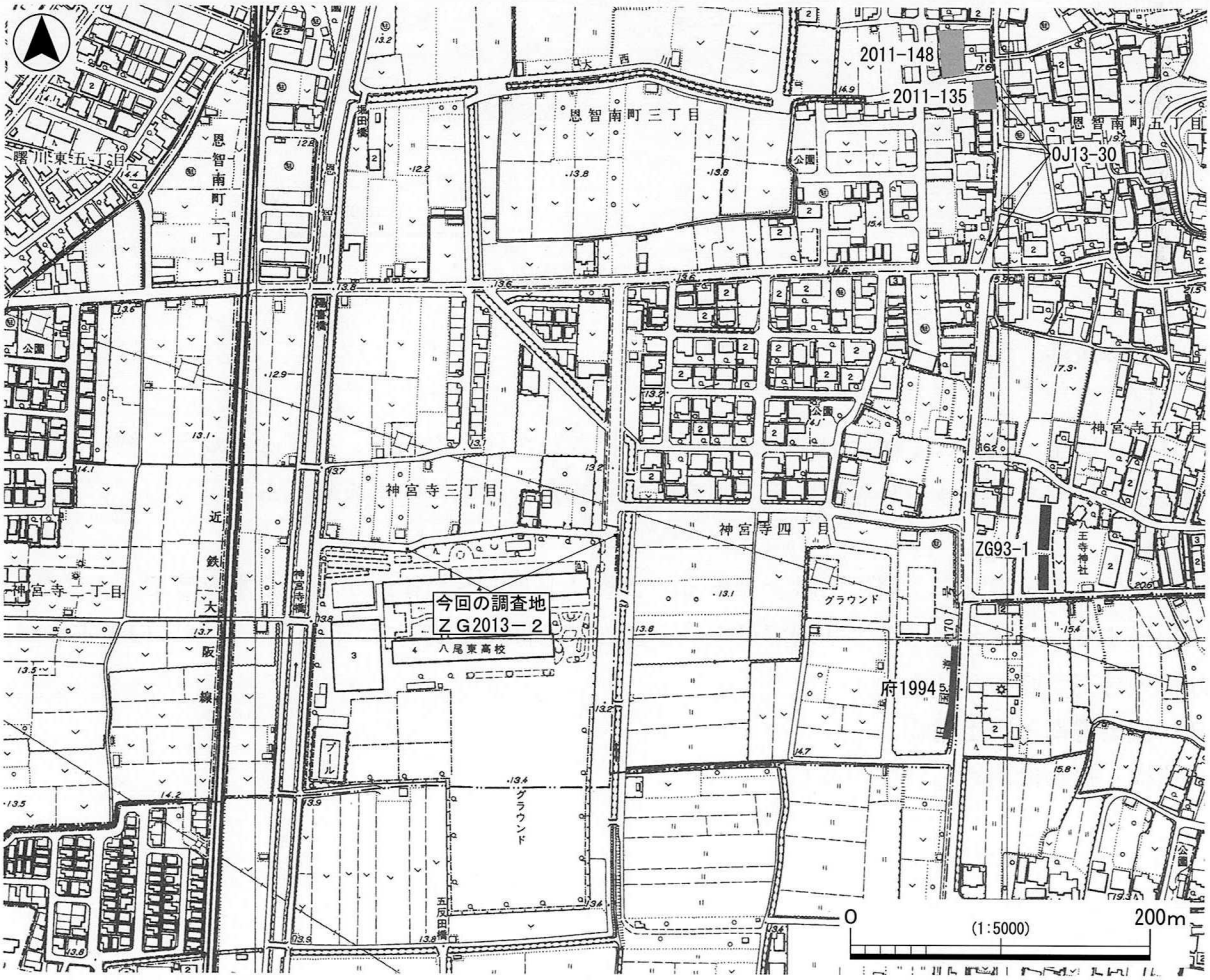
1．はじめに……79
2．調査概要……80
　1）調査の方法と経過……80
　2）基本層序……80
　3）検出遺構と出土遺物……80
3．まとめ……81

Ⅻ　神宮寺遺跡第２次調査（ＺＧ2013－２）

１．はじめに

神宮寺遺跡は、八尾市南東部に位置する弥生時代～中世の複合遺跡である。現在の行政区画では神宮寺３～５丁目にあたり、東西約0.7km、南北約0.3kmがその範囲とされている。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では北側に恩智遺跡、東側に高安古墳群が位置する他、南側の柏原市域においては弥生時代以降の集落遺跡である山ノ井遺跡や奈良時代の大県郡条里遺構が隣接し、西側には玉串川の氾濫原が広がっている。また遺跡範囲の中央付近を東高野街道が縦断している。

今回の調査地の東約300mで実施した第１次調査(ZG93－1)では、弥生時代中期～室町時代の遺構・遺物が多く検出されており、弥生時代中期の土器棺墓からなる墓域の確認や、室町時代の石組井戸は特筆される。またその南西部の府教委1994では、弥生時代後期、古墳時代中期、奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されている。両調査地は東高野街道沿いに位置しており、この付近では遺構確認調査等においても弥生時代～古墳時代の遺構・遺物が確認されているが、遺跡西方では河川堆積等を検出するにとどまっており、遺跡の実態は不明な点が多い。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市神宮寺３丁目地内で実施された下水道工事(25－37工区)に伴う調査で、当調査研究会が神宮寺遺跡内で行った第２次調査(ＺＧ2013－２)である。

調査地は、大阪府立八尾翠翔高等学校北側の東西道路上に位置する人孔部分２箇所(西から１・２区)で、調査面積は約８㎡である。

調査は工事掘削深度である現地表(約T.P.＋13.2m)下2.6～3.1mまで機械・人力掘削併用で実施した。調査では、調査地に点在する工事使用の仮ベンチマークを標高の基準とした。

第２図　調査区位置図

2）基本層序

１区

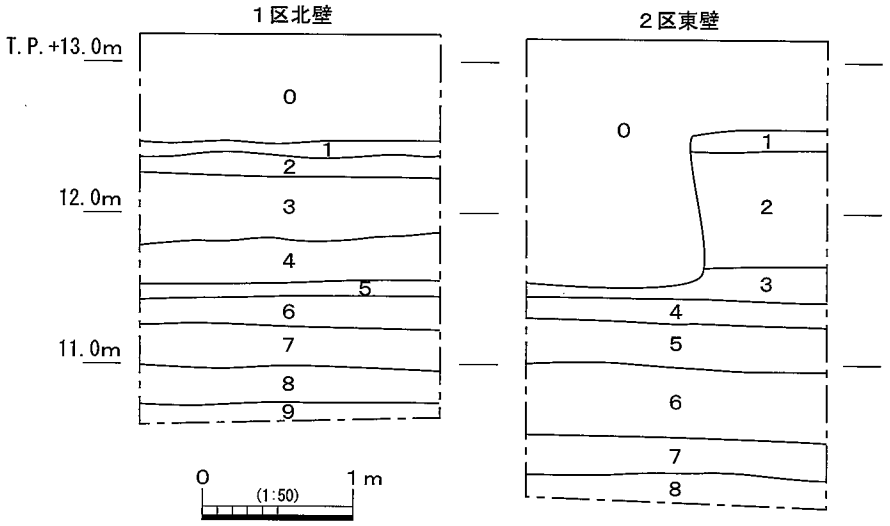
０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土、２層も撹拌された作土である。３層はシルト～細粒砂からなる水成層である。４～９層は粘土基調で炭酸鉄を含む湿地性の水成層である。

２区

０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土である。２層はシルト～細粒砂からなる水成層で、１区３層に相当する。３～８層は粘土基調で炭酸鉄を含む湿地性の水成層で、１区４～９層に相当するが、砂粒の含有が認められる。

3）検出遺構と出土遺物

遺構・遺物は認められなかった。



１区
０．盛土・撹乱
１．7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト　旧耕土
２．7.5GY6/1緑灰色シルト質粘土混極細粒砂～細粒砂　ブロック状作土
３．2.5GY6/1オリーブ灰色シルト～細粒砂互層　水成層
４．5GY5/1オリーブ灰色粘土　炭酸鉄　水成層
５．5GY6/1オリーブ灰色シルト　水成層
６．5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　植物遺体　炭酸鉄少　水成層
７．5GY3/1暗オリーブ灰色粘土　炭酸鉄少　水成層
８．2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　炭酸鉄多　水成層
９．7.5GY3/1暗緑灰色粘土　炭酸鉄少　水成層

２区
０．盛土・撹乱
１．7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト　旧耕土
２．2.5GY6/1オリーブ灰色シルト～極細粒砂互層　水成層
３．10YR5/4にぶい黄褐色シルト質粘土　植物遺体　水成層
４．7.5Y5/1灰色極細粒砂～細粒砂混粘土　植物遺体　水成層
５．5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂多混粘土　植物遺体　炭酸鉄　水成層
６．2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂少混粘土　水成層
７．7.5GY3/1暗緑灰色粘土　水成層
８．7.5GY6/1緑灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　水成層

第３図　断面図

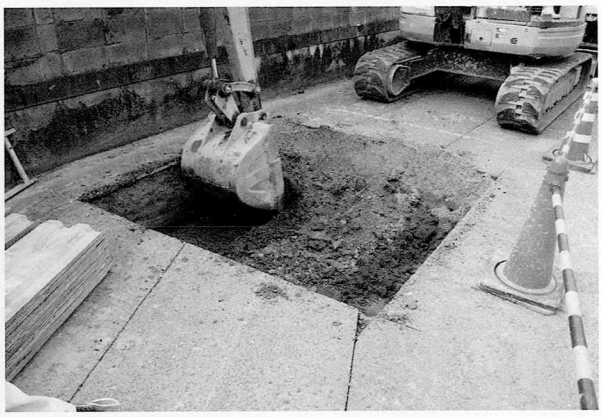
３．まとめ

調査地の地層は水成層の堆積が連綿と続くことが確認され、遺構・遺物ともに見られず、生活の痕跡は認められなかった。東に約250mで確認されている弥生時代～古墳時代の集落域は当地までは及んでいないと考えられる。

参考文献
・岡田清一1997「Ⅲ　神宮寺遺跡第１次調査（ＺＧ93－１）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会
・山上　弘1994『神宮寺跡発掘調査概要－八尾市神宮寺４丁目所在－』大阪府教育委員会

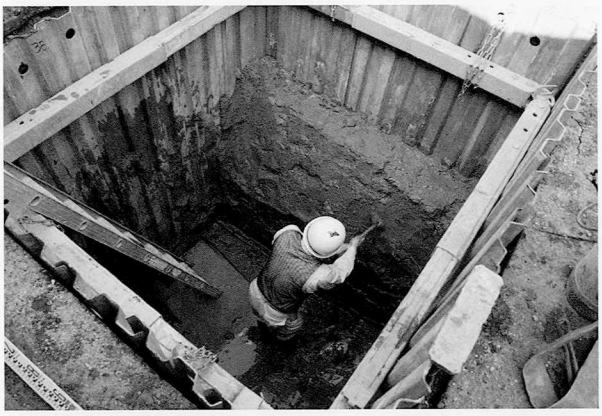
図版1

1区調査地（西から）


1区機械掘削（北東から）

1区北壁上部

1区北壁下部


1区調査状況（南東から）

2区調査地（北東から）

2区東壁上部

2区東壁下部

XIII　東弓削遺跡第19次調査（ＨＹ2012－19）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市東弓削２丁目、八尾木東３丁目地内で実施した下水道工事(24－37工区)に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する東弓削遺跡第19次調査(ＨＹ2012－19)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。なお調査は平成24・25年度にまたがったため、平成24年度をその１、平成25年度をその２として実施した。

1．現地調査は、平成25年３月26日～６月10日(外業実働７日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約28㎡である。

1．現地調査においては、飯塚直世・伊藤静江・小野聡美・梶本潤二・芝﨑和美・竹田貴子・村井俊子の参加を得た。

1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。

遺物復元－梶本・竹田・田島宣子

遺物実測－飯塚・市森千恵子・伊藤・國津れいこ・芝﨑・村井・村田知子

遺物トレース－市森

その他－坪田

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……83

2．調査概要……84

1）調査の方法と経過……84

2）基本層序と出土遺物……84

3）検出遺構と出土遺物……89

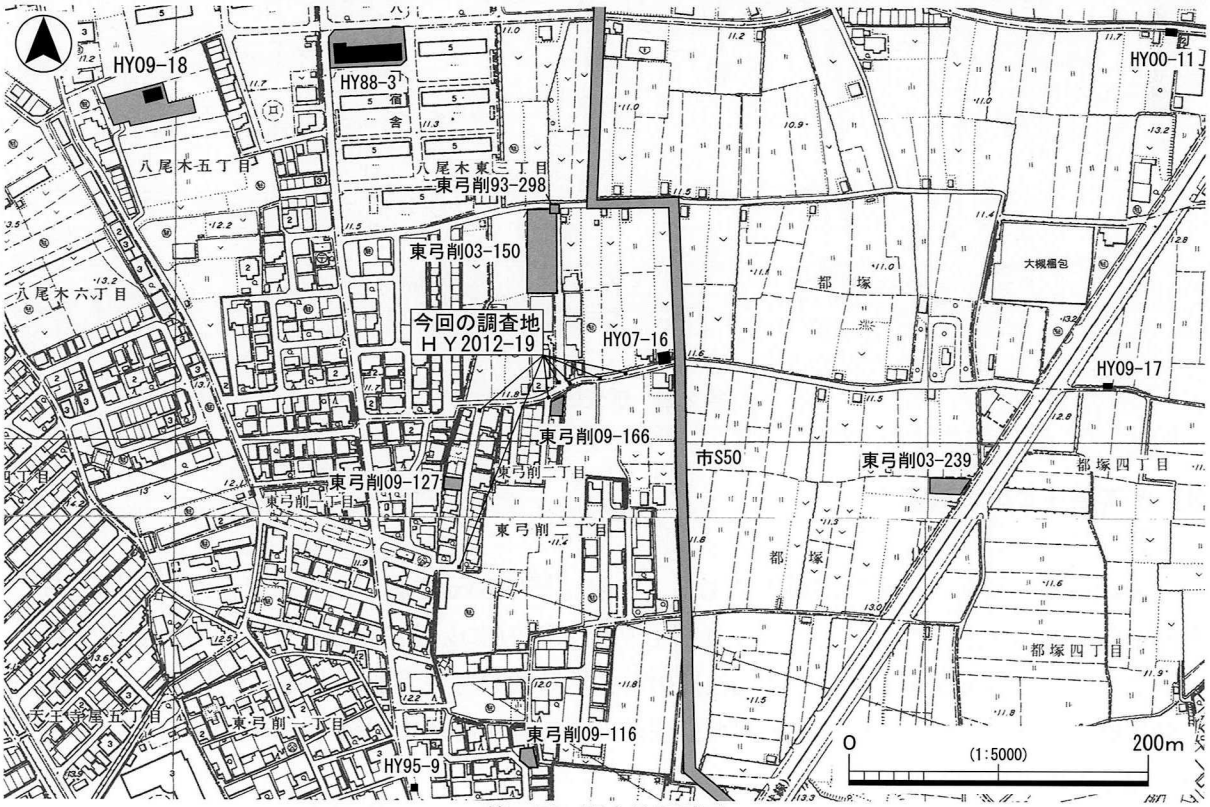
3．まとめ……89

XIII　東弓削遺跡第19次調査（ＨＹ2012－19）

１．はじめに

東弓削遺跡は八尾市南東部に位置し、現在の行政区画では八尾木、八尾木１～５丁目、八尾木東１～３丁目、東弓削、東弓削２・３丁目、都塚、都塚１～４丁目、刑部にあたる、東西約1.3km、南北約1.2kmがその範囲とされている。当遺跡は、河内平野を北～北西へ流下していた旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川が分岐する「二俣」地区北側の沖積地上に立地しており、この沖積地上には隣接する中田遺跡をはじめ、矢作・小阪合・成法寺遺跡など多くの遺跡が連なって展開している。この他、東側では玉串川を挟んで対岸に恩智遺跡・神宮寺遺跡、長瀬川を挟んで南側では弓削遺跡、西側では志紀遺跡・田井中遺跡・老原遺跡が位置している。また、当遺跡一帯は『続日本紀』にある「由義宮」・「西京」の推定地にあたり、遺跡南部にはその中核をなした弓削寺跡が存在したとされる。

当遺跡は、昭和42(1967)年実施の国道170号(大阪外環状線)敷設工事の際、緑釉陶器等の土器類と瓦類が多量に出土したことから認識された。発掘調査としては昭和50(1975)年に、今回の調査地東側に位置する道路部分において、送水管布設工事に伴う南北１kmに及ぶ調査(市S50)が市教委により実施された。調査では弥生時代中期～中世に亘る遺構・遺物が確認され、古墳の存在を想定させる形象・円筒埴輪の出土や、「由義宮」・「西京」等に関連する可能性がある瓦や礫敷の検出は特筆される。その後も下水道工事に伴う調査や遺構確認調査といった小規模な調査が継続的に実施されており、当遺跡は弥生時代中期～中世の複合遺跡であることが確認されている。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

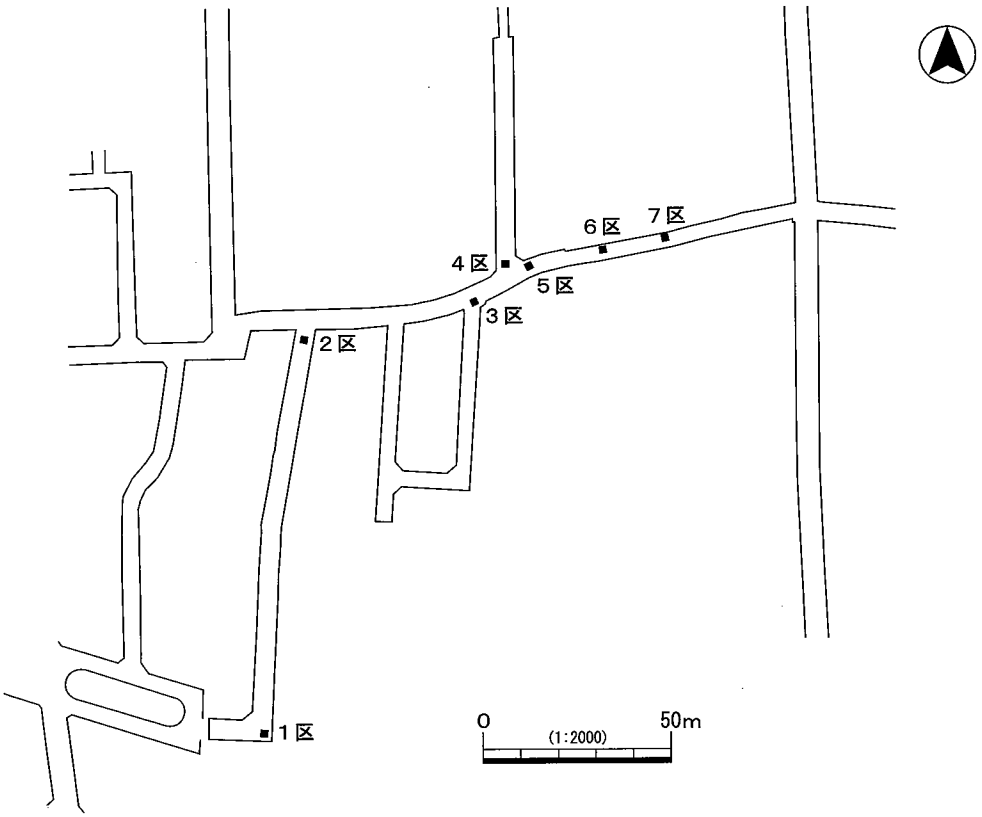
1）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市東弓削２丁目、八尾木東３丁目地内で実施した下水道工事(24－37工区)に伴う調査で、当調査研究会が東弓削遺跡内で行った第19次調査(ＨＹ2012－19)である。

調査地は人孔部分(規模約2.0×2.0m)７箇所で、総面積約28㎡を測る。地区名は南西から１～７区とした。調査はその１(平成24年度)として３区、その２(平成25年度)としてそれ以外の地区について実施した。

調査は現地表(T.P. ＋12.6m前後)下約2.4～3.4mまでについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では各調査区付近に点在する工事使用の仮ＢＭを標高の基準とした。



第２図　調査区位置図

2）基本層序と出土遺物

１区

０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土である。２層は層厚80cmを測る水成層で、河川堆積である。中世頃の土師器が出土している。３・４層も粘土基調の水成層である。５・６層は土壌化層で、６層はブロック状を呈する。弥生時代後期頃～古墳時代の弥生土器、土師器が出土した。７層も土壌化層で、堆積状況から遺構埋土の可能性がある。弥生時代中期後半頃の土器が出土した。８層は湿地性の水成層である。

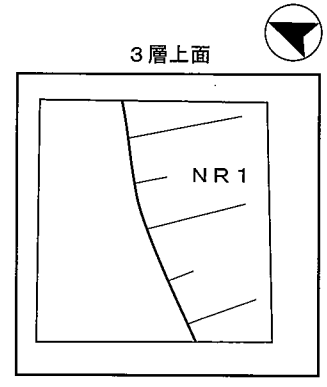
遺物は５層出土の弥生土器(１～３)を図化した。１は口縁端部を垂下させる広口壺で、頸部外

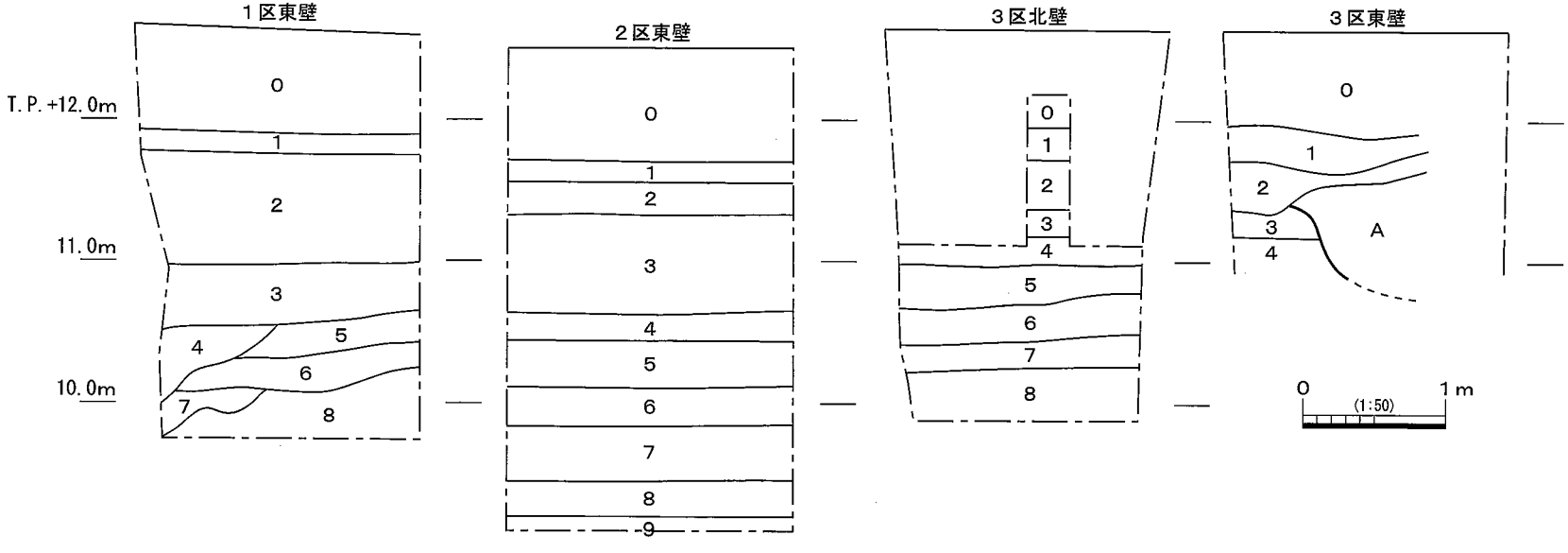
１区
０．盛土・撹乱
１．2.5Y4/1黄灰色細粒砂混シルト　旧耕土
２．2.5Y7/3浅黄色極細粒砂～細礫　水成層(河川堆積)
３．5BG5/1青灰色細粒砂混粘土　水成層
４．5Y5/1灰色シルト質粘土～シルト互層　水成層
５．10Y5/1灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　土壌化層
６．5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂混シルト質粘土　ブロック状　土壌化層
７．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混シルト質粘土　土壌化層(遺構埋土？)
８．7.5Y6/2灰オリーブ色シルト　水成層

２区
０．盛土・撹乱
１．2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混シルト　旧耕土
２．2.5Y6/3にぶい黄色シルト混細粒砂～極粗粒砂　撹拌作土
３．2.5Y6/2灰黄色粘土～細礫互層　水成層(河川堆積)
４．5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂混粘土　水成層？作土？
５．2.5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂混シルト質粘土　水成層？作土？
６．2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土　水成層
７．5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土　水成層
８．7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土　炭多　暗色土壌化層
９．7.5GY6/1緑灰色シルト～極細粒砂　水成層

３区
０．盛土・撹乱
１．2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト～極粗粒砂　旧耕土
２．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～細粒砂　撹拌作土
３．2.5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂少混粘土　Fe斑　撹拌作土
４．7.5Y5/1灰色極細粒砂混粘土
５．5Y5/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　上部Fe斑
６．2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混粘土
７．5Y4/1灰色極細粒砂混シルト質粘土
８．7.5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂混粘土

ＮＲ１
Ａ．2.5GY6/1オリーブ灰色極細粒砂～粗粒砂





第３図　１～３区平断面図

面調整はタテハケ後縦位のヘラミガキである。２は高杯脚裾部で、円孔を施し、外面調整は縦位のヘラミガキである。３は小型の甕底部である。１は畿内第Ⅳ様式、２・３は第Ⅴ様式に比定され、１は７層に帰属すると考えられる。

２区

０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土である。２層は撹拌された作土で、時期は近世であろう。３層は層厚70cmを測る水成層で、河川堆積である。４・５層は湿地性の水成層、あるいは作土である。４層からは中世頃の土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土した。６・７層は湿地性の水成層と考えられる。４～７層の層界は不明瞭である。８層は暗色を呈し、炭を多く含む土壌化層で、弥生時代前期～中期前半の遺物包含層である。９層は水成層である。

遺物は４層出土の４～６、８層出土の７～10を図化した。４は小形の土師器甕である。内外面共にやや煤ける。５は内黒の黒色土器椀で、外面は口縁端部のみ黒色を呈する。６は瓦器椀で、ヘラミガキは内面が比較的密で、外面は疎らである。４・５は平安時代前期、６は12世紀末頃に比定される。７～10は弥生土器甕である。７・８は口縁部～体部で、体部調整は７が外面ヘラミガキ、内面ハケ後ヘラミガキ(ナデ)、８は外面ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキである。９・10は底部で、９は外面ヘラミガキを施す。７～10は弥生時代前期～中期(畿内第Ⅰ様式～第Ⅱ様式)に比定されよう。

３区

０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土である。２・３層は撹拌された作土で、３層から中世の土師器、瓦器が出土した。第３層上面(T.P.＋11.4m)で自然河川(ＮＲ１)を検出した。４～７層は土壌化層で、出土遺物から概ね４・５層が古代～中世、６層が古墳時代後期、７層が弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層と捉えられる。４～７層の層界は不明瞭である。８層は湿地性の水成層である。

遺物は４層出土の11・12、５層出土の13・14、６層出土の15・16を図化した。11・12は「て」の字状口縁の土師器皿で、11が褐色系、12が乳白色系である。13は土師器大皿で、口径約14.0cmを測る。14は小形の土師器壺である。口縁部のヨコナデにより、肩部との境には明瞭な稜が生じている。11～14は11世紀代に比定されよう。15は須恵器細頸壺で、口頸部を除いて完存する。肩部～体部間に凹線を巡らせ、肩部外面には全体に灰が被る。古墳時代後期に比定される。16は砂岩製の叩き石で、上部は欠損する。形状は角の丸い四角柱を成し、先端は使用により潰れている。

４区

０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土である。２～４層は撹拌された作土である。５層は河川堆積で、ＮＲ１に相当する。６～８層は土壌化層で、出土遺物から概ね６層が古代～中世、７・８層が弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層である。９・10層は湿地性の水成層で、上部はやや撹拌され土壌化している。

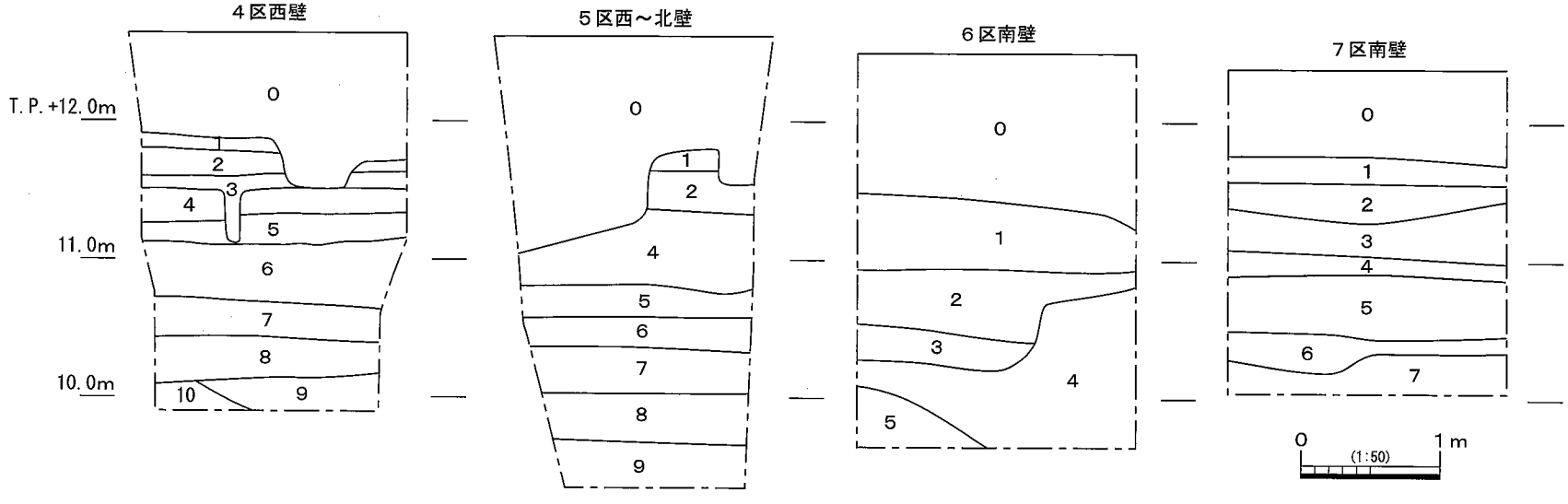
遺物は６層出土の17～23、７・８層出土の24を図化した。17は土師器皿である。18・19は瓦器皿である。共に内面にヘラミガキを施すもので、見込みの暗文は18が格子状で、19は平行線状と思われる。20～22は瓦器椀で、いずれも底部の小片である。見込みの暗文は20が斜格子状、21が粗い格子状、22が細かい格子状である。17～22は12世紀後半に比定される。23は須恵器杯蓋のつまみ部で、８世紀頃に比定される。24は弥生土器長頸壺で、後期(畿内第Ⅴ様式)に比定される。

４区
０．盛土・撹乱
１．2.5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト　旧耕土
２．2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
３．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～細粒砂　水成層～作土
４．7.5GY6/1緑灰色シルト～細粒砂　Fe斑　撹拌作土
５．2.5Y6/4にぶい黄色極細粒砂　水成層　３区Ａ層
６．2.5GY5/1オリーブ灰色シルト～極細粒砂混粘土　土壌化層
７．5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂混シルト質粘土　炭　土壌化層
８．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂混粘土質シルト　炭　土壌化層
９．5Y6/3オリーブ黄色シルト質粘土　Fe斑　上部土壌化
10．5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土　Fe斑　水成層　上部土壌化

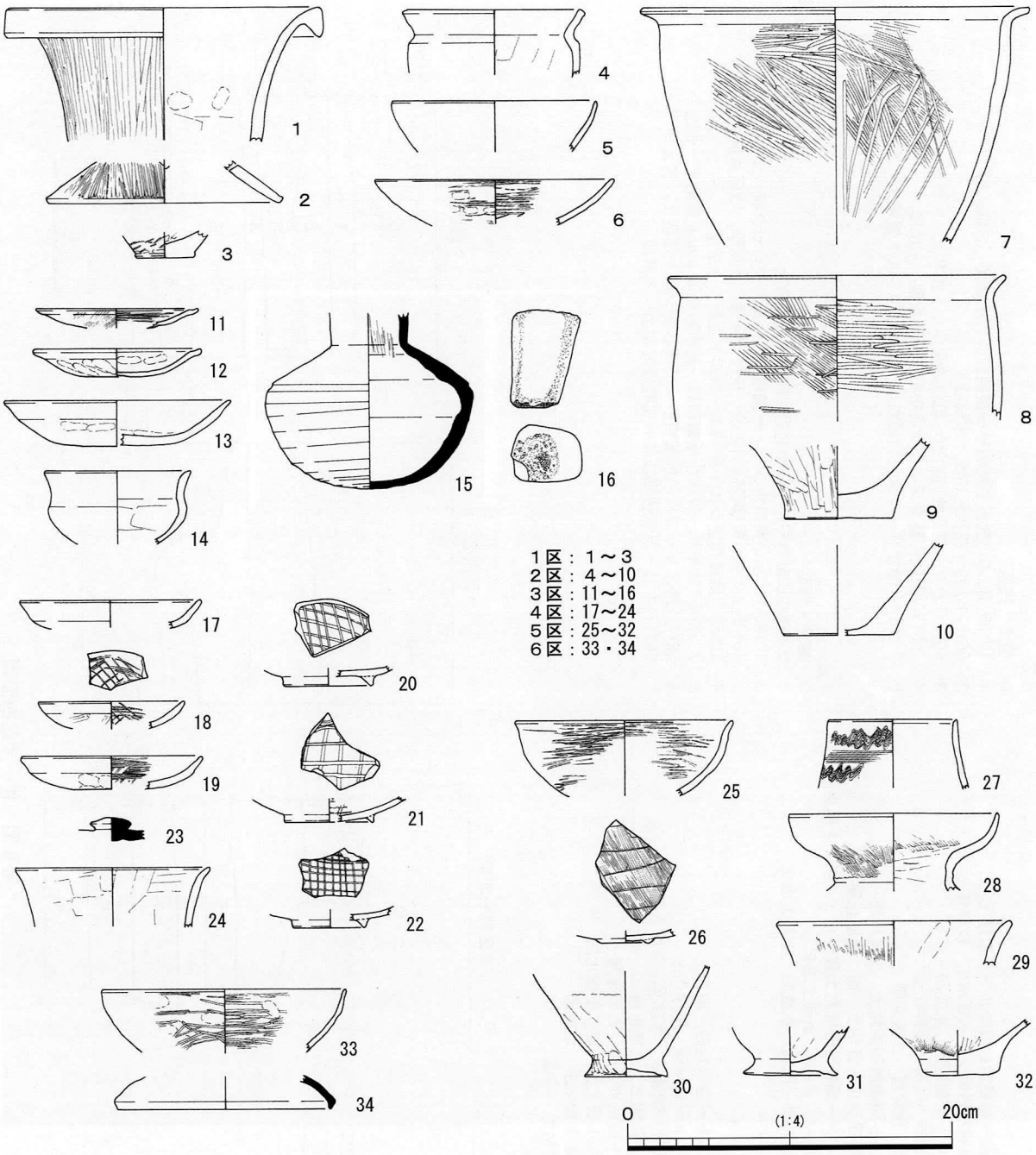
５区
０．盛土・撹乱
１．2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト～極粗粒砂　旧耕土
２．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～細粒砂　撹拌作土
４．7.5Y6/1灰色粘土～粗粒砂互層　細礫混　水成層　３区Ａ層
５．2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土　土壌化層
６．5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土　炭　土壌化層
７．2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト質粘土　炭　土壌化層
８．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土　水成層
９．2.5Y6/3にぶい黄色シルト質粘土　Fe斑

６区
０．盛土・撹乱
１．10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂～極粗粒砂　水成層　３区Ａ層
２．5GY5/1オリーブ灰色粘土　水成層
３．5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　水成層
４．2.5Y5/1黄灰色粘土ブロック混細粒砂～粗粒砂　水成層
５．2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　水成層

７区
０．盛土・撹乱
１．2.5Y6/2灰黄色シルト～中粒砂　Fe斑　撹拌作土
２．10YR6/3にぶい黄橙色シルト～細粒砂　Fe斑　ブロック状作土
３．10YR7/2にぶい黄橙色極細粒砂～粗粒砂互層　水成層　３区Ａ層
４．10YR6/2灰黄褐色シルト質粘土～シルト互層　水成層
５．2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂少混シルト質粘土　作土？
６．5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　作土？
７．5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混粘土　水成層



第４図　４～７区断面図



第５図　出土遺物

５区

０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土である。２層は撹拌された作土である。３層は河川堆積で、ＮＲ１に相当し、摩耗した土師器・須恵器が出土した。４～６層は土壌化層で、出土遺物から概ね４・５層が古墳時代前期～中世、６層が弥生時代後期の遺物包含層である。７層は湿地性の水成層である。８層はFe斑を含み土壌化層と考えられる。

遺物は４・５層出土の瓦器椀(25・26)、６層出土の弥生土器(27～32)を図化した。25は内外面に密にヘラミガキを施すもので、12世紀中頃までに比定される。26は見込みに粗い平行線状暗文

を施すもので、13世紀前半に比定される。27は無頸壺で、外面に櫛描き（８本/９㎜）による波状文・直線文を巡らせる。28は受け口状口縁の広口壺である。内外面にハケを施し、頸部外面に段を有する。29は長頸壺の口縁端部である。外面に縦位のハケ・ヘラミガキを施す。30～32は甕底体部である。30・31は共に底部外端部を摘み出している。これらは27・30・31が畿内第Ⅳ様式、28・29・32が第Ⅴ様式に比定される。

６区

０層は盛土・撹乱。１層は河川堆積で、中世以降の土師器、須恵器、瓦器が出土した。２層以下も水成層であり、１～４層は一連の河川堆積で、ＮＲ１と考えられ、流心に近いと捉えられる。２層から奈良時代頃の土師器・須恵器が出土した。

遺物は１層出土の瓦器椀(33)、２層出土の須恵器杯蓋(34)を図化した。33のヘラミガキは内面が密、外面はやや粗で、12世紀後半に比定されよう。34は口縁端部の小片で、天井部に灰が被る。

７区

０層は盛土・撹乱。１層は撹拌の著しい旧耕土である。２層はブロック状を呈する作土である。３・４層は河川堆積で、ＮＲ１に相当する。５・６層は水成層と思われるが作土の可能性もある。５層から中世頃の土師器・須恵器・瓦器出土。７層は湿地性の水成層である。

３）検出遺構と出土遺物

３区３層上面(T.P.＋11.4m)で北東－南西方向の自然河川１条（ＮＲ１）を検出した。調査区中央で北肩を検出したもので、規模は幅1.0m以上、深さは検出部分で約0.9mを測る。埋土は細粒砂～粗粒砂互層（Ａ層）である。東の４～７区においてT.P.＋11.0m付近に見られる砂層もＡ層に相当すると考えられる。層位的に時期は中世～近世に比定される。

３．まとめ

今回の調査では弥生時代前期～近世の遺物包含層や自然河川を確認した。出土遺物はコンテナ２箱を数える。

調査が最も深くまで及んだ２区では、現地表下約3.0m（約T.P.＋9.5m）で弥生時代前期～中期前半の遺物包含層が認められ、T.P.＋9.2m付近が当時の生活面であると捉えられる。また１区でも弥生時代中期末頃の遺物包含層が見られ、遺構の可能性もある。周辺では北東約150mの（東弓削93－298）や、さらに北の（市S50北半）において、弥生時代中期の遺物を多く含む地層が確認されており、南北方向に展開する集落域が想定できる。

１・３～５区では弥生時代後期、古墳時代、中世に至るまで連綿と形成された遺物包含層を確認した。遺構は確認できなかったが、各層の境は不明瞭なものであり、各時代に生活面を形成していたとは言い難い状況である。（東弓削93－298）においては、古墳時代後期～中世の遺物を多く含む地層が検出されており、遺構埋土の可能性が指摘されている。今回検出の遺物包含層についても同様の遺構埋土の可能性があろう。

３区では中世～近世頃の自然河川を検出した。同様の堆積は４～７区でも認められ、東西方向の流路が想定できる。

参考文献

・山本　博1971『竜田越』学生社
・山本　昭1976『東弓削遺跡　八尾市文化財調査報告３』八尾市教育委員会
・滝　斎1995「6.東弓削遺跡(93－298)の調査」『八尾市内遺跡平成６年度発掘調査報告書Ⅱ　八尾市文化財調査報告32　平成６年度公共事業』八尾市教育委員会
・寺沢　薫・森井貞雄1989「２－１河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社

図版1

１区調査地（南から）

１区北壁

１区北壁下部

２区調査地（北から）

２区東壁

２区東壁下部

３区機械掘削（南から）

３区第１面（西から）

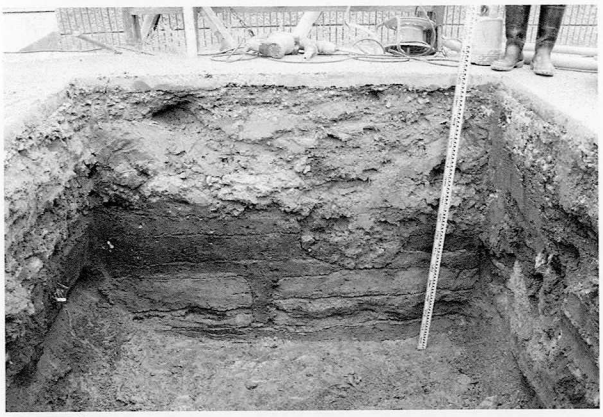
図版2

3区上部東壁

3区下層機械掘削（南から）

3区下部北壁

4区機械掘削（北東から）



4区西壁

4区西壁下部

東部調査地（東から）

5区西壁

図版3

５区北壁下部

５区北壁７層土器出土状況

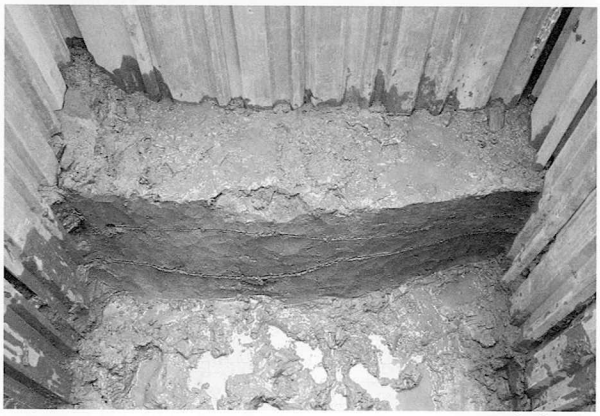
６区調査地（西から）

６区南壁

６区南壁下部

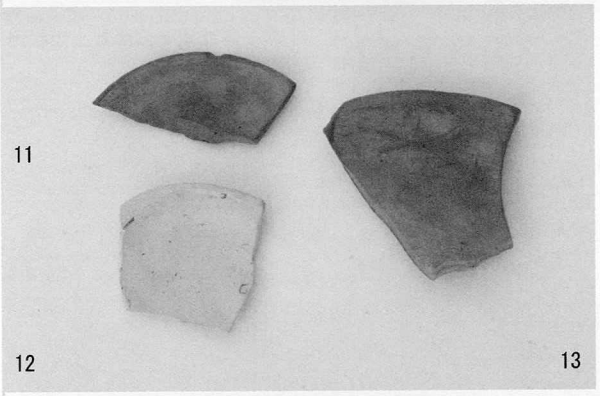
７区全景（東から）

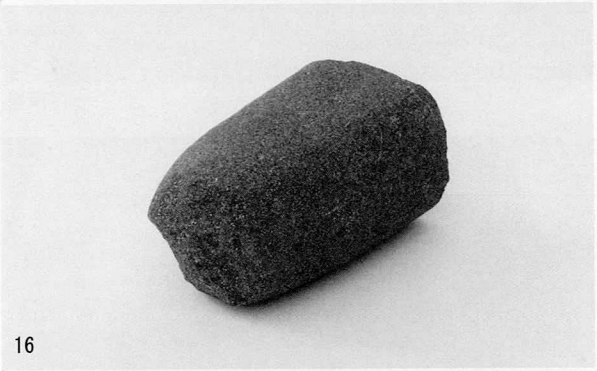
７区南壁

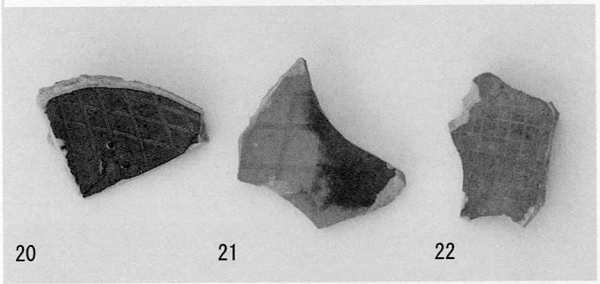


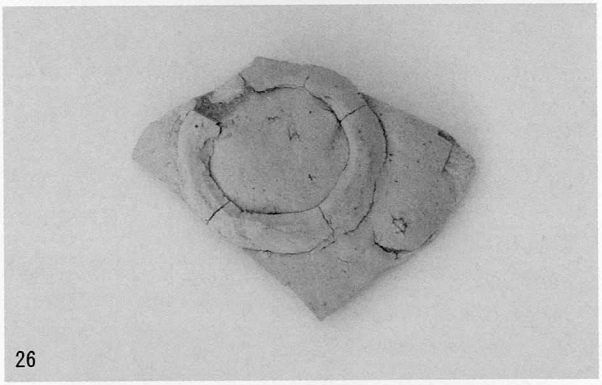
７区南壁下部

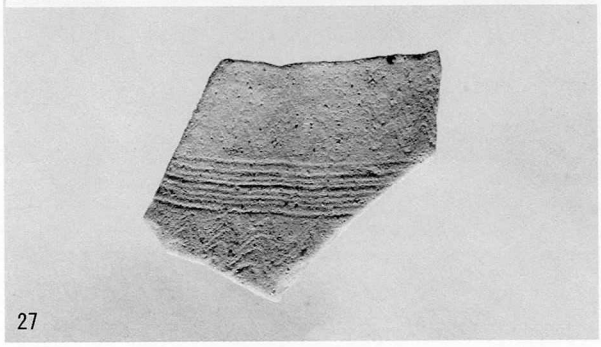
図版4

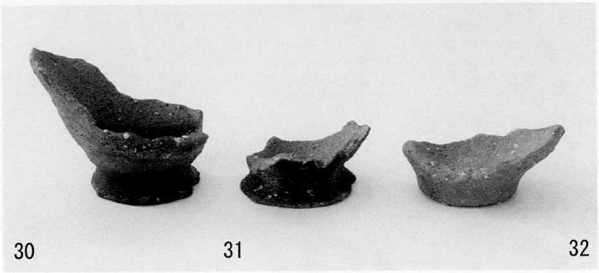












XIV　水越遺跡第12次調査（ＭＫ2012－12）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市服部川１丁目地内で実施した下水道工事(23－15工区)に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する水越遺跡第12次調査(ＭＫ2012－12)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成25年２月５日～３月27日(外業実働５日)に、樋口　薫を調査担当者として実施した。調査面積は約20㎡である。
1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
　デジタルトレース－樋口
1．本書の執筆・編集は樋口が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……95
2．調査概要……96
　1）調査の方法と経過……96
　2）基本層序と出土遺物……96
　3）検出遺構と出土遺物……97
3．まとめ……97

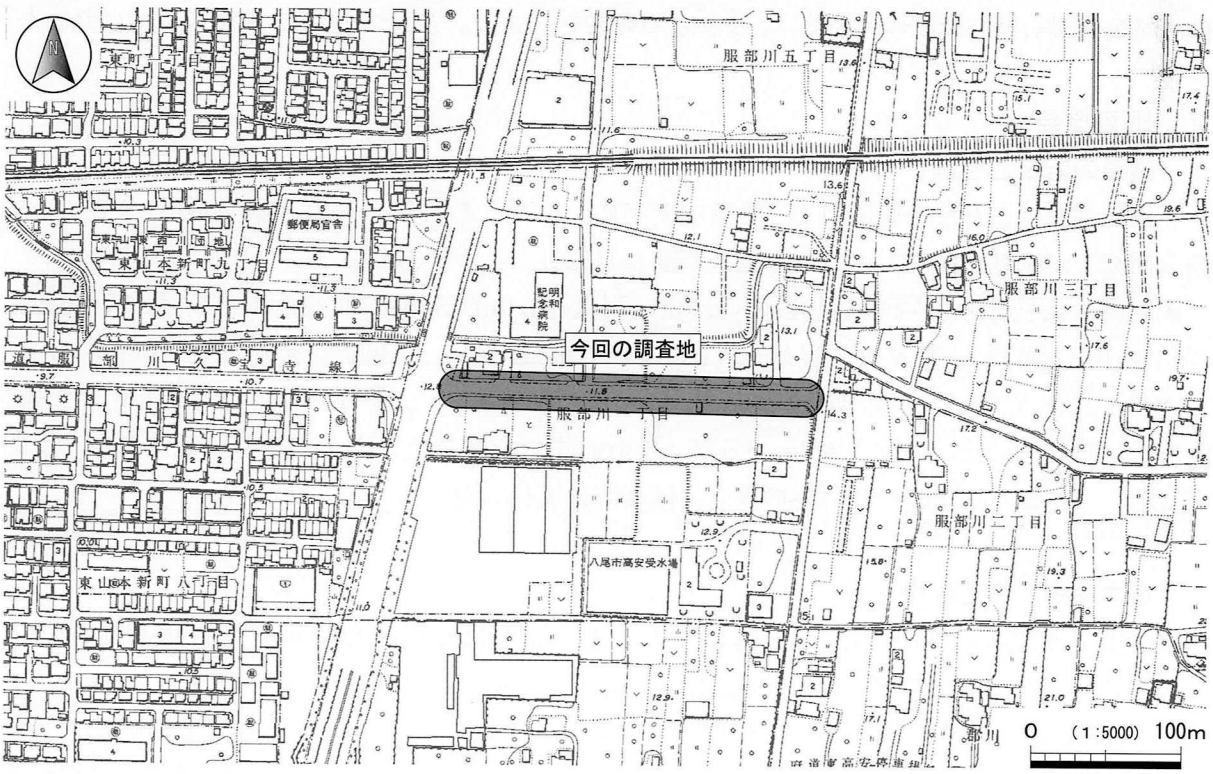
XIV　水越遺跡第12次調査（ＭＫ2012－12）

１．はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部を占める。今回報告する水越遺跡は、本市東部の生駒山地西麓部に発達した緩扇状地上（標高12～55m）に立地する。現在の行政区画では、西高安町１丁目、水越２・５・７丁目、千塚１～３丁目、服部川１～７丁目、神立１丁目、及び千塚、大窪、山畑、服部川一帯の東西約1.25km、南北約1.2kmがその範囲と推定されている。

本遺跡を含む生駒山地西麓部には、多く遺跡が分布する。北には、弥生時代後期初頭の鋳造鉄剣や古墳時代前期の瑪瑙製鏃形石製品が出土した大竹西遺跡をはじめ、大竹遺跡、太田川遺跡など縄文時代以降の複合遺跡が展開するほか、古墳時代中期前半に造営された中河内地域最大の前方後円墳である心合寺山古墳（墳丘長160m以上）や、中期後半に比定される鏡塚古墳（径約28mの円墳または前方後円墳と推定される）が知られる。東の生駒山地西麓に発達した尾根上には、古墳時代後期以降に築造された高安古墳群（180基以上）が群集している。南には、高安古墳群にさきがけて横穴式石室を採用し、盟主的な役割を担ったことが推測される郡川西塚古墳・郡川東塚古墳が、南北を貫く東高野街道を挟んで東西に対峙している。時代が下ると、本遺跡の南端付近に郡川廃寺（高麗寺跡：奈良時代前期～鎌倉時代）の建立が推測されるが、詳細は分かっていない。

本遺跡は、大正９（1920）年、清原得厳氏によって石鏃が採取されたことに端を発する。その後、昭和５（1930）年には、勾玉研磨用の筋砥石をはじめ、滑石製小玉や管玉の未完成品といった石製



第１図　調査地周辺図

品が表採されたほか、昭和９(1934)年には、東高野街道(現、旧国道170号線)の改修工事が行われ、弥生時代後期に帰属する土器の出土を見た。昭和53(1978年)、本遺跡内において初となる本格的な調査(府立清友高校新設工事に伴う発掘調査)が大阪府教育委員会により行われ、縄文～鎌倉時代の遺構、遺物が検出された。特に弥生～古墳時代にかけては、方形周溝墓をはじめとする墓域を検出したほか、古墳時代中期には玉作りに関連する遺跡であったことを示唆する滑石製管玉の未完成品などの石製品が多く出土した。この内後者については、本遺跡の東部に鎮座する式内社玉祖神社との有機的な関係が注目される。

その後、本遺跡では八尾市教育委員会、当調査研究会による数次の調査が行われ、縄文時代中期～近世に至る複合遺跡として認識されるようになってきた。

本遺跡の南端に位置する今回の調査地周辺を見渡すと、南西約200mの地点で実施の第５次調査(ＭＫ95－５)では、弥生時代後期の溝をはじめ、古墳時代前期の竪穴住居、掘立柱建物、井戸などで構成された居住域や、方形周溝墓などの墓域、平安時代末～中世の水田を主体とした生産関連遺構が検出された。一方、南東約400m地点で実施の95－582調査では、本遺跡最古となる縄文時代中期末の居住域を構成する遺構、遺物を検出した。東へ約250mの地点で行われた第７次調査(ＭＫ2000－７)では、縄文時代晩期後半の土器埋納の可能性が高い土坑をはじめ、弥生時代後期の居住域を構成する遺構群、平安時代の地鎮に関連した可能性が推測される土器埋納土坑などを検出した。ここからさらに北東へ100mの地点で実施の第４次調査(ＭＫ91－４)では、弥生時代後期の遺物包含層を確認したほか、古墳時代後期～奈良時代に比定される北東から南西に流下する流路内からは、鋤をはじめとする木製品の出土を見た。本地の北東200～350m地点にあたる第６次調査(ＭＫ96－６)や第８次調査(ＭＫ2005－８)では、弥生時代後期の溝、流路、古墳時代以降の流路を検出した。今回の調査では、これらの成果を念頭に置きつつ、遺構、遺物の検出に努めた。

２．調査概要

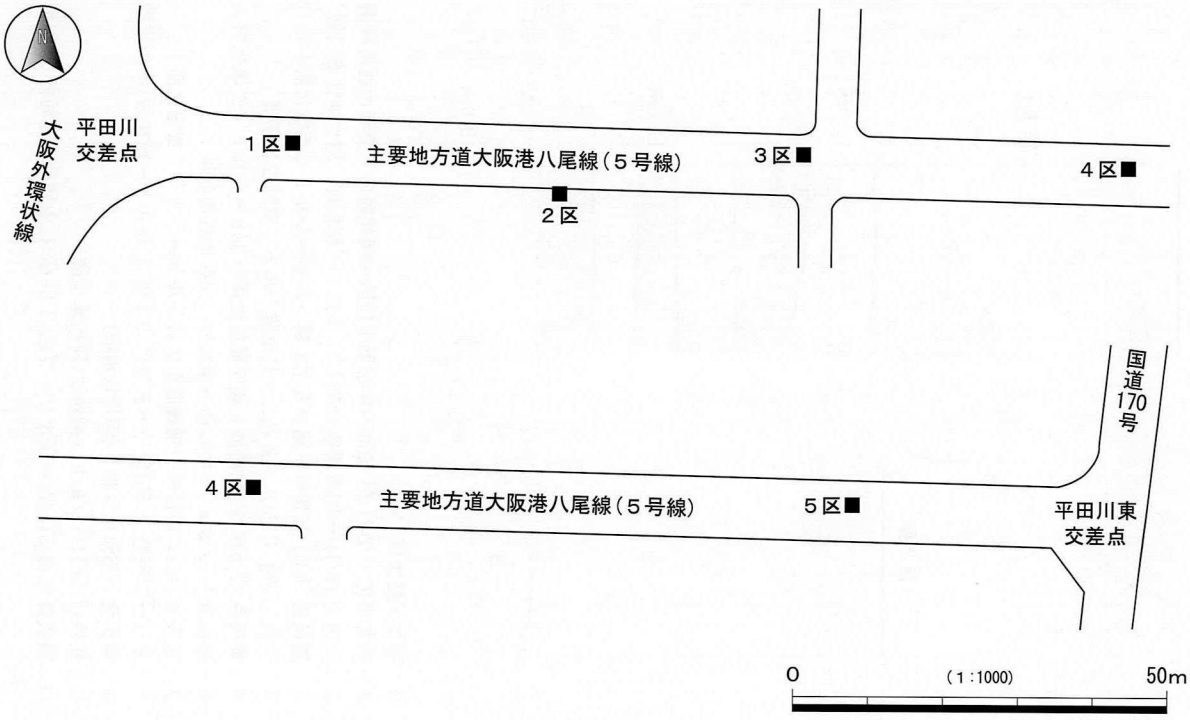
１）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市服部川１丁目地内で実施した下水道工事(23－15工区)に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第12次調査(ＭＫ2012－12)である。

調査区は人孔部分(平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0㎡)５箇所(西から１～５区)で、総面積は約20.0㎡を測る。調査は、現地表(１区：T.P.＋11.890m、２区：11.730m、３区：T.P.＋11.840m、４区：T.P.＋12.300m、５区：T.P.＋13.870m)下2.2～3.4m(１区：3.2m、２区：2.5m、３区：2.2m、４区：2.2m、５区：3.4m)までを機械と人力を併用して掘削した。なお調査は、２区は日中に、それ以外の調査区は夜間に実施した。

２）基本層序と出土遺物

１～５区において11層の地層を確認した。１・２層は５区確認の扇状地性堆積層(１層：T.P.＋12.5～12.9m　２層：T.P.＋12.2m)である。３層は５区確認の土壌化層(T.P.＋11.8～11.9m)である。４層は５区確認の湿地性堆積層(T.P.＋11.5m)である。５層は５区確認の土壌化層(T.P.＋11.2m)である。６層は５区確認の扇状地性堆積層(T.P.＋11.0m)である。７層は５区確認の土壌化層(T.P.＋10.8m)である。８層は４区確認の河川堆積層(T.P.＋10.4m以下)であ



第２図　調査区位置図

る。９・10層は３区確認の河川堆積層(９層：T.P.＋10.0m　10層：T.P.＋9.8m)である。11層は１区確認の河川堆積層(T.P.＋9.3m以下)である。

３）検出遺構と出土遺物

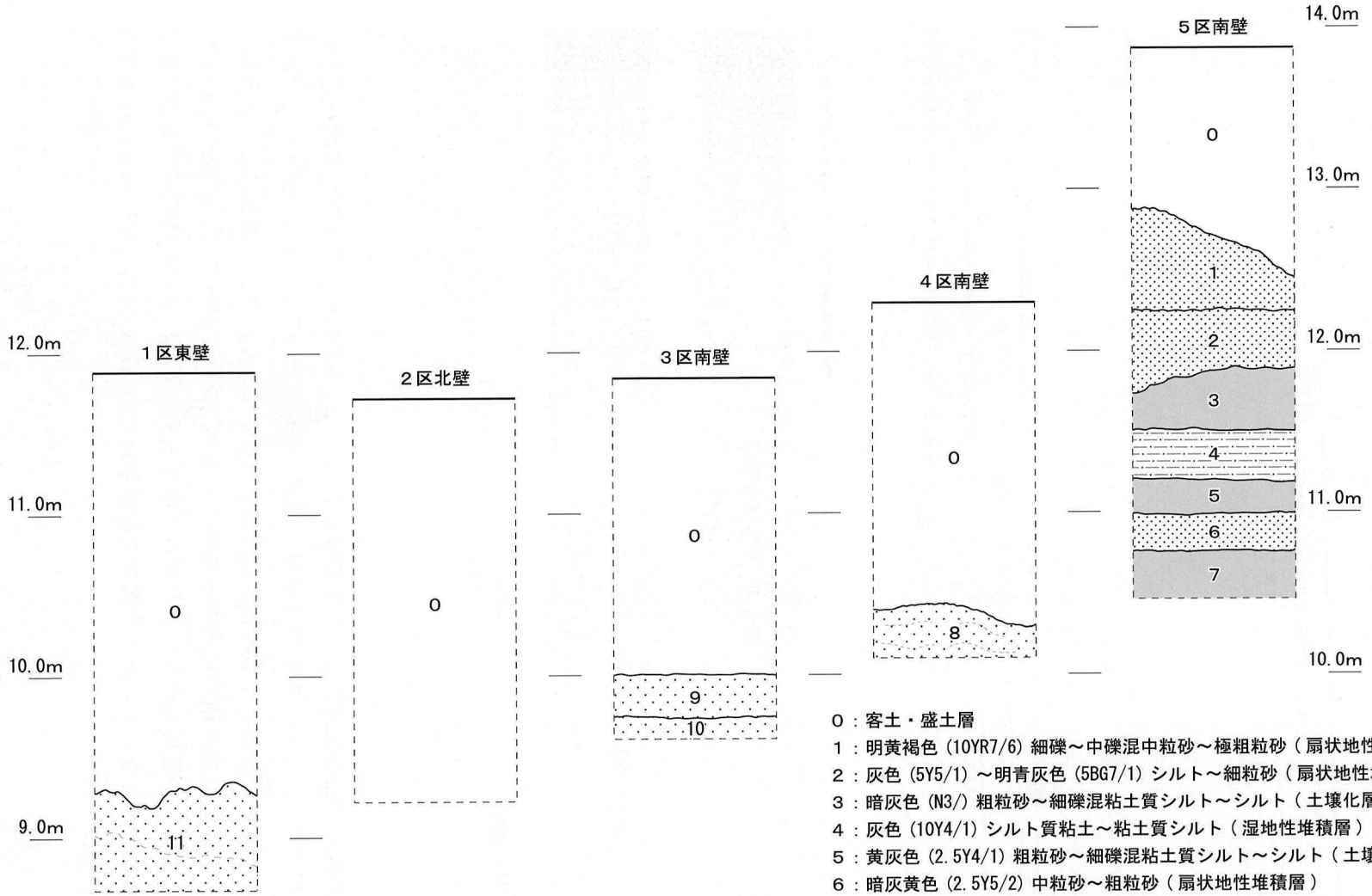
なし。

３．まとめ

今回の調査地の南約70mの地点では第５次調査(ＭＫ95－５)が行われ、弥生時代後期～近世の遺構・遺物が検出された。この内古墳時代初頭～前期については、T.P.＋9.2～10.5mで検出されており、居住域と墓域が近接して形成される様相を明らかにした。今回の調査における５区５層土壌化層は、レベル的に当該期に対応する地層の可能性が高い。本層内には遺物が混在せず、この上位の地層にも遺物が認められないことから、第５次調査で検出された遺構群が本地にまでは広がらない可能性が高くなった。第５次調査で確認された当該期の集落の北限を考える上で特筆すべき成果と言えよう。

参考文献

・坪田真一2006「Ⅱ　水越遺跡(第５次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告92』財団法人八尾市文化財調査研究会

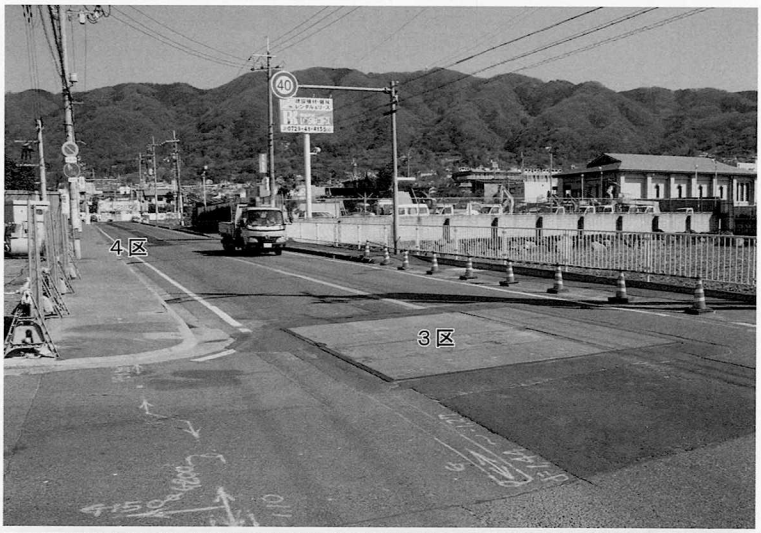


0：客土・盛土層
1：明黄褐色（10YR7/6）細礫～中礫混中粒砂～極粗粒砂（扇状地性堆積層）
2：灰色（5Y5/1）～明青灰色（5BG7/1）シルト～細粒砂（扇状地性堆積層）
3：暗灰色（N3/）粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト（土壌化層）
4：灰色（10Y4/1）シルト質粘土～粘土質シルト（湿地性堆積層）
5：黄灰色（2.5Y4/1）粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト（土壌化層）
6：暗灰黄色（2.5Y5/2）中粒砂～粗粒砂（扇状地性堆積層）
7：暗灰色（N3/）粗粒砂～細礫混粘土質シルト～シルト（土壌化層）
8：オリーブ灰色(2.5GY5/1)～灰黄色(2.5Y6/2)シルト～細粒砂(河川堆積層)
9：青灰色(5BG5/1)シルト(河川堆積層)
10：灰色(7.5Y5/1)シルト～細粒砂(河川堆積層)
11：暗灰黄色(2.5Y5/2)～灰オリーブ色(2.5GY5/1)中粒砂～粗粒砂(河川堆積層)

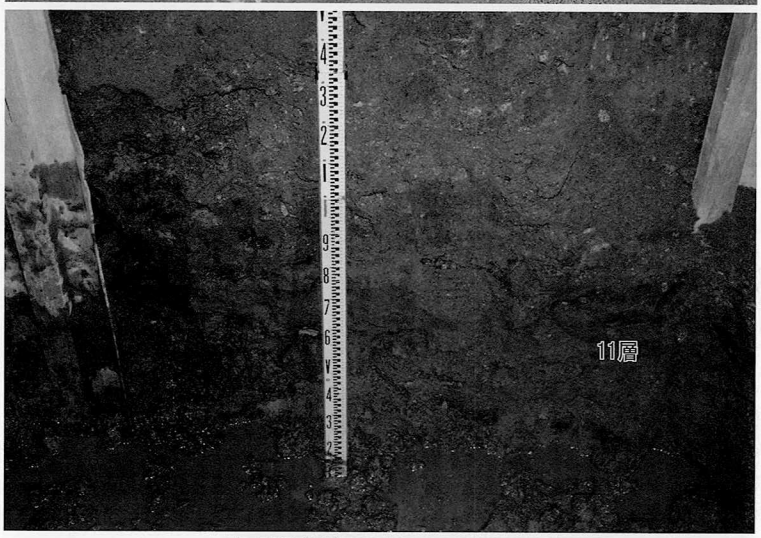
第３図　断面図（S＝縦：１/40　横：１/80）

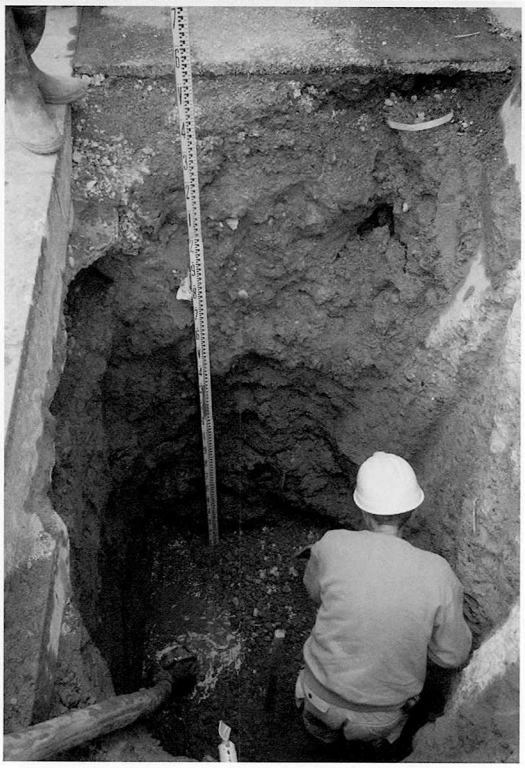
図版1

調査地周辺状況（北西から）



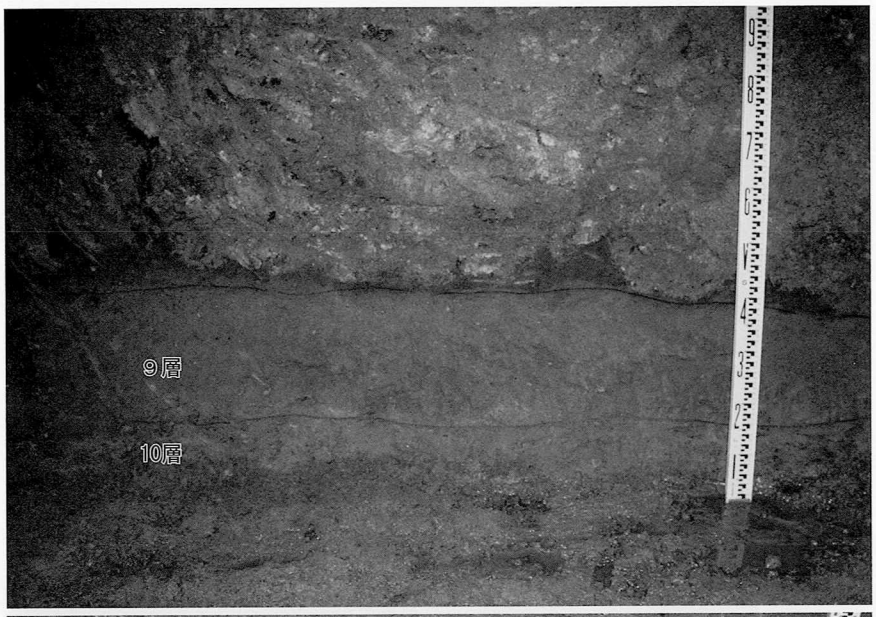
１区東壁（西から）





２区東壁（西から）

図版2



3区南壁（北から）

4区南壁（北から）

5区南壁（北から）

XV　水越遺跡第13次調査（ＭＫ2013－13）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市服部川５丁目地内で実施した下水道工事(24－16工区)に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する水越遺跡第13次調査(ＭＫ2013－13)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成25年４月４日～平成25年６月27日(外業実働５日)に、坪田真一・西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約20㎡である。
1．現地調査においては、飯塚直世・芝﨑和美・竹田貴子の参加を得た。
1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
　遺物実測－伊藤静江、遺物トレース－市森千恵子、その他－坪田。
1．本書の執筆は坪田・西村が、編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……101
2．調査概要……102
　1）調査の方法と経過……102
　2）基本層序と出土遺物……102
3．まとめ……104

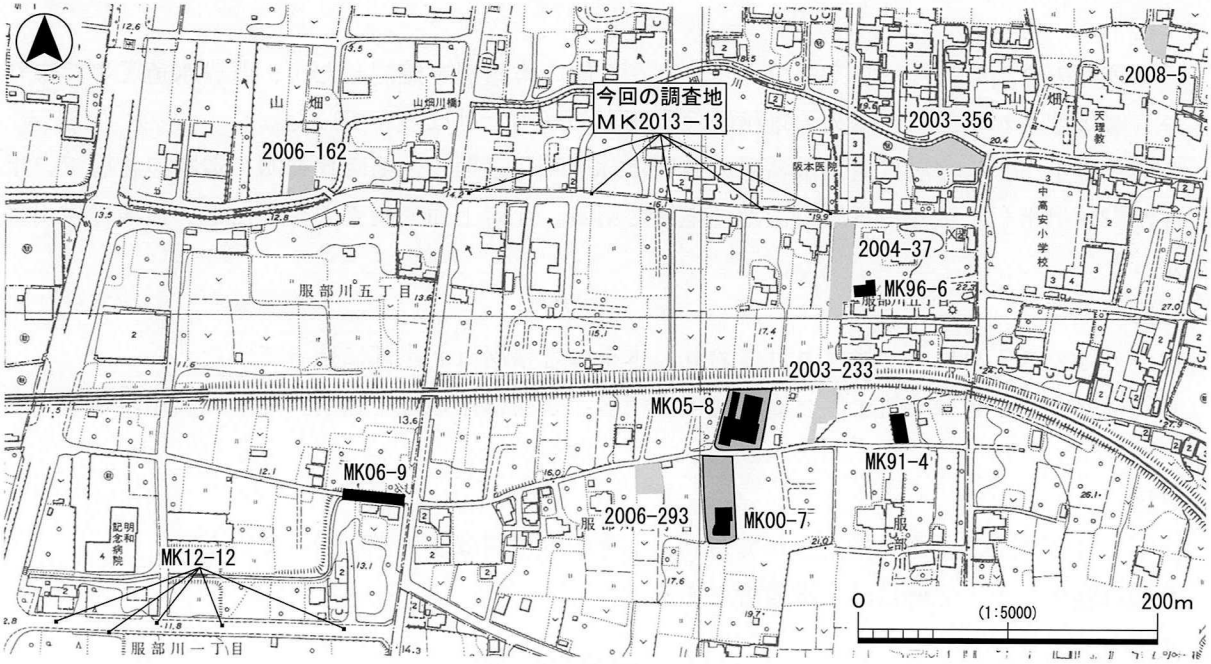
XV　水越遺跡第13次調査（ＭＫ2013－13）

１．はじめに

水越遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安町１丁目、水越２・５・７丁目、千塚１～３丁目、服部川１～７丁目、神立１丁目、及び千塚、大窪、山畑、服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡・高麗寺跡に接しており、東側には高安古墳群・高安千塚古墳群が広がっている。

当遺跡では大正９年に清原得巖氏により石鏃が採集されて以来、縄文時代の石器や弥生～古墳時代の土器・玉作関係資料が多く採集され、「高安遺跡」・「千塚遺跡」等の名称で遺跡の存在が知られていた。そして昭和53年に最初の発掘調査として、大阪府教育委員会によって大阪府立清友高等学校建設に伴う調査(S53府教委)が実施された。調査では既知の採集資料と同様の成果が得られた他、弥生時代～古墳時代の集落遺構(井戸・溝・方形周溝墓・方墳・土器棺等)、中世の集落遺構(掘立柱建物・井戸等)が検出された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次に亘る発掘調査が行われており、これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世の複合遺跡であることが認識されている。

今回の調査地は遺跡範囲中心に近く、周辺では南東部で研究会第４・６・７・８次調査を実施している。これらの調査では弥生時代後期を中心とした遺構・遺物が検出され、この一帯が該期の集落域であったことが確認されている。さらに第７次調査では縄文時代晩期の土器埋納ピットの可能性がある遺構の他、平安時代では土坑や地鎮祭祀を示唆するような土器埋納ピットが検出されており特筆される。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

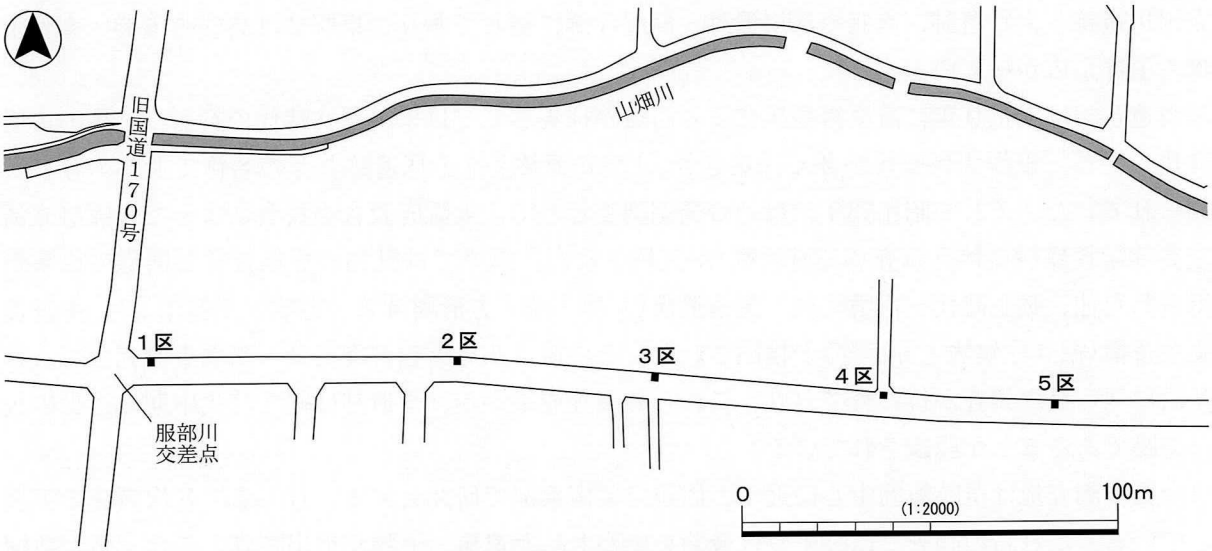
1）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市服部川５丁目地内で実施した下水道工事(24－16工区)に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第13次調査(ＭＫ2013－13)である。

調査地は人孔部分５箇所(約2.0×2.0m：西から１～５区)で、総面積は約20㎡を測る。

調査は現地表(T.P.＋14.3～19.1m)下2.5～2.9mについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では点在する工事使用のベンチマークを標高の基準とした。



第２図　調査区位置図

2）基本層序と出土遺物

1区

現地表面の標高はT.P.＋14.3mである。０～６層の堆積層を確認したが、既設水道工事により１～５層は壊されており、本来の堆積層は北西隅の一画だけに残っていた。

０層は盛土。１・２層は河川堆積層。３層は弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物包含層で、土器片が少量出土した。４～６層は湿地性堆積である。４層上面で調査を行ったが、遺構の検出はなかった。

2区

南半分はガス工事により撹乱されており、本来の堆積層は北半部に残っていた。

０層は盛土。１層は旧耕土。２層は河川堆積層。３層は湿地性堆積層。４層は河川堆積層である。

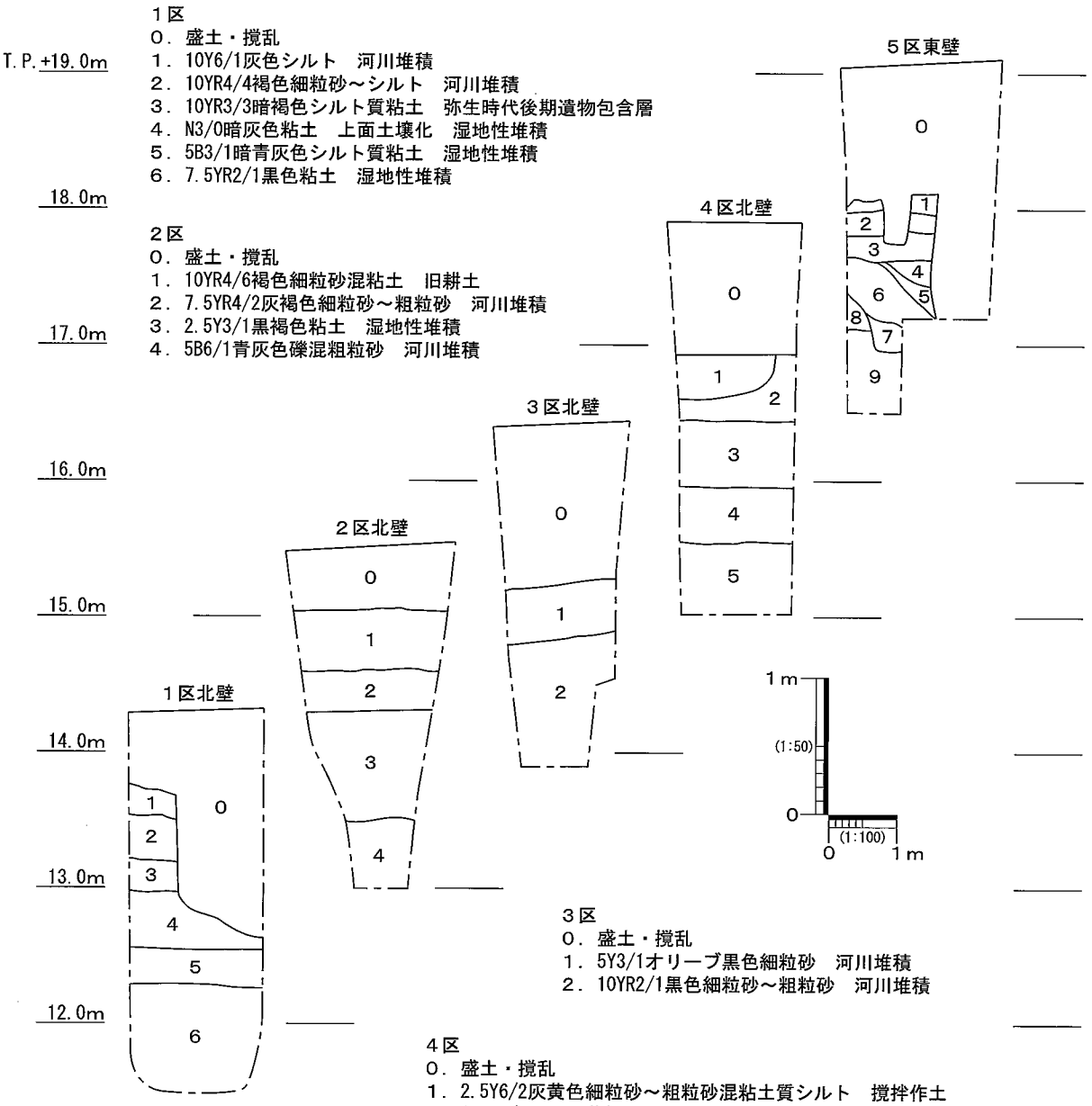
3区

南半分はガス工事により撹乱されており、本来の堆積層は北半部に残っていた。

０層は盛土。１・２層は河川堆積層である。

4区

０層は盛土・撹乱。１層は作土の可能性がある。２層以下は一連の水成層と考えられる扇状地



１区
０．盛土・撹乱
１．10Y6/1灰色シルト　河川堆積
２．10YR4/4褐色細粒砂～シルト　河川堆積
３．10YR3/3暗褐色シルト質粘土　弥生時代後期遺物包含層
４．N3/0暗灰色粘土　上面土壌化　湿地性堆積
５．5B3/1暗青灰色シルト質粘土　湿地性堆積
６．7.5YR2/1黒色粘土　湿地性堆積

２区
０．盛土・撹乱
１．10YR4/6褐色細粒砂混粘土　旧耕土
２．7.5YR4/2灰褐色細粒砂～粗粒砂　河川堆積
３．2.5Y3/1黒褐色粘土　湿地性堆積
４．5B6/1青灰色礫混粗粒砂　河川堆積

３区
０．盛土・撹乱
１．5Y3/1オリーブ黒色細粒砂　河川堆積
２．10YR2/1黒色細粒砂～粗粒砂　河川堆積

４区
０．盛土・撹乱
１．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　撹拌作土
２．10YR7/3にぶい黄橙色シルト～粗粒砂互層　水成層
３．7.5GY6/1緑灰色細粒砂～大礫混シルト質粘土　水成層
４．7.5Y5/1灰色シルト～細粒砂互層　水成層
５．2.5Y6/4にぶい黄色巨礫混シルト～極粗粒砂互層　水成層

５区
０．盛土・撹乱
１．5GY6/1オリーブ灰色シルト～細粒砂　撹拌作土
２．10YR6/2灰黄褐色シルト～粗粒砂　撹拌作土
３．2.5Y6/2灰黄色シルト～粗粒砂　水成層
４．10YR6/3にぶい黄橙色シルト質粘土混細粒砂～粗粒砂　水成層
５．10YR5/1褐灰色礫混シルト質粘土　水成層
６．10YR6/2灰黄褐色シルト～細粒砂　ブロック状　水成層
７．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂　水成層
８．2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土～粗粒砂　水成層　植物遺体(流木)
９．7.5Y4/1灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト～シルト質粘土　ブロック状

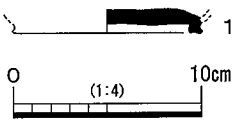
第３図　断面図

性堆積である。３・５層中には大礫～巨礫が含まれている。

５区

０層は盛土・撹乱。１・２層は撹拌された作土である。３層は水成層か、あるいはやや撹拌が認められることから作土の可能性もある。４～９層は一連の水成層と考えられ、東西方向の溝、あるいは自然河川の可能性が高い。５・６層中には人頭大の礫が多く見られた。７層は流水堆積である。８層は流木・植物遺体を多く含んでいる。９層はブロック状を呈する。

遺物は５層から奈良時代の須恵器杯身（１）の他、時期不明の土師器片が少量出土した。また９層からも時期不明の土師器片が少量出土した。



第４図　出土遺物

３．まとめ

西端の１区では弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物包含層が見られた。これまであまり発掘調査が実施されていない地域であり、南東部や北部で確認されている該期の集落域との関連が注目される。

この遺物包含層の上位では、一連の地層と考えられる扇状地性堆積や河川堆積、湿地性堆積を調査地全域で確認した。時期的には５区で奈良時代の須恵器が出土していることからそれ以降の堆積であるが、詳細については不明である。

参考文献

・高萩千秋1992「Ⅷ　水越遺跡第４次調査(MK91－4)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　財団法人八尾市文化財調査研究会報告34』財団法人八尾市文化財調査研究会

・高萩千秋1998「ⅩⅧ　水越遺跡第６次調査(MK96－6)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』財団法人八尾市文化財調査研究会

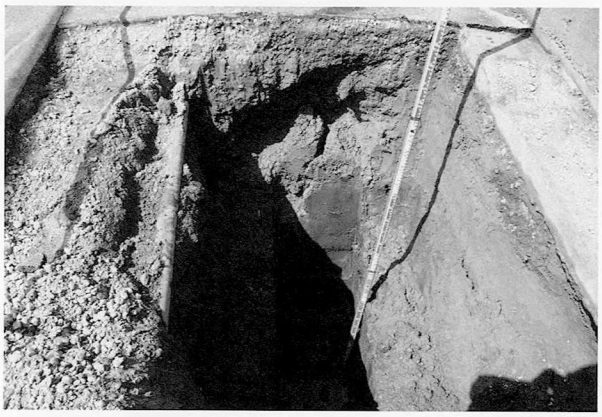
・成海佳子「Ⅱ　水越遺跡第７次調査(MK2000－7)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告２　平成12年度』八尾市教育委員会・財団法人八尾市文化財調査研究会

・坪田真一・米井友美2011「Ⅵ　水越遺跡第８次調査(MK2005－8)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告135』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

調査地遠景（西から）

１区機械掘削（南西から）

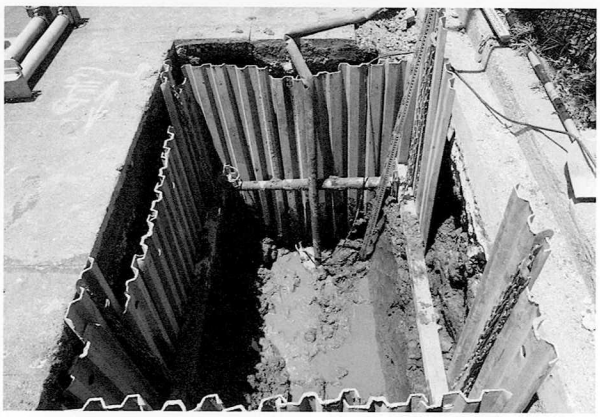

１区西壁

１区北壁

２区機械掘削（南西から）

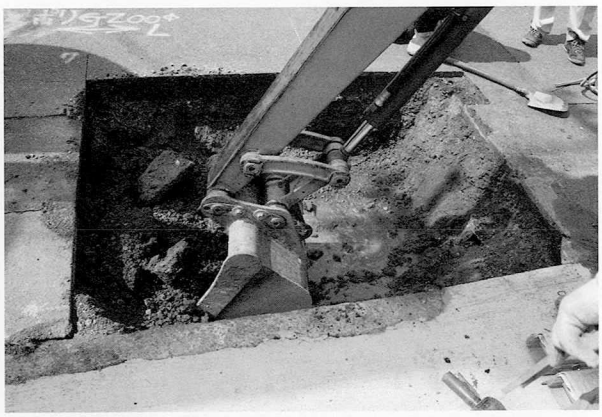
２区人力掘削（西から）

２区北壁


３区全景（東から）

図版2

3区北壁

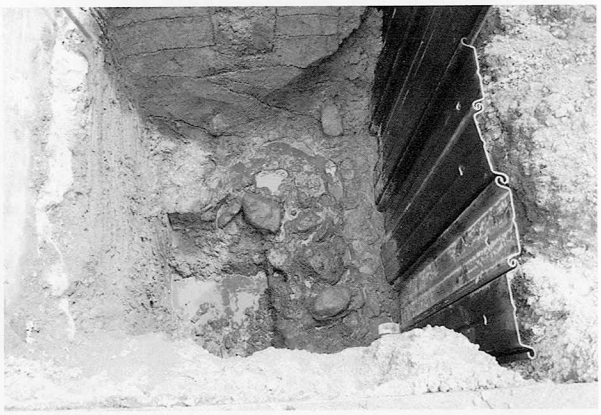


4区機械掘削（北から）

4区全景（東から）

4区北壁

5区調査地（西から）



5区全景（西から）

5区東壁

5区調査状況（北東から）

XVI　水越遺跡第14次調査（ＭＫ2013－14）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市水越１丁目地内で実施した下水道工事(24－９工区)に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する水越遺跡第14次調査(ＭＫ2013－14)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成25年６月３日～６月10日(外業実働４日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約29㎡である。
1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成26年３月をもって終了した。
　遺物実測－村井俊子、遺物トレース－市森千恵子、その他－坪田。
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……107
2．調査概要……108
　1）調査の方法と経過……108
　2）基本層序と出土遺物……110
　3）検出遺構と出土遺物……110
3．まとめ……110

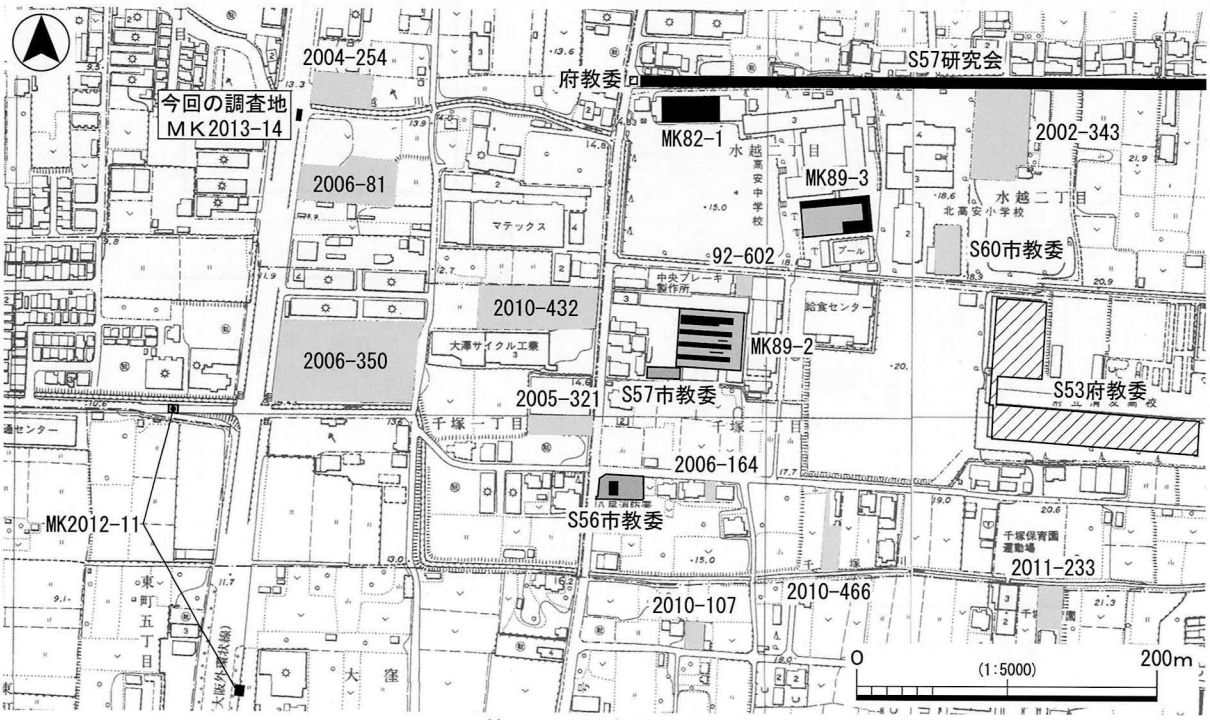
XVI　水越遺跡第14次調査（ＭＫ2013－14）

１．はじめに

水越遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安町１丁目、水越２・５・７丁目、千塚１～３丁目、服部川１～７丁目、神立１丁目、及び千塚、大窪、山畑、服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡・高麗寺跡に接しており、東側には高安古墳群・高安千塚古墳群が広がっている。

当遺跡では大正９年に清原得巌氏により石鏃が採集されて以来、縄文時代の石器や弥生～古墳時代の土器・玉作関係資料が多く採集され、「高安遺跡」・「千塚遺跡」等の名称で遺跡の存在が知られていた。そして昭和53年に最初の発掘調査として、大阪府教育委員会によって大阪府立清友高等学校建設に伴う調査(S53府教委)が実施された。調査では既知の採集資料と同様の成果が得られた他、弥生時代～古墳時代の集落遺構(井戸・溝・方形周溝墓・方墳・土器棺等)、中世の集落遺構(掘立柱建物・井戸等)が検出された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次に亘る発掘調査が行われており、これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世の複合遺跡であることが認識されている。特筆すべき成果として、遺跡範囲北部に当たる研究会第２次調査(MK89－2)では、南北方向に伸びる弥生時代中期の大溝の存在から環濠集落が推定されている。

今回の調査地は遺跡北西角部に当たる。周辺では小規模な遺構確認調査等が実施されており、南東部の(2006－81)では、中世～近世の生産関連遺構や、古墳時代初頭頃の河川や遺物包含層を確認している。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

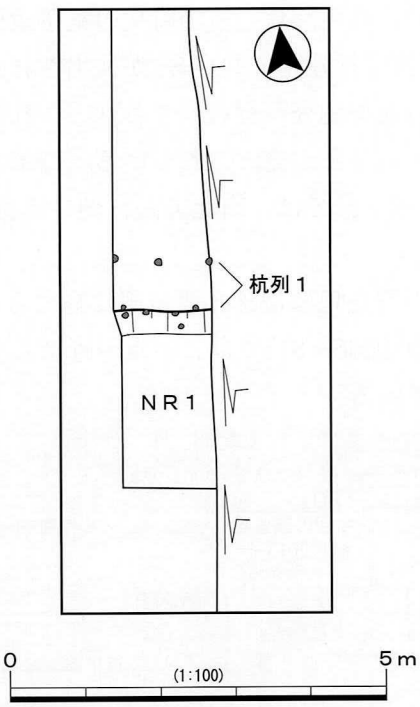
今回の調査は八尾市水越１丁目地内で実施した下水道工事(24－９工区)に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第14次調査(ＭＫ2013－14)である。

調査区は国道170号(大阪外環状線)上に設定された立坑部分(南北8.0m×東西3.6m)１ヵ所で、面積は約29㎡を測る。

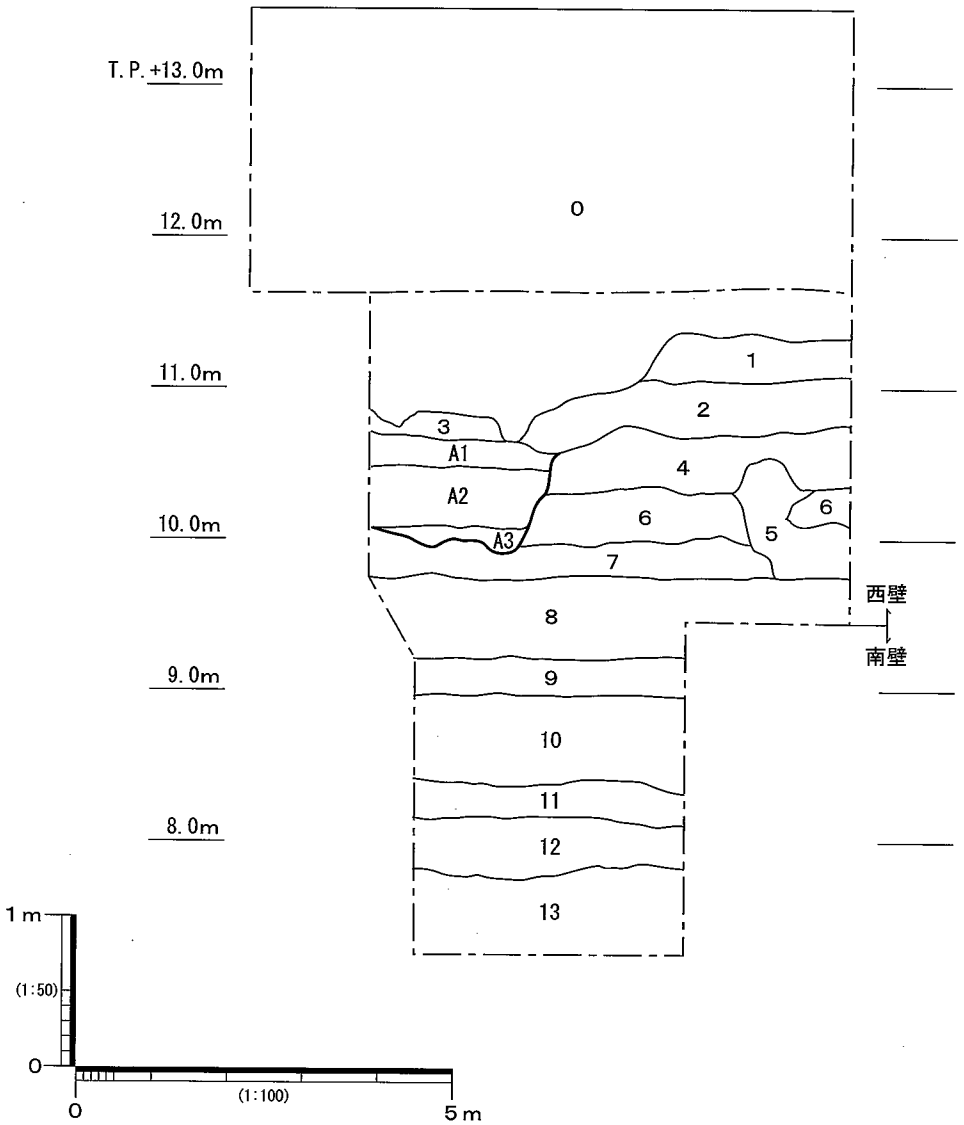
調査は現地表(T.P.＋13.5m)下約2.0～4.0mについて、機械・人力掘削併用で実施した。また以下の約2.2mについては下層確認調査を実施した。なお調査区内東半部には、道路に沿った擁壁の基礎杭(CCP杭)が並んでおり、これが調査範囲以下に及んでいたため、この部分については機械掘削とした。調査はすべて夜間調査である。

調査で使用した標高の基準は工事図面記載の「ＧＬ＝T.P.＋13.51m」である。

第２図　調査区位置図



第３図　平面図



０．盛土・撹乱
１．黄灰色細粒砂～細礫少混シルト　土壌化層
２．黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト　Fe斑　水成層　上部土壌化
３．灰色極細粒砂～細粒砂混シルト
４．暗灰黄色細粒砂～細礫混シルト　水成層　上部土壌化
５．灰色細粒砂～細礫　水成層
６．暗灰黄色細粒砂～極粗粒砂混シルト　水成層
７．黄灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト　水成層
８．灰色細粒砂～細礫混粘土質シルト　水成層
９．暗灰色極細粒砂～細粒砂少混粘土　水成層
10．灰色シルト～極粗粒砂互層　水成層
11．暗灰色粘土　水成層
12．暗灰色細粒砂～極粗粒砂混粘土　水成層
13．灰色シルト～極粗粒砂互層　水成層

ＮＲ１
A1．オリーブ灰色細粒砂～細礫混シルト
A2．黄灰色細粒砂～細礫混シルト
A3．灰黄色細粒砂～中礫

第４図　基本層序

2）基本層序と出土遺物

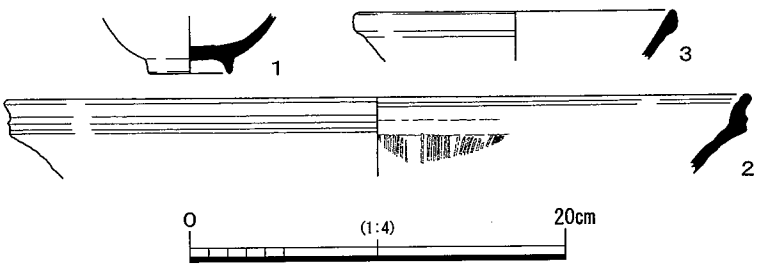
０層は盛土・撹乱。１・２層は土壌化層で、作土の可能性もある。時期は近世～近代に比定される。３層は水成層と考えられ、ＮＲ１埋土の可能性もある。４層以下(T.P.＋10.7m以下)は水成層である。このうち５層の細粒砂～細礫はその堆積状況から急激な水流が看取され、10・13層も流水堆積、他は概ね静水性の堆積といえる。

遺物は４層から時期不明の土師器片が少量出土した。

3）検出遺構と出土遺物

４層上面で自然河川１条(ＮＲ１)を検出した。またＮＲ１の護岸施設と考えられる杭列(杭列１)が見られた。

ＮＲ１は東西方向に延びる自然河川の北肩を検出した。規模は幅2.5m以上・深さ約0.7mを測る。断面逆台形を呈し、底面には起伏がみられる。埋土は３層(A1～A3層)を確認した。遺物は主にA3層から、近世の陶磁器・瓦の他、弥生時代後期～古墳時代前期頃の弥生土器・古式土師器、古墳時代中期～後期の須恵器、中世の中国製白磁碗が出土しており、１～３を図化した。１は伊万里焼碗で、見込みは蛇の目状に釉を掻き取る。18世紀代に比定される。２は丹波焼摺鉢で、摺目は７本／1.4cmが確認できる。17世紀末～18世紀前半に比定される。３は玉縁状口縁の中国製白磁碗で、表面は著しく摩耗する。12世紀代に比定される。



第５図　ＮＲ１出土遺物

杭列１はＮＲ１北肩に平行して東西方向に延びる杭列である。肩際～傾斜面に１列、さらに北側約70cmに平行する１列が見られる。杭は直径10cm程度の丸木で、長さは最大で約２ｍを測る。

ＮＲ１には基本層序第２層が落ち込む状況が認められ、また北側の杭列が１層より上から打ち込まれていることから、本来ＮＲ１は１層上面において機能していた河川と考えられる。

３．まとめ

調査では近世の自然河川ＮＲ１を検出した。調査地北側には隣接して水越川が東から西に流下しているが、同様の河川が存在したか、あるいは水越川の前身の河川の可能性もあろう。以下にも扇状地性堆積である水成層が続いており、集落域を示すような生活の痕跡は見いだせなかった。調査地は谷状地形にあって、徐々に埋没して行き、最終的に現在の水越川の流域となったものと考えられる。

参考文献

・原田　修・久貝　健・島田和子1976『大阪文化誌　第２巻・第２号』財団法人大阪文化財センター

・吉岡　哲1988「河内の玉作遺跡－本校敷地周辺の遺跡とその性格－」『紀要　清友　第１号』大阪府立清友高等学校

・西村公助1997「Ｖ　水越遺跡第２次調査(ＭＫ89－２)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会

・八尾市教育委員会2007『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告55　平成18年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

図版1

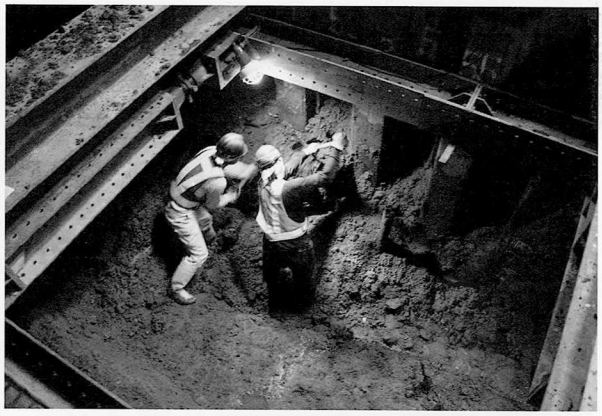
調査地（北東から）

杭列１（南から）

ＮＲ１（東から）

ＮＲ１西壁

西壁北半



調査状況（南西から）

下層南壁

下層機械掘削状況（南西から）

XVII　水越遺跡第15次調査（ＭＫ2013－15）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市山畑地内で実施した下水道工事(24－203工区)に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する水越遺跡第15次調査(ＭＫ2013－15)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成25年12月19日～12月27日(外業実働４日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約36㎡である。
1．現地調査においては、飯塚直世・永井律子・村井俊子の参加を得た。
1．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……113
2．調査概要……114
　1）調査の方法と経過……114
　2）基本層序……114
　3）検出遺構と出土遺物……114
3．まとめ……114

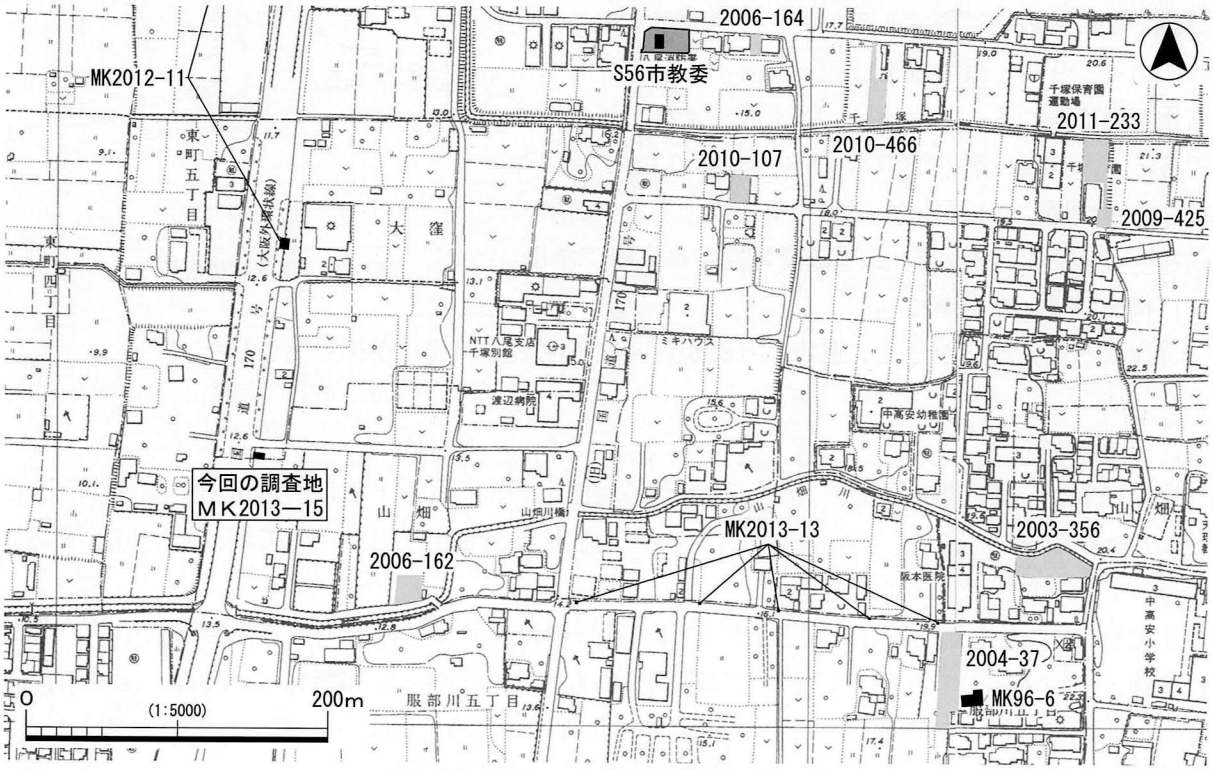
XVII　水越遺跡第15次調査（ＭＫ2013－15）

１．はじめに

水越遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安町１丁目、水越２・５・７丁目、千塚１～３丁目、服部川１～７丁目、神立１丁目、及び千塚、大窪、山畑、服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡・高麗寺跡に接しており、東側には高安古墳群・高安千塚古墳群が広がっている。

当遺跡では大正９年に清原得巌氏により石鏃が採集されて以来、縄文時代の石器や弥生～古墳時代の土器・玉作関係資料が多く採集され、「高安遺跡」・「千塚遺跡」等の名称で遺跡の存在が知られていた。そして昭和53年に最初の発掘調査として、大阪府教育委員会によって大阪府立清友高等学校建設に伴う調査(S53府教委)が実施された。調査では既知の採集資料と同様の成果が得られた他、弥生時代～古墳時代の集落遺構(井戸・溝・方形周溝墓・方墳・土器棺等)、中世の集落遺構(掘立柱建物・井戸等)が検出された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次に亘る発掘調査が行われており、これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世の複合遺跡であることが認識されている。

今回の調査地は遺跡範囲西端にあたる。周辺では北部で第11次調査(MK2012－11)を実施しており、２区の調査では弥生時代中期・後期の遺構・遺物を検出した他、下層からは縄文土器も出土しており注目される。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

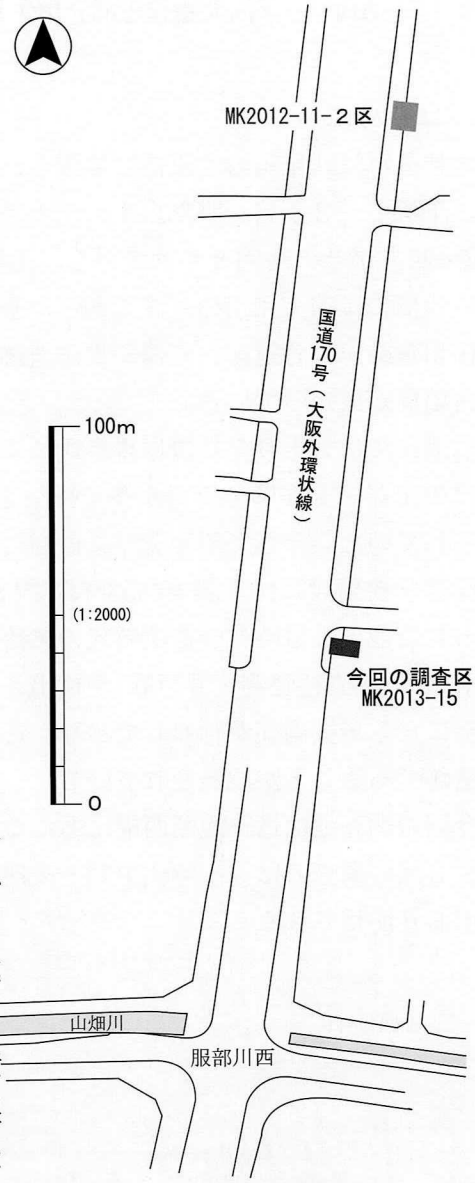
1）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市山畑地内で実施した下水道工事(24－203工区)に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第15次調査(ＭＫ2013－15)である。

調査地は八尾市東部を南北に縦断する国道170号(大阪外環状線)東側に設定された立坑部分１箇所(東西8.0m×南北4.4m)で、総面積は約36㎡を測る。

調査は現地表(約T.P.＋12.9m)下約6.0mについて、機械・人力掘削併用で実施した。なお調査区西半部には既設ＮＴＴケーブルが南北に縦断しており、約GL－3.0mまでは撹乱されていた

調査では工事使用のベンチマーク(KBM.2：T.P.＋12.725m)を標高の基準とした。



第２図　調査区位置図

2）基本層序

調査区中央の西壁断面を基本層序としたが、下層部については調査区東壁断面を合成した。

０層は盛土・撹乱である。１層は旧耕土である。２・３層も作土で、２層は撹拌され、３層はブロック状を呈する。４・５層は流水性の水成層で、４層は土壌化が認められる。６層は土壌化層で、作土の可能性もある。７層以下は扇状地性堆積である。７・８層は流水性の水成層である。９～12層は湿地性の水成層である。９層は土壌化が認められる。13～15層は洪水砂による一連の堆積であろう。16層は静水性の水成層である。17～20層は湿地性の水成層で、19層は上部がやや土壌化する。21層は洪水砂と考えられる。22・23層は湿地性の水成層である。

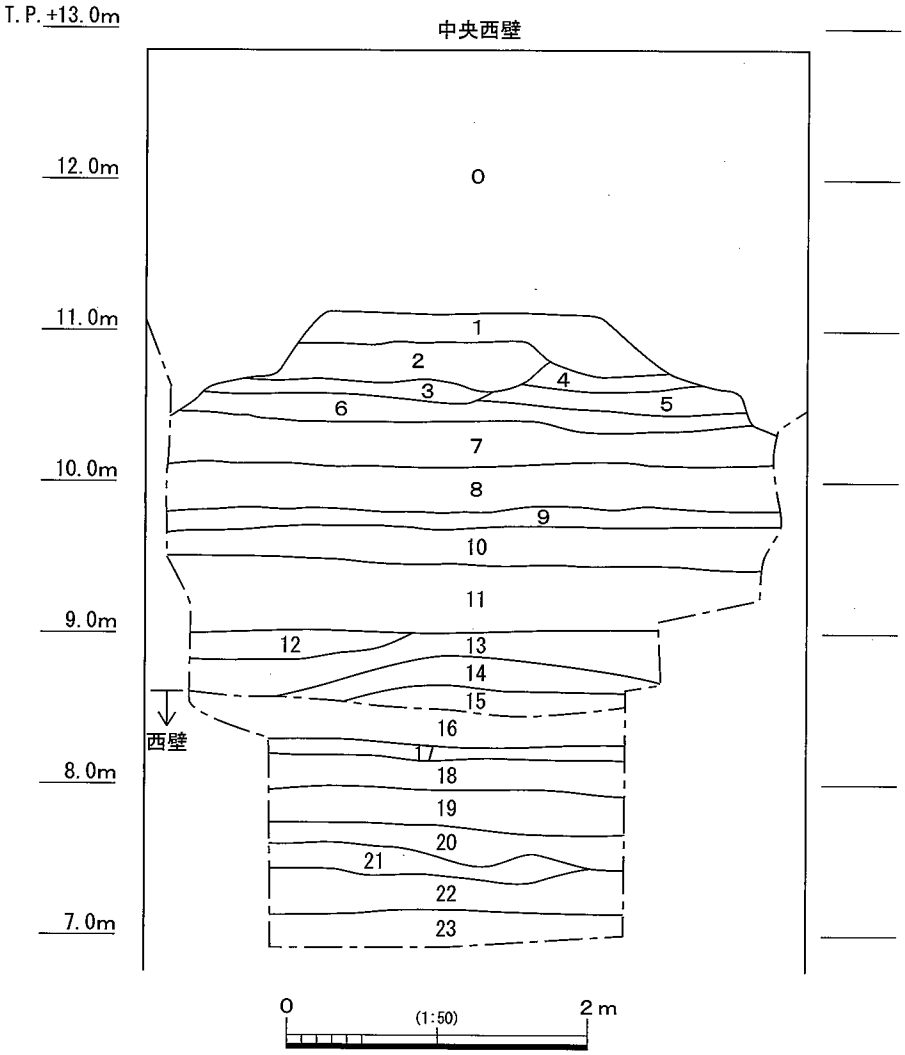
3）検出遺構と出土遺物

遺構は認められなかった。遺物は６層から時期不明の土師器片が少量出土した。

3．まとめ

今回の調査では遺構は認められず、近世頃の耕作土と、それ以下では洪水堆積や湿地性堆積といった水成層を確認した。遺物も時期不明の土師器片が少量出土したのみであった。出土遺物量はコンテナ１箱を数える。

北約140mで実施した第11次調査２区では、近世の耕作面とほぼ同一面で弥生時代中期・後期の遺構・遺物を検出した他、下層からは縄文土器も出土している。当地においては、近世耕作面のレベルはほぼ同じであり、また作土と考えられる６層から土師器片が出土していることから、弥生時代の遺構面は削平されている可能性があるが、詳細は不明である。



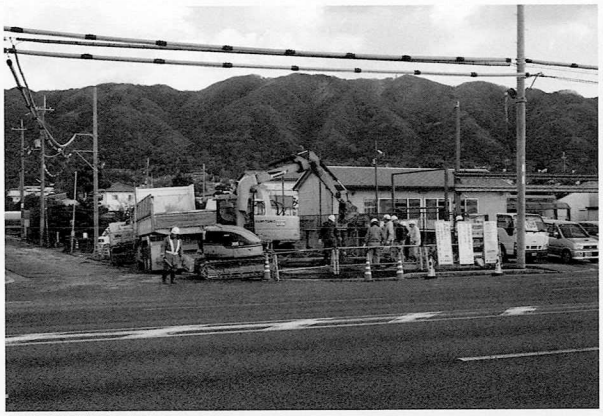
0．盛土・撹乱
1．5Y4/1灰色極細粒砂混シルト　旧耕土
2．10G5/1緑灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　撹拌作土
3．2.5Y7/2灰黄色極細粒砂～細粒砂混シルト　ブロック状作土
4．2.5Y5/1黄灰色シルト～細粒砂　流水性水成層　土壌化層
5．5Y6/1灰色シルト～極細粒砂　流水性水成層
6．2.5Y5/3黄褐色シルト質粘土～シルト　土壌化層
7．2.5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土～細粒砂互層
8．2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土～細粒砂
9．7.5Y3/1オリーブ黒色粘土　土壌化層
10．2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土　植物遺体
11．7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土
12．2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂少混粘土
13．2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂～細礫混粘土
14．2.5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～細礫
15．2.5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂
16．2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土～シルト互層
17．7.5GY4/1暗緑灰色極細粒砂混シルト質粘土
18．5GY2/1オリーブ黒色細粒砂混粘土
19．5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土
20．5GY6/1オリーブ灰色細粒砂混シルト
21．2.5GY5/1オリーブ灰色シルト～粗粒砂
22．7.5Y3/1オリーブ黒色粘土
23．5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土

第３図　断面図

参考文献

・原田　修・久貝　健・島田和子1976『大阪文化誌　第２巻・第２号』財団法人大阪文化財センター
・吉岡　哲1988「河内の玉作遺跡－本校敷地周辺の遺跡とその性格－」『紀要　清友　第１号』大阪府立清友高等学校
・坪田真一2013「ＸⅡ　水越遺跡第11次調査(MK2012－11)」『公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告141』公益財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1



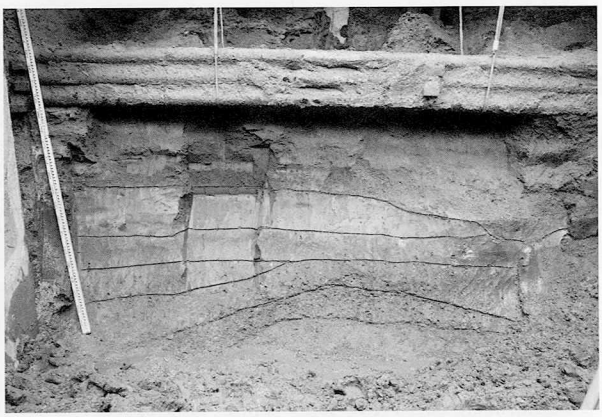
調査地（西から）

人力掘削状況（南東から）

６層上面（東から）

９層上面（東から）

東壁（０～11層）



東壁（10～15層）

西壁（16～23層）

断面実測状況（東から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおたいせき　おおたがわいせき　おんぢいせき　きのもといせき　きゅうほうじいせき こおりがわいせき　じょうほうじいせき　じんぐうじいせき　ひがしゆげいせき　みずこしいせき
書　　名	太田遺跡　太田川遺跡　恩智遺跡　木の本遺跡　久宝寺遺跡　郡川遺跡　成法寺遺跡　神宮寺遺跡 東弓削遺跡　水越遺跡
副　書　名	下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	143
編著者名	坪田真一(編)　西村公助　樋口　薫
編集機関	公益財団法人八尾市文化財調査研究会
所　在　地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町四丁目58－２　TEL・FAX　072－994－4700
発行年月日	西暦2014年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 原因
おおたいせき 太田遺跡 (第15次調査)	おおさかふやおしおおたしんまち１ちょうめ 大阪府八尾市太田新町１丁目	27212	68	34度 35分 42秒	135度 35分 12秒	20130314 ～ 20131011	約28	記録保存調査 公共下水道工事 (24-30工区)
おおたいせき 太田遺跡 (第16次調査)	おおさかふやおしおおたしんまち２ちょうめ 大阪府八尾市太田新町２丁目	27212	68	34度 35分 40秒	135度 35分 26秒	20140123	約４	記録保存調査 公共下水道工事 (25-21工区)
おおたがわいせき 太田川遺跡 (第２次調査)	おおさかふやおしおおたけ３ちょうめほか 大阪府八尾市大竹３丁目他	27212	55	34度 38分 11秒	135度 38分 16秒	20130624 ～ 20130725	約12	記録保存調査 公共下水道工事 (24-15工区)
おんぢいせき 恩智遺跡 (第28次調査)	おおさかふやおしおんぢなかまち１ちょうめ 大阪府八尾市恩智中町１丁目	27212	30	34度 36分 34秒	135度 37分 39秒	20121015 ～ 20121016	約８	記録保存調査 公共下水道工事 (23-23工区)
おんぢいせき 恩智遺跡 (第30次調査)	おおさかふやおしおんぢみなみまち５ちょうめ 大阪府八尾市恩智南町５丁目	27212	30	34度 36分 13秒	135度 37分 55秒	20130603 ～ 20130712	約20	記録保存調査 公共下水道工事 (24-21工区)
おんぢいせき 恩智遺跡 (第31次調査)	おおさかふやおしおんぢなかまち４ちょうめほか 大阪府八尾市恩智中町４丁目他	27212	30	34度 36分 32秒	135度 37分 57秒	20130701 ～ 20131001	約57	記録保存調査 公共下水道工事 (24-43工区)
きのもといせき 木の本遺跡 (第25次調査)	おおさかふやおしみなみきのもと３ちょうめ 大阪府八尾市南木の本３丁目	27212	35	34度 36分 17秒	135度 35分 14秒	20130603	約４	記録保存調査 公共下水道工事 (24-41工区)
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第85次調査)	おおさかふやおしみなみきゅうほうじ１ちょうめほか 大阪府八尾市南久宝寺１丁目他	27212	23	34度 37分 28秒	135度 35分 17秒	20130114 ～ 20130307	約12	記録保存調査 公共下水道工事 (24-26工区)
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第86次調査)	おおさかふやおしみなみきゅうほうじ３ちょうめ 大阪府八尾市南久宝寺３丁目	27212	23	34度 37分 21秒	135度 35分 08秒	20130724 ～ 20130920	約99	記録保存調査 公共下水道工事 (24-206工区)
こおりがわいせき 郡川遺跡 (第14次調査)	おおさかふやおしきょうこうじ２ちょうめ 大阪府八尾市教興寺２丁目	27212	60	34度 37分 08秒	135度 37分 52秒	20130516 ～ 20130607	約12	記録保存調査 公共下水道工事 (24-39工区)
じょうほうじいせき 成法寺遺跡 (第25次調査)	おおさかふやおししみずちょう１・２ちょうめ 大阪府八尾市清水町１・２丁目	27212	73	34度 37分 25秒	135度 36分 04秒	20130313 ～ 20130417	約11.25	記録保存調査 公共下水道工事 (送水管)
じんぐうじいせき 神宮寺遺跡 (第２次調査)	おおさかふやおしじんぐうじ３ちょうめ 大阪府八尾市神宮寺３丁目	27212	49	34度 36分 05秒	135度 37分 42秒	20131029 ～ 20131030	約８	記録保存調査 公共下水道工事 (25-37工区)
ひがしゆげいせき 東弓削遺跡 (第19次調査)	おおさかふやおしひがしゆげ２ちょうめ、やおぎひがし３ちょうめ 大阪府八尾市東弓削２丁目、八尾木東３丁目	27212	31	34度 36分 19秒	135度 37分 04秒	20130326 ～ 20130610	約28	記録保存調査 公共下水道工事 (24-37工区)
みずこしいせき 水越遺跡 (第12次調査)	おおさかふやおしはっとりがわ１ちょうめ 大阪府八尾市服部川１丁目	27212	42	34度 37分 34秒	135度 38分 01秒	20130205 ～ 20130327	約20	記録保存調査 公共下水道工事 (23-15工区)
みずこしいせき 水越遺跡 (第13次調査)	おおさかふやおしはっとりがわ５ちょうめ 大阪府八尾市服部川５丁目	27212	42	34度 37分 43秒	135度 38分 13秒	20130404 ～ 20130627	約20	記録保存調査 公共下水道工事 (24-16工区)
みずこしいせき 水越遺跡 (第14次調査)	おおさかふやおしみずこし１ちょうめ 大阪府八尾市水越１丁目	27212	42	34度 38分 03秒	135度 38分 02秒	20130603 ～ 20130610	約29	記録保存調査 公共下水道工事 (24-9工区)
みずこしいせき 水越遺跡 (第15次調査)	おおさかふやおしやまたけ 大阪府八尾市山畑	27212	42	34度 37分 46秒	135度 38分 00秒	20131219 ～ 20131271	約36	記録保存調査 公共下水道工事 (24-203工区)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
太田遺跡 (第15次調査)	集落	弥生時代後期 古墳時代初頭	土坑 包含層	弥生土器 庄内式土器	
太田遺跡 (第16次調査)	集落		河川		
太田川遺跡 (第２次調査)	集落	弥生時代後期 古墳時代	包含層	弥生土器 土師器、須恵器	
恩智遺跡 (第28次調査)	集落	弥生時代中期	土坑、ピット	弥生土器	
恩智遺跡 (第30次調査)	集落	中世～近世	河川	土師器、須恵器、瓦器、陶器	
恩智遺跡 (第31次調査)	集落	縄文時代後期～弥生時代中期 中世	包含層 包含層	縄文土器、弥生土器 土師器、瓦器、瓦	
木の本遺跡 (第25次調査)	集落		湿地性堆積		
久宝寺遺跡 (第85次調査)	集落	古墳時代前期 平安時代末	ピット、包含層 包含層	古式土師器 土師器、瓦器	
久宝寺遺跡 (第86次調査)	集落	古墳時代中期～奈良時代 中世	包含層 包含層	土師器、須恵器 瓦器	
郡川遺跡 (第14次調査)	集落				
成法寺遺跡 (第25次調査)	集落		作土	土師器、須恵器	
神宮寺遺跡 (第２次調査)	集落				
東弓削遺跡 (第19次調査)	集落	弥生時代前期～中期 弥生時代後期～中世 中世～近世	包含層 包含層 自然河川	弥生土器 弥生土器、土師器、須恵器、瓦器	
水越遺跡 (第12次調査)	集落		扇状地性堆積		
水越遺跡 (第13次調査)	集落	奈良時代以降	扇状地性堆積	須恵器	
水越遺跡 (第14次調査)	集落	近世	自然河川	陶磁器	
水越遺跡 (第15次調査)	集落		扇状地性堆積		

要　　約	恩智31次では縄文時代後期、弥生時代中期前半、中世の遺物包含層を検出し、集落域の広がりを確認した。東弓削19次では弥生時代中期～古墳時代、中世の遺物包含層が見られたが、新たに弥生時代前期の遺物包含層も確認した。

公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告143

Ⅰ　太田遺跡(第15次調査)
Ⅱ　太田遺跡(第16次調査)
Ⅲ　太田川遺跡(第２次調査)
Ⅳ　恩智遺跡(第28次調査)
Ⅴ　恩智遺跡(第30次調査)
Ⅵ　恩智遺跡(第31次調査)
Ⅶ　木の本遺跡(第25次調査)
Ⅷ　久宝寺遺跡(第85次調査)
Ⅸ　久宝寺遺跡(第86次調査)
Ⅹ　郡川遺跡(第14次調査)
Ⅺ　成法寺遺跡(第25次調査)
Ⅻ　神宮寺遺跡(第２次調査)
XIII　東弓削遺跡(第19次調査)
XIV　水越遺跡(第12次調査)
XV　水越遺跡(第13次調査)
XVI　水越遺跡(第14次調査)
XVII　水越遺跡(第15次調査)

発　行　平成26年３月
編　集　公益財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地２
TEL・FAX072－994－4700

印　刷　㈱近畿印刷センター
表　紙　レザック66　<260Kg>
本　文　ニューエイジ　<70Kg>
図　版　ニューエイジ　<70Kg>